

# 高島 A 遺跡発掘調査報告

- 射水市立新湊南部中学校用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査 -

2007年3月

富山県射水市教育委員会



調査対象地遠景

卷頭 2



SX01 平地式建物検出状況



SX01 炭化物・焼土検出状況



SX02 平地式建物検出状況



SX02 炭化物・焼土検出状況

卷頭 4



高島 A 遺跡出土遺物

# 高島A遺跡発掘調査報告

-射水市立新湊南部中学校用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査-

2007年3月

富山県射水市教育委員会

## 序

富山県射水市は、北は富山湾に面し南に射水丘陵、中央部には肥沃な射水平野が広がる。東西10.9km、南北16.6km、面積は109.18km<sup>2</sup>で、海・野・山がコンパクトに収まった地域です。

当市は、古くから日本海交易や放生津潟に流れ込む河川を利用した水運の交通網が発達し、越中国守に赴任した大伴家持が、その在任中に三島野や奈呉の浦など、射水の情景を『万葉集』に残した風光明媚な土地でもありました。

市内には、旧石器時代以来の遺跡が密集する射水丘陵、古代の神事を色濃く残す下村の加茂神社、中世期に越中の政治・経済・文化の中心地として栄えた放生津、豪華絢爛な江戸文化を今に伝える新湊・海老江・大門の曳山など、各所に先人たちの足跡が残されています。また、約500箇所の埋蔵文化財包蔵地が知られており、県内屈指の遺跡の宝庫となっています。

今回報告する高島A遺跡は射水市鏡宮地区に所在し、隣接する市立新湊南部中学校の生徒によって発見された、弥生・古墳時代の遺跡です。この度、同中学校の改築に先立ち調査した結果、弥生時代中期に焼失した建物跡や沢山の土器が出土しました。

連綿たる土地と人とのつながりや地域社会が築いてきた長い歴史、先人が残した文化は、現代に生きる私たちが未来へ引き継ぐべき貴重な財産であります。本報告書が地域文化の継承、そして新たな文化の創造に多少なりとも役立つことができれば幸いに存じます。

最後に、現地調査から報告書作成まで、多大なご協力・ご助言を賜った関係諸氏に感謝申し上げますとともに、今後とも文化財保護に変わらぬご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

射水市教育委員会  
教育長 竹内 伸一

## 例 言

- 本書は、平成18年度に実施した富山県射水市鏡宮地内に所在する、高島A遺跡の発掘調査報告書である。
- 発掘調査は、射水市立新湊南部中学校用地造成に先立ち、射水市土地開発公社の依頼を受け、射水市教育委員会の監理のもと株式会社エイ・テックが実施した。
- 調査期間・面積及び調査担当者は以下のとおりである。

### 【現地発掘調査】

試掘調査 平成18年5月8日～5月10日

調査担当者 射水市教育委員会文化課 主査 原田義範

〃 主任 田中 明

〃 学芸員 金三津英則

本調査 平成18年7月7日～9月15日

調査面積 1736.6m<sup>2</sup> (A区788m<sup>2</sup> B区948.6m<sup>2</sup>)

調査担当者 射水市教育委員会文化課 学芸員 金三津英則

株式会社エイ・テック 矢島博文 堀井泰樹 宮脇 満 澤田雅志

### 【整理・報告書作成】

平成18年8月1日～平成19年3月16日

担当者 株式会社エイ・テック 矢島博文 堀井泰樹 宮脇 満 澤田雅志

- 本書の執筆・編集は、第2章の1を金三津が担当し、第2章の2と第3章の1・2を澤田、第1章と第3章の3、第5章を宮脇、第4章をパリノ・サーヴェイ株式会社が担当した。
- 調査の実施から本書の作成にあたっては、下記の方々から貴重なご教示・指導をいただいた。記して謝意を表したい。  
(敬称略 五十音順)  
荒井 隆 上野 章 江藤 敦 岡田一広 國本淳一郎 河内公夫 小出拓磨 篠澤正史 下島健弘 下濱貴子  
常深 尚 中島庄一 中村哲也 久田正弘 鶴田泰之 藤田慎一 松尾洋次郎 水野正好 山内基樹 山口辰一
- 現地発掘調査及び整理作業参加者は、下記のとおりである。(敬称略 五十音順)

【現地発掘調査】 青山森明 綱谷歎二 石須栄信 石田弘之 伊藤信敬 井波睦紀 岩本勝國 内山澄子  
内山由雄 大伴 齐 小澤秀雄 岡發 武 甲 輝夫 清田美和子 佐伯 登 佐々木一男  
沢井義明 篠川富範 島田雅山 高島市郎 高原末雄 戸田庄一 水田 修 中山 遼  
森永 博 野上 実 野村保弘 藤井一郎 二口誠治 清 敏之 村上義隆 吉村一義

【整理作業】 上田恵子 沢崎幸子 角崎俊行 原田知佳子 蕨野朋子 前馬みゆき 三島幸代 渡辺悦子  
7. 出土遺物や記録図面等は射水市教育委員会が一括して保存・公開している。なお、出土遺物については、S T - Aの略号を記入した。

## 凡 例

- 本書の挿図に用いた方位は座標北、水平基準は海拔高である。なお、遺構の表記にあたっては下記の略号を使用した。  
S K : 土坑 S D : 溝 S P : 柱穴・小穴 S R : 自然流路 S X : 不明遺構 S B : 捕立柱建物
- 本書の土層及び出土遺物の色調は、小山正忠、竹原秀雄編著『新版標準土色粘』(2005年版)に準拠している。
- 遺構実測図中の表現は次のとおりとした。  
 : 焼上  : 炭化物範囲(土層断面図は黒塗り)  : 地山
- 出土遺物の番号は、実測図・観察表・写真図版の遺物番号にそれぞれ対応している。

## 目 次

第1章 遺跡の位置と環境 .....	1
第2章 調査の経緯 .....	3
1. 調査に至る経緯 .....	3
2. 現地発掘調査及び整理作業の経過 .....	3
第3章 調査の方法と成果 .....	4
1. 調査の方法 .....	4
2. 基本層序 .....	4
3. 遺構および出土遺物 .....	5
第4章 高島A遺跡自然科学分析 .....	30
第5章 総括 .....	32
1. 焼失住居について .....	32
2. 弥生時代中期の平地式建物 .....	32
3. 高島A遺跡出土の土器について .....	34
4. 調査のまとめ .....	36
〈引用・参考文献〉 .....	37

## 挿図目次

第1図 射水市位置図	1
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第3図 調査区位置図	3
第4図 グリッド配置図	4
第5図 基本層序模式図	4
第6図 A区全体図	6
第7図 A区遺構実測図 (SX16)	9
第8図 A区遺構実測図 (SD08・SK27・SK28)	10
第9図 A区遺構実測図 (SK31・SK32・SK33・SK34・SK36・SK39・SK41)	11
第10図 B区全体図	14
第11図 B区遺構実測図 (SX01・SP97・SP98・SP99・SP100)	17
第12図 B区遺構実測図 (SX02・SP92)	19
第13図 B区遺構実測図 (SX01焼土・炭化物範囲・SK105)	21
第14図 B区遺構実測図 (SX02焼土・炭化物範囲・SK107)	22
第15図 B区遺構実測図 (SB01・SD02<SX03>・SD108)	25
第16図 B区遺構実測図 (SK21・SK28・SK29・SK33・SP22)	28
第17図 北陸における弥生時代中期の平地式建物	33
第18図 遺物実測図 1 (土器1~11 : A区SR01)	38
第19図 遺物実測図 2 (土器12~21 : A区SR01・SD06)	39
第20図 遺物実測図 3 (土器22~32 : A区SD06・SD08・SD11・SD14)	40
第21図 遺物実測図 4 (土器33~42 : A区SX16)	41
第22図 遺物実測図 5 (土器43~55 : A区SX16・SD17・SD18・SD22・SD26・SK28・SK31)	42
第23図 遺物実測図 6 (土器56~72 : A区SK27・SK32・SK33・SK34・SK36・SK38・SK39・包含層)	43
第24図 遺物実測図 7 (土器73~87 : B区SR01・SD10・SD17・SK21)	44
第25図 遺物実測図 8 (土器88~104 : B区SK21・SK28・SK29・SK33)	45
第26図 遺物実測図 9 (土器105~126 : B区SK33・SD42・SK53・SD57・SD58・SP59・SP70・SP74・SP88・SD93・SK94)	46
第27図 遺物実測図10 (土器127~150 : B区SX01・SD09・SD23・SX02)	47
第28図 遺物実測図11 (土器151~173 : B区SD27)	48
第29図 遺物実測図12 (土器174~183 : B区SP92・SD78上層)	49
第30図 遺物実測図13 (土器184~201 : B区SD78上層・SD78)	50
第31図 遺物実測図14 (土器202~226 : B区包含層・排水溝・試掘調査・表土掘削)	51
第32図 遺物実測図15 (土器227~234 : A区SK27・B区SD19・SD106・SD27・SD23・SD78上層・SD78)	52
第33図 遺物実測図16 (木製品235~237 : B区SP22・SP92・SP96)	53

## 表目次

第1表 周辺遺跡一覧	2
第2表 年代測定結果	30
第3表 北陸における弥生時代中期の平地式建物一覧	34
第4表 遺構一覧表	54~57
第5表 遺物観察表	58~63

## 写真図版目次

巻頭1 調査対象地遠景	
巻頭2 SX01平地式建物、炭化物・焼土検出状況	
巻頭3 SX02平地式建物、炭化物・焼土検出状況	
巻頭4 高島A遺跡出土遺物	
写真図版1 A区（全景, SR01, SK27・28・31）	65
写真図版2 A区（SD03, SD05・06, SD07・13・24, SD09・10, SD17・18・19, SX16, SD07）	66
写真図版3 B区（SX01全景）	67
写真図版4 B区（SX01）	68
写真図版5 B区（SX02全景）	69
写真図版6 B区（SX02）	70
写真図版7 B区（SB01, SD78上層, SP62）	71
写真図版8 B区（SK21, SP22, SD05, SK54）	72
写真図版9 出土遺物（弥生土器）	73
写真図版10 出土遺物（弥生土器）	74
写真図版11 出土遺物（弥生土器）	75
写真図版12 出土遺物（弥生土器）	76
写真図版13 出土遺物（弥生土器）	77
写真図版14 出土遺物（弥生土器・土製品）	78
写真図版15 出土遺物（石）	79
写真図版16 出土遺物（木製品）	80

## 第1章 遺跡の位置と環境

射水市は、富山県のはば中央に位置し、県下の二大都市である富山市と高岡市に隣接している。北陸自動車道や東西を走る国道8号線により、交通の便にも恵まれている。このため、高度経済成長期以降は住宅団地の造成が頻繁に行われ、ベッドタウン化が進んでいる地域である。

地勢は、北は富山湾に面し、射水丘陵を背後に射水平野が広がる穏やかな地形となっており、庄川・下条川などの河川が日本海へと流れている。

射水平野は、東の神通川と西の庄川に挟まれ、庄川の新扇状地や神通川の旧扇状地が重なり形成された、東西約11km、南北約7kmの複合扇状地性三角州沖積



第1図 射水市位置図

平野で、標高は約0～5mを測り、旧大門町と旧大鳥町との字界周辺から北へと低くなる傾向にある。地質学上では、低地の形成は旧新湊市周辺に存在した古放生津潟の影響によるものとされている。縄文時代前期の海進期に古放生津潟が形成され、中期以降に気候の寒冷化により海水面の低下が生じた。後晩期頃になると放生津潟に流れる神楽川・下条川・鍛冶川などの河川が土砂の堆積を促し、海岸近くの放生津潟(現富山新港)を残し周辺に広大な低湿地を形成した。河川によって運ばれた砂や粘土は、所々に微高地を形成していったが、標高差を殆ど持たない放生津潟周辺では、河川の流れが滞留し沼沢地を形成した。また、湿原の植物が枯れることにより泥炭が堆積し平野部が開けていくことになる。乾田化の進んだ現在ではかつての面影を留めていないが、数十年前までは縱横に水路が走る水郷地帯として知られていた。現在でもなお、神楽川や下条川などの小河川は放生津潟に向かって流れている。

現在、射水市内には約500か所の遺跡が確認されている。古くは丘陵部に立地する新造池A遺跡から旧石器時代の石器が発見されている。縄文時代には生活の場として、弥生～古墳時代にかけては方形周溝墓や古墳が確認されていることから墓域としても利用されていたことが考えられる。水稻耕作が本格化した弥生時代以降には遺跡数が飛躍的に増加し、集落遺跡が河川に近い自然堤防や微高地上に形成された。古代以降には、丘陵部と平野部及び日本海とを河川が結び、交通・輸送の要衝として多くの集落が営まれた。中世になると、旧新湊市街地にあたる放生津が発展し、守護所が設置されるなど、越中の政治・経済・文化の中心地として栄えた。

高島A遺跡は、庄川右岸に形成された標高約1.5m前後の沖積低地に立地する弥生・古墳時代を主体とした遺跡である。射水市鏡宮に所在し、昭和47年及び平成5年発行の富山県埋蔵文化財公庫地図では、高島A遺跡と高島B遺跡の2遺跡として周知されていた。しかし、平成8年度に旧新湊市新湊考古歴史サークルの諸氏等によって行われた分布調査により、さらに周辺にも遺物が散布することが確認されたため、両遺跡を包括した上で範囲を拡張したのが、現在知られている高島A遺跡である。平成9年の調査では、主に弥生時代中期後葉に属する遺物が確認され、周溝遺構2基と方形周溝墓1基が検出された。また平成14年の試掘調査により、遺跡北半部の遺構分布範囲が特定された。平成17年度には、土地区画整理事業に伴う調査が行われ、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての遺構・遺物が多数確認され、装饰性に富んだ石製品が出土した。

本遺跡の周辺は、比較的の遺跡が多く分布する地域である。特に今回の調査区から国道472号線を挟んだ東側に隣接する作道遺跡では、弥生時代中期を主体とする遺物が確認されており、高島A遺跡との関連性が伺える。南側には縄文時代から近世までの複合遺跡である高木・荒畑遺跡、北西には高岡市に所在する弥生時代後期から中世までの遺跡として中曾根遺跡が存在する。他の弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺跡としては、朴木A遺跡・朴木C遺跡・松木中鹿遺跡・松木遺跡・中曾根西遺跡や津幡江遺跡などが存在し、これらを含めた周辺遺跡との関連が今後の調査に期待されるところである。

(宮脇)



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:50,000)

番号	名 称	時 代・種 別	備 考
1	高島A遺跡	弥生(中)～古墳(中)集落、中世散布地	弥生中期方形周溝墓、栗林系土器、弥生後期中心？
2	作道遺跡	弥生(中)集落、古代・中世散布地	弥生中期中心、栗林系土器
3	朴木A遺跡	弥生・古代・中世散布地	櫛撫文土器の出土記録有
4	朴木C遺跡	弥生～中世散布地	弥生中期土器出土、弥生後期中心？
5	中曾根遺跡	弥生集落、古墳～中世散布地	弥生後期中心
6	中曾根西遺跡	弥生集落、古代・中世散布地	弥生後期住居址、方形周溝墓、栗林系土器
7	松木遺跡	弥生(中・後)集落	弥生後期中心
8	松木七口遺跡	弥生・古代・中世散布地	弥生後期中心
9	松木中鹿遺跡	弥生～古墳集落、中世散布地	弥生終末～古墳前期中心
10	高木・荒畑遺跡	古代集落？、縄文(後)～弥生・中世散布地	古代中心
11	津幡江遺跡	弥生(中)集落、縄文・古墳散布地	栗林系土器
12	北高木遺跡	弥生・古代・中世集落、縄文散布地	古代人面墨書き上器、木製祭祀具等多数
13	小林遺跡	弥生～中世集落	栗林系土器
14	下村加茂遺跡	弥生(前?)・中世集落	弥生前期？木製品貯蔵施設、中世居館
15	H S -0遺跡	弥生・中世集落、縄文・古墳・古代散布地	弥生後期周溝、土器多数出土
16	愛宕遺跡	古代散布地	

第1表 周辺遺跡一覧

## 第2章 調査の経緯

### 1. 調査に至る経緯

平成18年4月、射水市教育委員会教育総務課から、射水市立新湊南部中学校校舎建設設計画の照会を受けた。事業計画は、現在の新湊南部中学校グラウンド及び武道館の南側に、新たに用地を取得し、老朽化した現校舎及び体育館を移転改築するものである。事業計画地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である高島A遺跡の範囲に該当するため、文化財保護法第93条第1項の通知及びその保護措置を講ずるための事前の試掘調査が必要となった。

試掘調査は、継続利用される現グラウンド及び平成11年度に試掘調査実施済みの現武道館敷地を除く、新規用地取得地の約10,000m<sup>2</sup>を対象に、平成18年5月8日～5月10日にかけて実施した。

試掘調査の結果、事業計画地の一部において弥生時代中期を中心とする遺構・遺物の存在を確認した。この調査結果を基に担当部局との協議を重ね、現状保存が不可能となる校舎建設部分の約1,700m<sup>2</sup>について本發掘調査を実施し、記録保存を行うことで合意に至った。現地發掘調査は、射水市教育委員会の監理のもと、株式会社エイ・テックが実施した。

(金三津)

### 2. 現地發掘調査及び整理作業の経過（第3図参照）

現地における發掘調査は、対象範囲が農道によって東西に分断されているため、西側をA区・東側をB区として調査を行った。7月10日より器材搬入・調査区設定等の事前準備を行い、12日にラジコンヘリによる調査前の全景写真撮影を行った。14日より表土掘削を開始、これと並行して18日より作業員を投入しての人力掘削を開始した。19日にA区の基本測量・グリッド杭を設置し、翌日調査区内の表土掘削を完了した。25日にB区の基本測量・グリッド杭の設置を行った。26日よりA区自然河川跡の掘削を優先して作業を行った。8月4日よりA区の遺構検出作業を開始した。7日よりB区の遺構検出作業を開始し、17日より同調査区の遺構掘削作業を開始した。B区で検出した焼土を伴う円形周溝状遺構（SX01・02）について、8月11日に富山県埋蔵文化財センターの調査指導を受け、焼失住居の可能性が生じた。弥生時代中期に属する焼失住居の検出例が極めて少ないとから、これらを重要な遺構と判断した。協議の結果、SX02南半部を拡張して遺構全体を調査に含めることとし、21日より拡張区の調査に着手した。同日、A区の遺構掘削が完了したため、翌日ラジコンヘリを使用した全景写真撮影及び航空写真測量を行い、25日に埋め戻しを行った。9月9日にラジコンヘリを使用したB区の全景写真撮影及び航空写真測量を行い、15日にB区の埋め戻し作業を終え、現地發掘調査を完了した。

整理作業は、出土遺物の洗浄及び注記作業を現地發掘調査と並行して行った。注記作業にはインクジェットマーカーを使用した。現地發掘調査の完了後、出土品の接合・実測・発掘調査報告書作成作業に着手した。

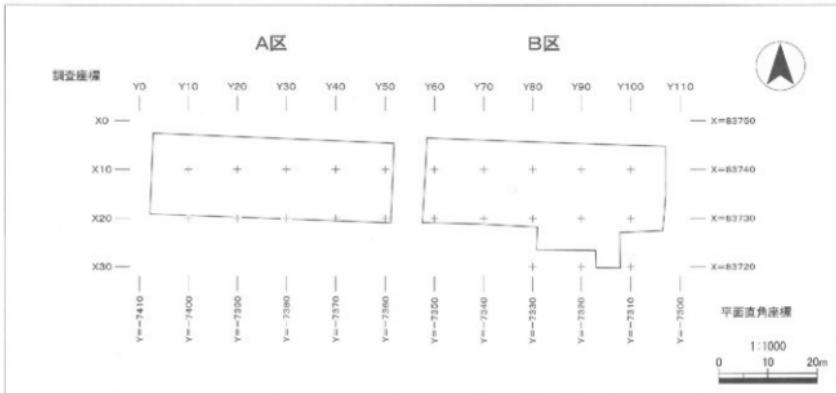


第3図 調査区位置図 (1:2,500)

### 第3章 調査の方法と成果

#### 1. 調査の方法 (第4図参照)

現地発掘調査は、A・B区ともバックホウとクローラーを使用し、表土除去を行った。国土地理院設定平面直角座標系第VII系のX = 83,750、Y = -7,410を原点(X = 0、Y = 0)とし、南北方向をX軸、東西方向をY軸とした。また、標高は国土地理院設定東京湾平均海面からの高さを使用した。X軸方向は5m、Y軸方向は10mピッチの基準杭を打設し、1m × 1mのグリッドを用いて包含層出土遺物の取り上げを行った。その後、調査区周囲に排水溝を設け、遺構検出作業を行い、遺構概略図(1/100)を作成し検出写真を撮影した。遺構番号の設定後、土層観察用のベルトを適宜設定し掘削を開始した。重要と考えられる遺構や土器等がまとまって出土した遺構については、平面図(1/10・1/20)を作成及び6 × 7判を使用して写真撮影を行った。調査区壁面の精査や遺構の掘り下げ、遺物の取り上げを人力で行った。また、遺構平面図の作成については両区とも航空写真測量を用いている。

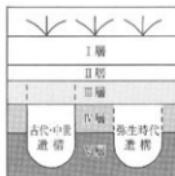


第4図 グリッド配置図 (1:1,000)

#### 2. 基本層序 (第5図参照)

調査対象地周辺の現況は標高約1.3m前後の水田地帯である。調査区は東西約106m・南北約17mであるが、標高差約0.3mと比較的平坦な地形のため、層序に関してもほぼ一定の堆積状況を示している。I・II層は現代の水田耕作土であり、II層は床土である。III層は古代～中世にかけての遺構面と考えられる。IV層は弥生時代の遺物を含む包含層と考えられるが、場所により確認できない箇所が存在する。これは圃場整備等の際、削平を受けたものと考えられる。V層は地山層であり、上面はグラウシ化が進み灰白色を呈する。V層上面から弥生時代に属する遺構が掘り込まれており、本層を弥生時代の遺構確認面とし調査を行った。  
(澤田)

I層 黒褐色粘土 (10YR3/1)	現耕作土
II層 黒褐色粘土 (10YR3/1)	耕作土床土
III層 黒褐色粘土 (7.5YR3/1)	古代・中世遺構面
IV層 関灰色粘土 (10YR4/1)	弥生時代包含層
V層 淡黄色粘土 (5Y8/3)	地山層 (遺構検出面)



第5図 基本層序模式図

### 3. 遺構および出土遺物

調査の結果、調査区のはば全域から遺構・遺物を確認した。遺物を伴う遺構は大半が弥生時代中期に属する。A・B区をまたいで東西方向に流れる自然河川を確認した。また両区に共通して中世以降の南北に併走する溝を数条検出した。A区西側には前述の溝とは性格が異なるものと考えられる南北に走行する溝がY字に分岐する形で検出した。A区では自然河川・溝(SD)26条・土坑(SK)15基・ピット(SP)22基・不明遺構(SX)1基を検出した。また、B区ではA区から続く自然河川・円形の周溝を有する平地式建物2棟(SX01・02)・掘立柱建物1棟(SB01)・溝(SD)30条・土坑(SK)16基・ピット(SP)32基・不明遺構1基(SX03)を検出した。SX02は遺構が南側の調査区外に伸びるため、調査範囲を拡張して遺構全体の把握を行うことになった。拡張の結果、SX02の周溝を一部共有する形で方形の周溝を持つ掘立柱建物(SB01)を検出した。

出土遺物は、弥生土器を中心として土製円盤、磨製石斧、石鎚、石包丁、ヒスイ原石及び緑色凝灰岩片、管玉未成品、木製品、木柱根などが出上した。遺物の多くはB区、SX01・02の周溝やSK21などの土坑内より出土している。報告書掲載遺物の選定及び実測図化にあたっては、土器類は口縁部や、比較的の残りが良い遺構出土のもの・全体形状の判明するものを中心とし、石器及び石製品、木製品は、完形品及び特徴的なものを抽出した。

#### 【A区】

##### SR01（第6-10図）

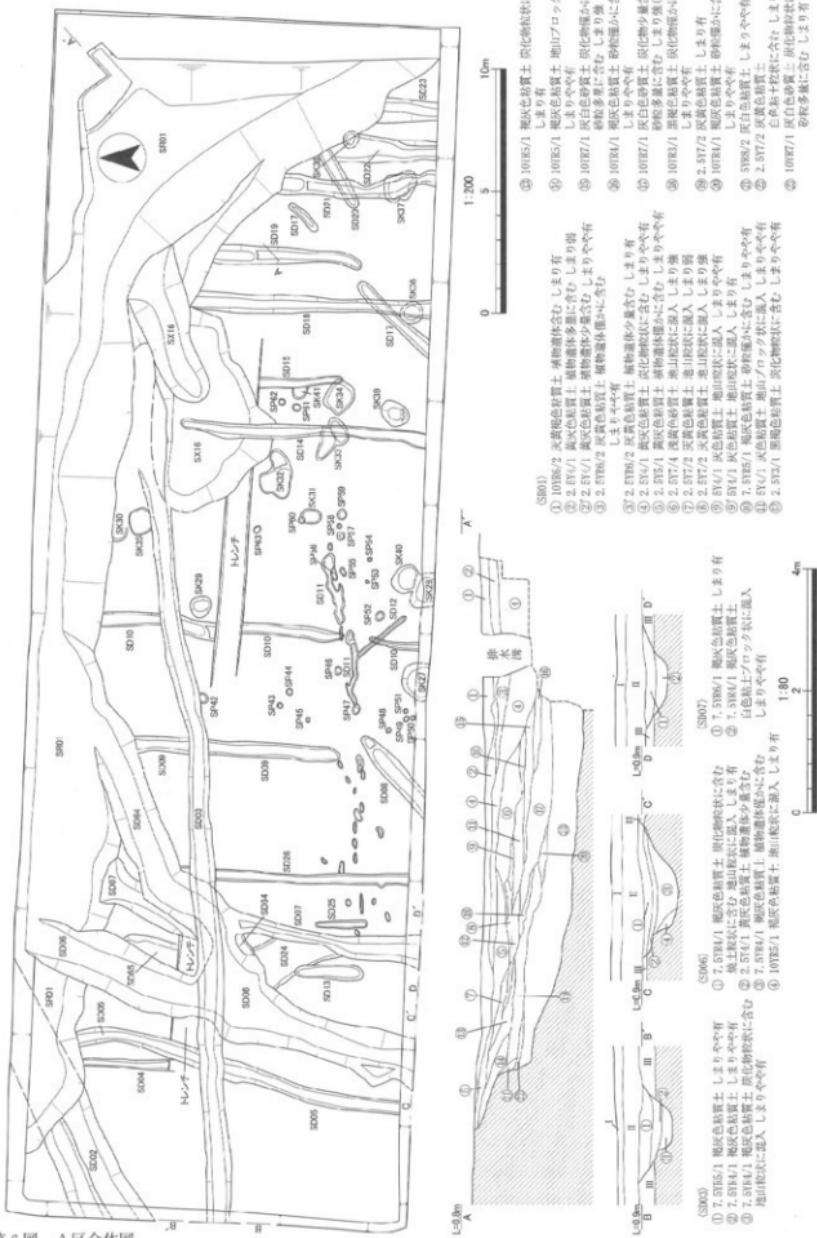
SR01はA・B両調査区にまたがる自然河川である。A区では調査区北壁に沿って東西方向に延び、東端部で南へ湾曲する。B区では調査区南西端に流路の東岸部が位置し、調査区南方40m付近まで直線的に延びることが試掘調査で確認されている。調査区内では延長約69mを確認しており、最大幅約16mで、検出面からの深さは約1.5mを測る。断面形態は逆台形を呈し、SD02・04・05・06・07・09・10・18・19・21・22・23・64・SK30に切られている。上層には植物遺体が多く含まれ、中層から下層にかけて灰色粘質土と砂・炭化物を含む層が交互に堆積する。

A・B区共に、弥生時代中期の土器を中心とした遺物(A区:第18・19図1~15・B区:第21図73~75)が出土している。またA区では①層から木製品と自然木が、B区では上層(②・③・④層)から樹皮が遺存する自然木が数点出土している。弥生時代中期以降の遺物は確認できなかった。

弥生土器は、壺・壺・繩目壺等が出上している。1・2・4・11は壺で、1は口縁部内面に斜行短線文が2列めぐる。2は外面に直線文・縦状文が交互に施文される。4は底部を欠損するが、全体の器形がほぼ判明する。口縁部と胴部の径はほぼ等しく、口縁部を水平近くまで外反させ、小波状口縁とする。11は内外面に草木類を原体とする斜位の条痕調整が施され、底部には網代痕がある。他の遺物よりやや古い様相を示す土器である。3・9・10・12は壺で、3は外面に4条の直線文が施文され、その下に扇形文が施される。また内面は口縁端部から垂下文が施される。9は内外面共に無文で、口縁部はヘラ状具によって小波状口縁とする。④層からの出土である。10は繩目壺で、外面には上から波状文・直線文が交互に施文され、最下段には2列の三角形刺突文がめぐる。12は胴部で、最大径が42.6cmである。内面上下部は斜めにハケ調整が行われ、整合部にあたる最大径部を細かいタテハケ調整が丁寧に行われる。15は壺の胴部片と考えられるもので、器面に横位の沈線を引き、その間に櫛状具による刺突文を充填する。栗林式土器の影響を受けたものと考えられる。73は小型鉢で外面に竪方向の丁寧なミガキがあり、口唇部を刻む。

##### SD02（第6図）

調査区東端に位置し、南西から北東に延びる溝である。断面形態は皿状を呈し、規模は、最大幅2.54mで、検出面からの深さは0.26mを測る。遺構はⅡ層上面から掘り込まれており、SR01を切る。図示していないが、覆土から染付けの陶磁器片1点と下層から珠洲焼大壺片1点が出土している。圓場整備以前の用水路跡等の用途が考えられる。



第6図 A区全体図

#### SD03（第6図）

調査区西端からSR01方向に、調査区を東西に縦断するように直線的に延びる溝である。断面形態は逆台形を呈し、規模は、最大幅1.14mで、検出面からの深さは0.29mを測る。遺構はⅢ層から掘り込まれており、SD05・06・09・10・26・64・SX16・SK35・SP42を切る。上層には植物遺体が多く含まれる。遺物は出土しなかった。

#### SD25（第6図）

SD07の東側に位置し、南北に延びる溝である。規模は、最大幅0.34mで、検出面からの深さは0.08mを測る。断面形態は皿状を呈する。遺物は弥生土器の細片が2点出土しているが、図示できるものはない。

#### SD26（第6図）

SD25の東側に位置し、南北に直線的に延びる溝である。規模は、最大幅0.50mで、検出面からの深さは0.09mを測る。断面形態は皿状を呈し、SD64を切りSD03に切られている。遺物は弥生土器片が数点出土している。52はミニチュア土器で、53は小型の甕又は壺底部と考えられる。両者ともX17・Y16の位置から出土した。また、2個体ともに底部までナデ調整が行われ、小型品としては丁寧な作りである。

#### SD14（第6図）

SK32の東側に位置し、南北に直線的に延びる溝である。規模は、最大幅0.60mで、検出面からの深さは0.10mを測り、北端部では、南端部と比較して底面レベルが0.26m低くなっている。断面形態は皿状で、SX16・SK33を切る。覆土から弥生土器の口縁部片（第20図32）が出土している。

#### SD18（第6図）

SX16の南東側に位置する、南北方向に直線的に延びる溝である。規模は、最大幅0.76mで、検出面からの深さは0.16mを測る。断面形態は皿状を呈し、SR01・SD17・SK36を切る。遺物は弥生土器片10点が出土しているが、細片となったものが殆どで、（第22図50）の1点のみ掲載した。50は器種不明の胴部片で、外面に沈線と半月形の刺突文が横位にめぐる。胎土に空母を含み、栗林式土器の撒入品と考えられる。

#### SD19（第6図）

SD18の東側に並行する溝である。南端が西方向に曲がり、北端部で底面が1段下がる。規模は、最大幅0.82mで、検出面からの深さは0.16mを測る。断面形態は皿状を呈し、SR01を切る。遺物は出土しなかった。

#### SD21（第6図）

SD19の東側に並行する溝である。北端部で底面が1段下がる。規模は、最大幅0.86mで、検出面からの深さは0.22mを測る。断面形態は皿状を呈し、SR01・SD20・SK37を切る。弥生土器の細片13点が出土しているが、図示できるものはない。

#### SD22（第6図）

SD21の東側に並行する溝である。規模は、最大幅1.14mで、検出面からの深さは0.19mを測る。断面形態は皿状を呈し、SR01・SD20・SK38を切る。弥生土器の細片12点が出土しているが、細片となったものが殆どで、（第22図51）の1点のみ掲載した。51は器種不明の胴部片で、外面に弧状の沈線文が施される。胎土は在地の土器に近く、栗林式土器の影響を受けたものと考えられる。

#### SD23（第6図）

SD22の東側に並行する溝である。規模は、最大幅1.04mで、検出面からの深さは0.07mを測る。断面形態は皿状を呈し、SR01を切る。遺物は出土しなかった。

#### SD06・64（第6図）

SD05の東側に位置する溝である。中央部でSD64が東方へ分歧し、SD06はそのまま北へ延びる。規模は、最大幅

1.92mで、検出面からの深さは0.38mを測る。分岐地点以南の部分を両者で共有しているが、SD64が先に埋没している。両者共に断面形態は逆台形で、SD06はSR01・SD65を切り、SD03に切られている。SD64はSD24を切り、SD03・07・09・26に切られている。遺物はX12・Y10の下層から弥生土器(第19・20図16~22)がまとめて出土している。

17・20・21は壺で、17は口縁端部にキザミがあり口縁部内面に羽状文がめぐる。20は口縁部が強く外反し、内面に斜行短線文が2列施文される。22は講中央部のX12・Y10付近の底面から出土した。肩部外面には、上方から直線文5条・簾状文1条・直線文1条の順に施文される。

#### SD07 (第6図)

SD06の東側に位置する溝で、SD06に並行し北側でやや東方向に曲がる。規模は、最大幅1.20mで、検出面からの深さは0.27mを測る。断面形態は逆台形を呈し、SR01・SD24・64を切る。遺物は出土しなかった。

#### SD24 (第6図)

SD64の東側に位置する溝または土坑である。規模は、最大幅1.90mで、検出面からの深さは0.05mを測る。断面形態は皿状を呈し、SD07・13に切られている。弥生土器の細片1点が出土している。

#### SD08 (第6図)

調査区中央でSD09の南側に位置し、南西から北東方向に延びる溝である。南側が調査区外に延びるため、全体の規模は不明である。東端に0.12mの段差がある。規模は、長さ3.44m以上、最大幅0.86mで、検出面からの深さは0.19mを測る。断面形態は皿状を呈する。堆積状況は、②層に炭化物が混入し、口縁部が下向きに弥生土器(第20図25・26)が2個体、覆土に押し潰された状態で出土している。覆土と遺物の出土状況から滑に廃棄され人為的に埋められたことが伺える。

遺構からは、上記の2個体を含む弥生土器(第20図23~30)が出土している。25~28・30は壺で、25・26はともに口縁端部を刻む。25は口縁部と胴部の径がほぼ等しく、口縁部は緩やかに外反する。26は口縁部が強く屈曲し、焼成後に底部を穿孔している。27は頭部から肩部にかけて直線文・波状文が施文される。30は口縁部を小波状口縁とし、外側は直線文を2条施文する。その間に3列の斜行短線文が施される。内面は口縁端部から垂下文が2条1組で2か所施文される。破片から1周4か所の文様構成と想定できる。また胎土に砂粒を多量に含む。29は壺で、口縁部内面に2列の羽状文をめぐらせ、口縁端部には櫛状具を用いた糾位の刺突文が施される。

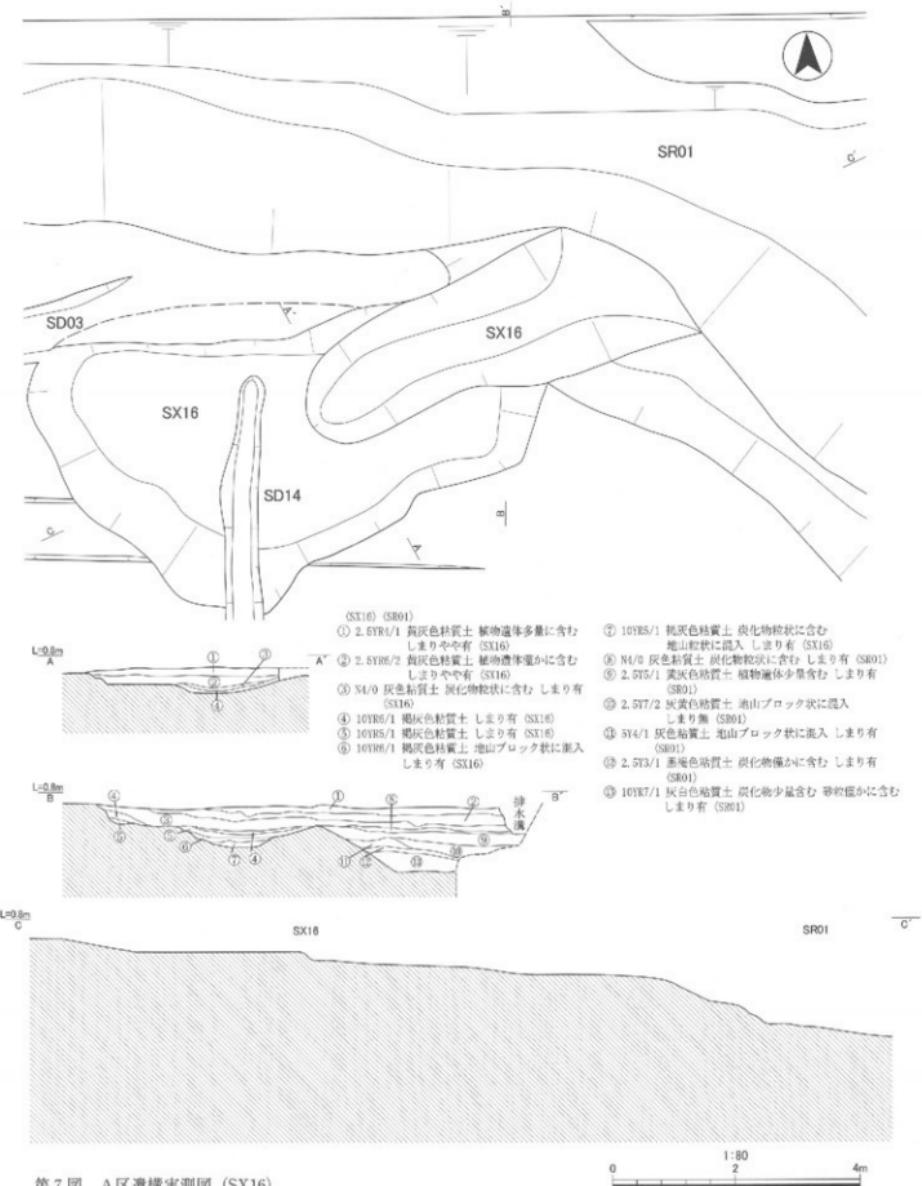
#### SD11 (第6図)

SD08の東側に位置し、東西に蛇行する溝である。規模は、最大幅0.54mで、検出面からの深さは0.07mを測る。断面形態は皿状を呈し、底面は凹凸である。SP47に切られている。弥生土器の細片29点がX15・Y28、X15・Y29からまとめて出土している。31は器種不明の胴部で、外側は横位の沈線と線の上下に半月形の刺突文がめぐる。胎土に雲母を含み、栗林式上器の搬入品と考えられる。

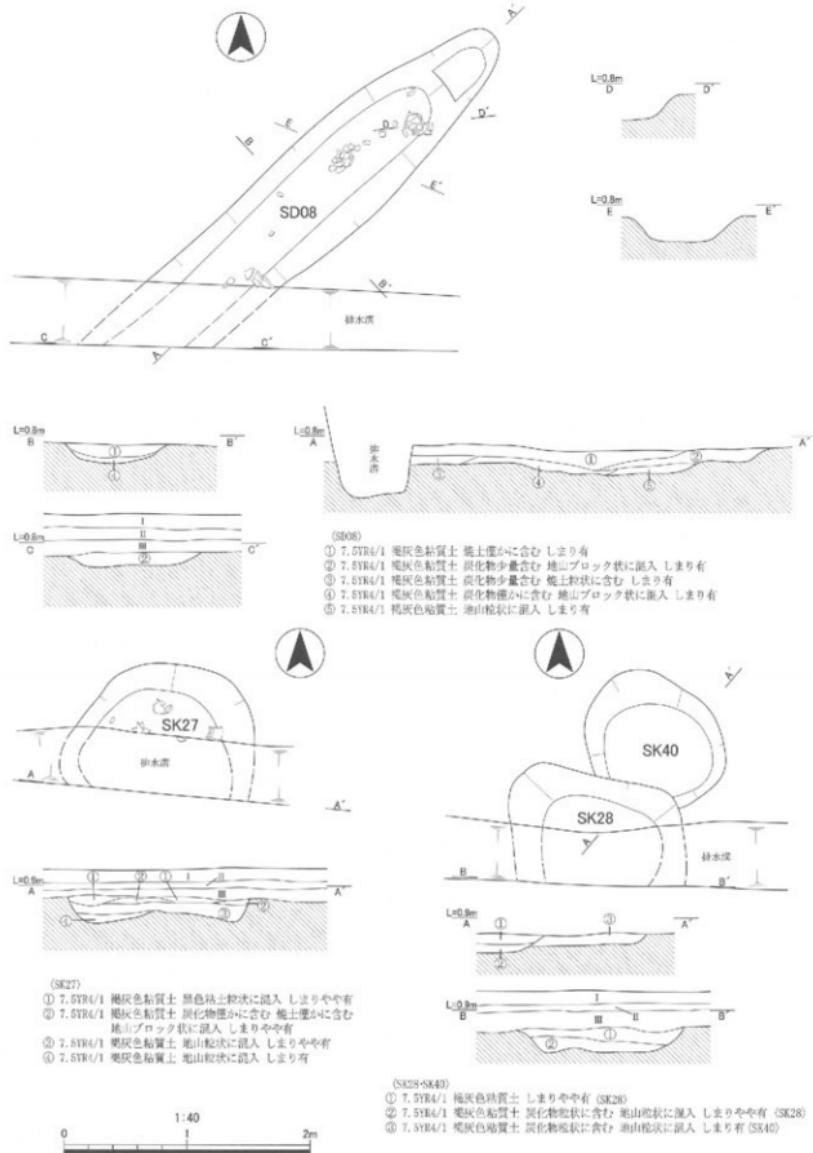
#### SX16 (第6・7図)

調査区の東部、SR01の湾曲部内側に隣接する。不整形な平面形状であり、西側に土坑を構築し、土坑の中央部から東側に1段深い溝を掘り込み、この溝によってSR01と結合している。溝は、SR01の⑨層堆積後に構築され、SR01と同時期に埋没している。規模は、西側の土坑部分で東西約7.80m、南北の最大幅約5.40m、検出面からの深さは0.40mを測り、東側の溝部分で東西約6.10m、南北幅約2.35mを測る。溝部分は土坑よりも0.20~0.50mあまり深く掘り込まれている。断面形態は皿状で、SD03・14に切られている。

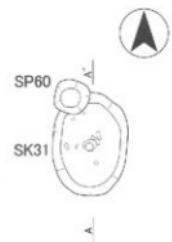
土坑部分の中央部底面を中心に弥生土器(第21・22図33~48)がまとめて出土している。33~39は壺で、34の内面は口縁部から頭部にかけて短い重下文が2本1組で施文される。破片から1周4か所の文様構成と想定できる。38は外側に上から間隔をあけて2条の直線文を施文し、それぞれの直線文下に斜行短線文が施される。内面は口縁端部に、斜



第7図 A区遺構実測図 (SX16)



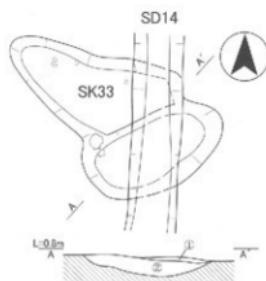
第8図 A区造構実測図 (SD08・SK27・SK28)



(SK31)  
① 7.5YR4/1 暗灰色粘質土 炭化物粒状に含む 地山塊状に混入 しまり有  
② 7.5YR4/1 暗灰色粘質土 炭化物粒状に含む 地山塊状に混入 しまり有



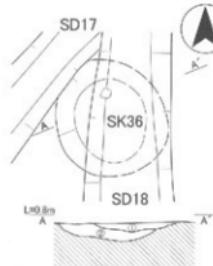
(SK32)  
① 7.5YR4/1 暗灰色粘質土 炭化物少量含む 地山塊状に含む しまり有  
② 7.5YR4/1 暗灰色粘質土 炭化物少量含む 地山塊状に含む しまり有



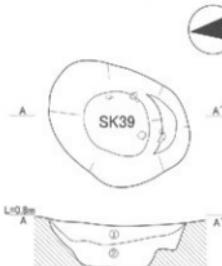
(SK33-SD14)  
① 7.5YR4/1 暗灰色粘質土 炭化物粒状に含む しまり有 (SD14)  
② 7.5YR4/1 暗灰色粘質土 炭化物粒状に含む 稲上層中に含む 地山塊状に混入 しまり有 (SK33)



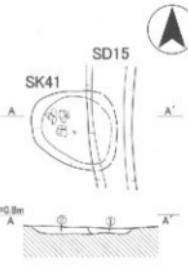
(SK34)  
① 7.5YR4/1 暗灰色粘質土 炭化物少量含む 泥土粒状に含む 地山塊状に混入 しまり有  
② 7.5YR4/1 暗灰色粘質土 炭化物少量含む 泥土粒状に含む 地山ブロック次に混入 しまり有



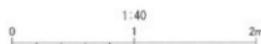
(SK36-SD18)  
① 7.5YR4/1 暗灰色粘質土 炭化物粒状に含む しまり有 (SD15)  
② 10YR4/1 暗灰色粘質土 炭化物粒状に含む 稲上層次に含む しまり有 (SK38)



(SK39)  
① 7.5YR4/1 暗灰色粘質土 炭化物粒状含む 地山ブロック次に混入 しまり有  
② 7.5YR4/1 暗灰色粘質土 炭化物粒状に含む 地山塊状に混入 しまり有



(SK41-SD15)  
① 7.5YR4/1 暗灰色粘質土 しまり有 (SD15)  
② 7.5YR4/1 暗灰色粘質土 炭化物粒状に含む 泥土粒状に含む 連山粒状に混入 しまり有 (SK41)



第9図 A区遺構実測図 (SK31・SK32・SK33・SK34・SK36・SK39・SK41)

行短縦文がめぐり、口縁部から頸部にかけて垂下文が2本1組で施文される。40は無頸壺である。口縁端部に台形の突帯を貼り付け、焼成前に外面から2孔一対の穿孔が行われる。外面は横位の細いハケ調整の後、口縁部をナデ消している。内面はハケ調整後、縦方向にナデが行われる。

42～47は壺で、45は大きく張り出した球形の胴部をもつ。口縁部は摩滅が著しいが、小波状口縁と考えられ、端部を刻む。外面は頸部から肩部にかけ間隔をあけて4条の直線文が施され、直線文間に上から順に施文文・波状文・兼状文の順に施文される。胴部はハケ調整後に粗いミガキが行われる。また口縁端部内面を刻む。47は口縁端部を指頭押圧によって、小波状口縁とする。48は台付鉢である。口縁端部の外外面を刻み、外面の口縁下部に円形突起が2個一対で張り付いている。

#### SD17（第6図）

調査区東側、SK36の西側に位置する溝である。SD19付近で一度途切れるが、SR01の南岸付近まで延びる。規模は最大幅0.58mで、検出面からの深さは0.08mを測り、断面形態は皿状を呈する。SK36を切り、SD18に切られている。外面に直線文・兼状文が施文された弥生土器片（第22図49）が出土している。

#### SD20（第6図）

SD19の東側に位置し、北東から南西に直線的に延びる溝である。規模は、最大幅0.54mで、検出面からの深さは0.13mを測る。断面形態は皿状を呈し、SR01・SD21・22に切られている。遺物は出土しなかった。

#### SK27（第6・8図）

SD08の東側に位置する土坑である。南側が調査区外となるため、全体の規模は不明だが、現況で長径1.57m×短径1.08mの円形を呈し、検出面からの深さは0.15mを測る。断面形態は逆台形を呈する。弥生土器1個体（第23図56）及び緑色凝灰岩片（第32図227）が出土している。56は壺で、口縁端部を刻み、外面はハケ調整後にミガキが行われる。227は長方形に加工された緑色凝灰岩片で、擦切り痕がみられ管玉の未製品と考えられる。56の口縁部破片付近から出土している。

#### SK28（第6・8図）

SK27の東側に位置する土坑で、東西1.38mを確認している。平面は梢円形を呈すると推定されるが南半分は調査区外のため不明である。検出面からの深さは0.12mを測る。断面形態は逆台形を呈し、SK40を切る。遺物は弥生土器片が2点出土している。54は甕または壺の底部片で、底部中央には焼成後に内外両面から穿孔が行われる。

#### SK40（第6図）

SK28の北側に位置する土坑で、長径1.22m×短径1.07mの円形を呈する。検出面からの深さは0.11mを測る。断面形態は逆台形を呈し、SK28に切られている。遺物は弥生土器細片が1点出土している。

#### SK31（第6・9図）

SD11の東側に位置する土坑で、長径0.88m×短径0.60mの梢円形を呈する。検出面からの深さは0.05mを測る。断面形態は皿状を呈し、SP60に切られている。遺物は土坑中央部から弥生土器の底部（第22図55）及び弥生土器片が8点出土している。55は甕または壺の底部片で、底面中央部が窪み、底面は丁寧なナデが行われる。外面はハケ調整が行われる。

#### SK32（第6・9図）

SK31の北東側に位置する土坑で、長径2.05m×短径1.40mの不整形を呈する。検出面からの深さは0.15mを測る。断面形態は皿状を呈する。遺物は東側部分から弥生土器の細片42点がまとめて出土した。57は甕で、口縁端部内面を2条一対で刻む。58は甕または壺の底部である。

#### SK33（第6・9図）

SK32の南東側に位置する土坑で、長径1.90m×短径1.18mの不整形を呈し、南側が1段深くなる。検出面からの深さは0.17mを測る。断面形態は皿状を呈し、SD14に切られている。遺物は西側から弥生土器の細片19点が出土している。59は深鉢の口縁部片で、口唇部を刻み波状口縁とする。外面に草木類を原体とする斜位の条痕調整が施される。他の遺物よりやや古い様相を示す土器である。胎土も他の土器とは異なり黒色が強い。60は壺の胴部片で、直線文が3条・簾状文が1条施文される。61は口縁部片で口縁端部を刻む。

#### SK34（第6・9図）

SK33の東側に位置する土坑で、長径1.28m×短径1.08mの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは0.16mを測る。断面形態は皿状を呈し、SD15に切られている。遺物は中央部から弥生土器の壺（第23図62）及び細片12点が出土している。

#### SK39（第6・9図）

SK34の南側に位置する土坑で、長径1.18m×短径0.94mの楕円形を呈する。検出面からの深さは0.46mを測る。断面形態は逆台形を呈し、南壁面に段差がある。弥生土器の細片18点が出土している。66は壺の口縁片で、口縁端部外面に羽状文が施される。67は壺の口縁部片で、ヘラ状具によって小波状口縁とする。

#### SK41（第6・9図）

SK34の北側に位置する土坑で、長径0.47m以上×短径0.65mの楕円形と推定される。検出面からの深さは0.07mを測る。断面形態は皿状を呈し、SD15に切られている。遺物は弥生土器の細片8点が出土している。

#### SK35（第6図）

SK30の東側に位置する土坑で、長径1.16m×短径0.88mの円形を呈する。検出面からの深さは0.03mを測る。断面形態は皿状を呈し、SD03に切られている。遺物は弥生土器の小破片9点が出土している。

#### SK36（第6・9図）

SD17の南側に隣接する土坑で、長径0.98m×短径1.08mの円形を呈する。検出面からの深さは0.15mを測る。断面形態は皿状を呈し、SD17・18に切られている。弥生土器の底部片と土器細片19点が出土している。63は器種不明の底部片で、胎土に雲母を含み、栗林式土器の搬入品と考えられる。

#### SK37（第6図）

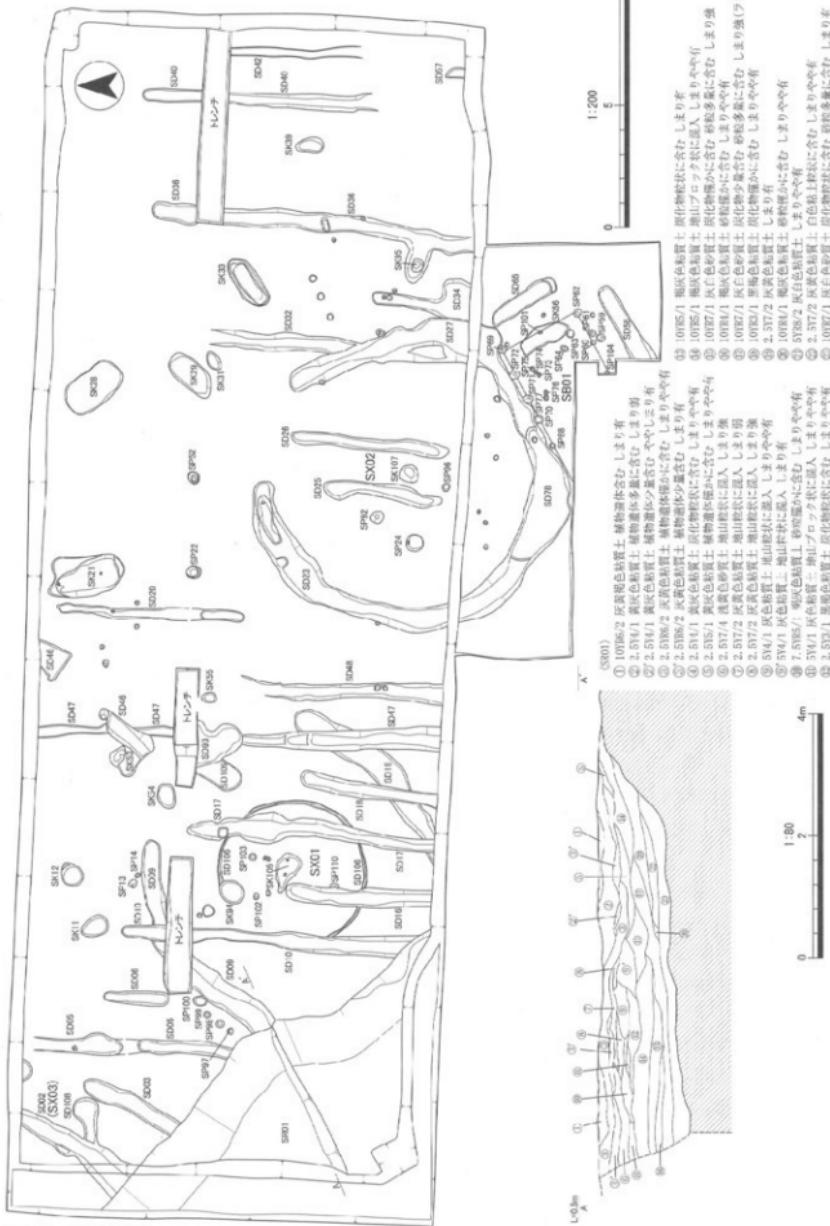
SD20の南側に位置する土坑で、長径1.55m×短径1.24mの不整形を呈する。検出面からの深さは0.09mを測る。断面形態は皿状を呈し、SD21に切られている。底面から緑色凝灰岩片1点・弥生土器の細片1点が出土している。

#### SK38（第6図）

調査区東端部、SR01・SD22の合流地点に位置する土坑で、長径0.70m×短径0.62mの楕円形を呈する。検出面からの深さは0.17mを測る。断面形態は皿状を呈し、SR01・SD22に切られている。弥生土器の細片3点が出土している。64は壺の口縁部片と考えられる。器面に平行沈線と半月形の刺突文がめぐる。栗林式土器の影響を受けたものと考えられる。65は壺の口縁部で、端部がやや内湾する。

#### 包含層出土遺物

（第23図68～72）は包含層出土遺物である。68は壺の口縁部で、X19・Y19から出土している。外面の口縁端部に三角形連続突起が飾られ、口縁端部内面に羽状文が施される。69は壺の口縁部で、X18・Y17から出土している。70は壺で、X14・Y3から出土した。小波状口縁で、上から直線文・簾状文・直線文・斜行短線文が2列施文される。内面は剥離が著しく、調整等は不明である。71は無頸壺で、X16・Y16から出土している。口縁下部に2孔一対の穿孔が焼成前に外面から行われる。穿孔部から下に、同方向の斜行短線文が2列施文される。72は壺の口縁部で、X20・Y45から出土している。口唇部の両端を刻み、垂下文が3条施文される。



第10図 B区全体図

## 【B区】

SX01 (SD09・SD19・SD93・SD106・SK105・SP102・SP103・SP110) (第10・11・13図)

調査区西部に位置する、周溝をもつ平地式建物で、南北に走るSD10・16・17・18・47とSK94に切られている。

周溝は、SD09・19・93によって構成されており、外縁部で約13.0m×12.0mの円形を呈する。遺構検出段階ではこれらの溝を別個の遺構と考えていたが、調査の進捗に伴いこれらの溝が周溝を構成することがわかった。北東に2か所の開口部をもち、周溝内部の面積は約123m<sup>2</sup>である。周溝は、幅約0.70～1.20m、深さ約0.05～0.20mを測り、南側はA区から続く自然河川SR01に達する。底面レベルはSR01に向かって徐々に低くなり、SR01とSD09との切り合い関係も認められないため、当初からSR01に接するように周溝が配置され、自然河川を排水溝として利用していた可能性がある。

周溝内部には、幅2.0mあまりの空白地帯を隔て、幅約0.10～0.20m、深さ約0.02～0.04mのSD106が巡る。西側の一部は、SK94やSD10に切られており検出できなかったが、本来は径6.0mあまりの正円形に近いプランであったと考えられる。SD106の内側には、地山のシルトと黒褐色粘質土が混在する層が0.10m程度、SD106のプランに沿って円形に堆積しており、SD106とSD106の内側の粘土層が、それぞれ疊ぐ周溝と貼床に相当すると考えられる。中央部には、東西1.50m×南北0.80m、深さ約0.20mの不整形プランを呈するSK105が存在する。焼土・炭化物も多くみられることから灰穴炉と考えられる。SK105の周囲では、径0.30m前後のSP102・103・110を検出している。位置関係から、炉の周囲に配置されたような状況ではあるが、深さは0.10～0.20mと浅く柱根痕等も確認できないため、確実な柱穴とは断定できない。SD106内側の面積は約27.0m<sup>2</sup>である。

SD106の内部には、上記のSK105・SP102・103・110等を覆う、焼土・炭化物層が広がる。分布は、中央の炉から南西部の範囲に偏っているが、SD10の内部にも周溝から混入したとみられる炭化物が混入していることから、SD106の円形プランに沿って、内部全面に分布していた可能性が高い。焼土層は、第13図⑥層にあたる黄橙色の粘質土で、中央部付近で0.10mと最も厚く堆積し、外縁部へ向かって徐々に薄くなる。炭化物層は焼土層の下層に位置し、0.05～0.07mの厚さで堆積している。炭化した木片を多量に含み、炉の西側には住居の構成部材とみられる炭化材が、中心部に向かって放射状に残されていた。炭化材には径約0.10m、長さ1.30m以上の丸太材も含まれており、垂木と考えられる。従って、SD106の内部が屋内部に相当することになろう。垂木等の炭化部材の存在から、SX01はいわゆる「焼失住居」と考えられる。なお、炭化材については遺存状態が悪く、樹種の同定には至らなかった。

SX01では、周溝・炉・焼土・炭化物層を中心に、弥生土器片や石器等が出土しているが、周溝の内側から遺物は殆ど出土しなかった。また、西側開口部付近の周溝内にも焼土が含まれることから、焼失後に、焼土・炭化物等の移動を伴う、「片付け」の行為が行われた可能性がある。

遺物は、周溝(SD09・19・93)から弥生土器(第26図122～124・第27図127・131～138)・石包丁(第32図228)が、灰穴炉(SK105)から土製円盤(第27図128～130)が、疊ぐ周溝(SD106)から石包丁(第32図229)と石鏟(第32図230)がそれぞれ出土している。

122・127・131は壺である。122は頸部にタテハケ調整が行われる。127は口縁端部を刻み、内面はハケ調整が行われる。131は口縁部から頸部にかけてタテハケ調整し、口縁端部内面を櫛状具によって刻み、その下に羽状文を施す。

123・124・132・138は壺である。123・124は、胎土に雲母・石英を含む、栗林式土器の搬入品と考えられるものである。123は頸部～肩部破片で、外面に横位の沈線をめぐらせ、その間に半月形の刺突文が施される。124は頸部で、内外面にナデ調整を行う。横位の細い沈線を1条めぐらし、その上部に繩文を充填する。132は、ぐの字状に屈曲する短い口縁部に、大きく張り出した球形の肩部をもつ。外面は頸部以下全面にミガキを行なう。胎土に海綿骨針を含む。137は頸部から口縁部にかけてハケ調整が行われ、口唇部にV字状のキザミが施される。138は肩部片で上から、直線文・簾状

文・直線文・直線文・波状文・直線文の複合構成の櫛描文で飾られる。

128～130は土器片を転用した土製円盤である。128は円形を呈し、重量は8.68gを測る。両面からの穿孔痕がみられるが、貫通していない。129は円形を呈し、重量は17.47gを測る。130は欠損しているが、円形を呈すると推測でき、重量は10.82gを測る。破断面に裏面からの穿孔痕がみられるが、貫通していない。

228は石包丁で、石材は頁岩と考えられる。表面側面に研磨痕がみられる。また端部に穿孔痕が確認できる。大部分を欠損しているが、孔径は約1.0cmと推測できる。229は円錐の大形剥片を使用した石包丁で、石材は頁岩である。片面に自然面を残し、縁辺部に4か所の加工痕がみられ、刃部両面には使用痕が確認できる。230は石鋸と考えられ、石材は流紋岩である。刃部は鈍いV字を呈する。擦切りの際の使用痕がみられる。他には緑色凝灰岩の碎片が床面から1点出土している。

SX02 (SD23・SD27・SD78・SP24・SP92・SP96・SK107) (第10・12・14図)

調査区中央部南側に位置する、周溝をもつ平地式建物で、南北に走るSD32に切られている。周溝は、SD23・27・78によって構成されており、外縁部で約13.0m×12.0mの円形を呈する。SX01同様に造構検出段階ではこれらの溝を別個の造構と考えていたが、調査の進捗に伴いこれらの溝が周溝を構成することがわかった。北東に1か所の開口部をもち、周溝内側の面積は約123m<sup>2</sup>である。周溝は、幅約0.60～1.80m、深さ約0.10～0.32mを測る。南側にもむかって徐々に深くなる傾向にあるが、深さは一定ではなく、SD23北端部や、SD78の南端部では1段深く掘り下げられている。土層観察から、周溝内側の肩部から底面付近にかけて、地山をブロック状に含む層の堆積が認められる。地山ブロックの堆積は周溝南半部で特に顕著となる。また、周溝南東部(SD78中～東部)では、周溝内側のラインに沿って、造構検出面から約0.3m上に、炭化物層が広がり多数の土器片がまとめて出土している(第15図SD78上層出土遺物)。この炭化物層は、後述する灰穴炉周辺部に広がるものと同一と考えられる。造構検出段階では認識できなかったが、炭化物層・遺物の出土レベルと造構検出面との比高差から、本来は周溝の内側に周溝より一段高い部分が存在したと考えられ、周溝削土を内側に盛り上げた周堤を形成していた可能性がある。

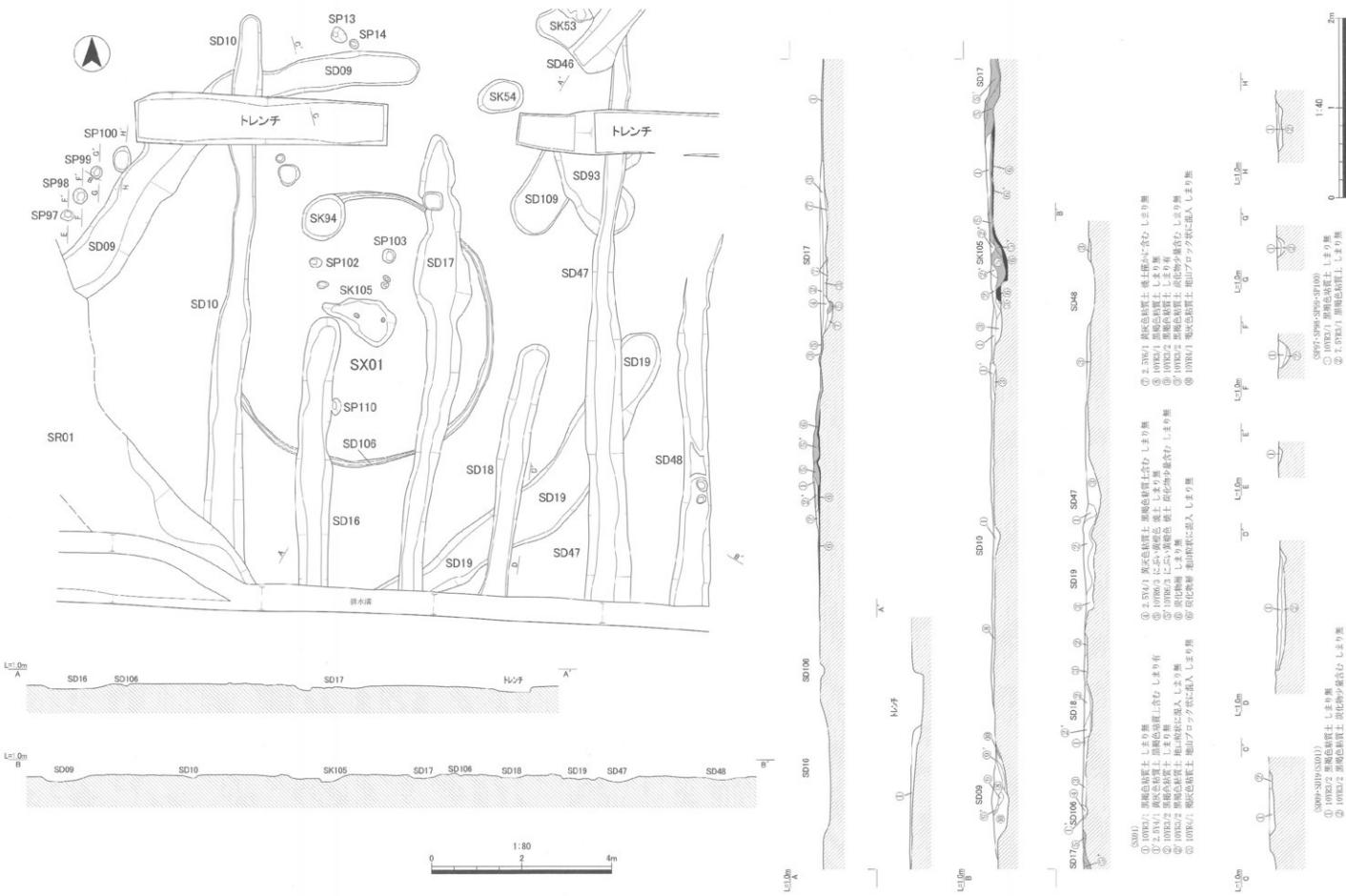
中央部には東西0.70m×南北0.80m、深さ約0.15mの円形プランを呈するSK107が存在する。覆土は焼土、炭化物の順に堆積し、灰穴炉と考えられる。SK107の周囲では、径0.30～0.70m前後の小穴SP24・92・96を検出している。位置関係から炉の周囲に配置された柱穴に相当するものと考えられ、SP92・96では木柱根を確認している。しかしながら、確実な柱穴と断定できるものはこの2基のみで、柱穴配置を特定するには至っていない。

SK107付近には、焼土・炭化物層が広がる。分布は、SK107の北東部の範囲にやや偏っている。焼土層は、第14図①層にあたる黄褐色の粘質土で、SK107中央部付近で0.17mと最も厚く堆積し、外縁部へ向かって徐々に薄くなる。焼土層の下層には、炭化物層が0.01～0.04mの厚さで堆積している。炭化木材を含み、何らかの部材とみられる木片が周溝及びSK107付近に残されている。遺存状態が悪いため、樹種や部位の特定には至らなかったが、建物等の部材となる可能性が高く、SX01同様に「焼失住居」と考えられる。

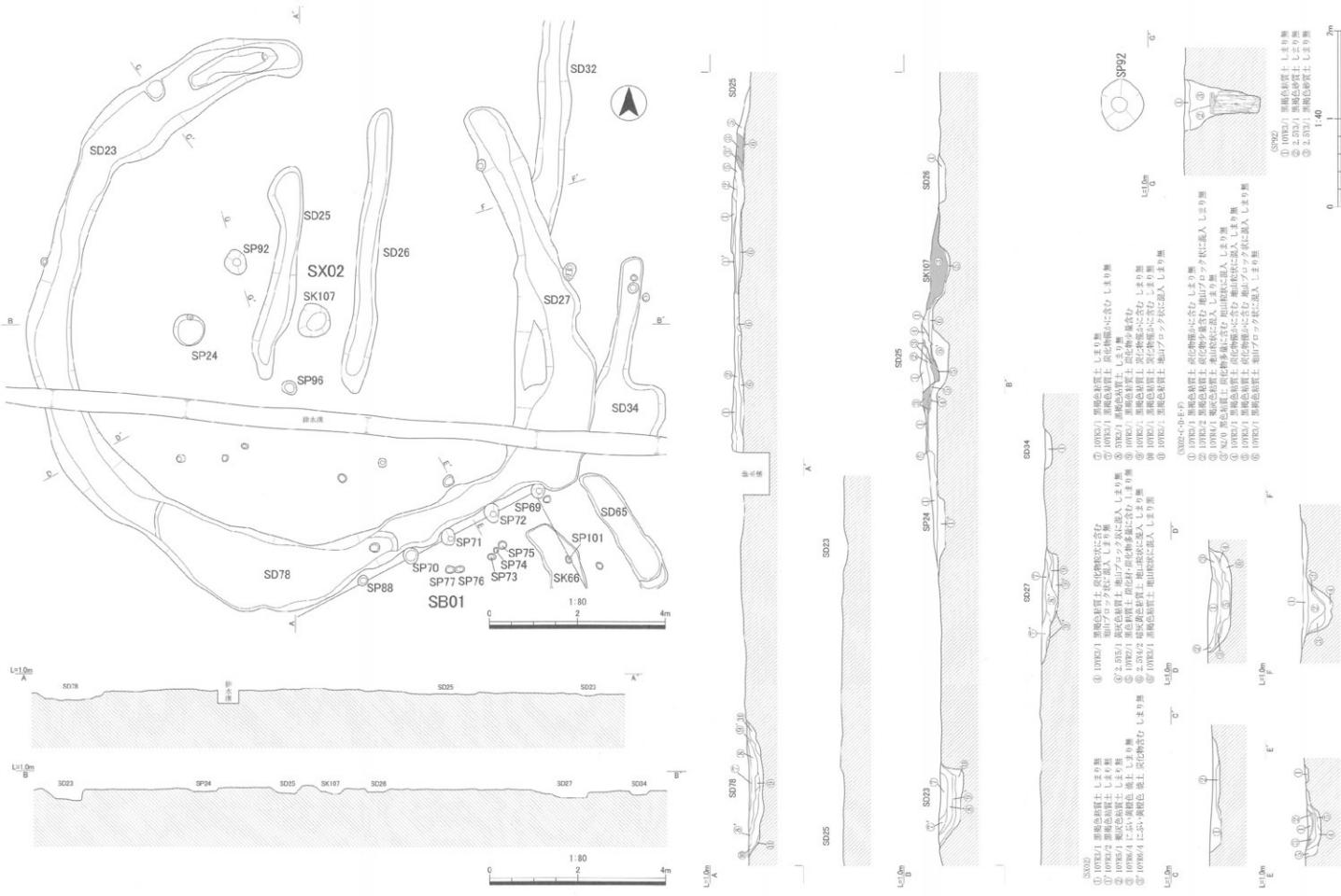
SX02では、周溝・炭化物層を中心に、弥生土器片や石器等が出土しているが、周溝の内側から遺物は殆ど出土しなかった。また周溝内側の焼土・炭化物・炭化木材の分布偏差は、二次的な移動の結果と考えられ、焼失後に「片付け」的行為が行われた可能性がある。

遺物は、周溝を中心に弥生土器(第27・28・29図139～174・第30図184～201)・土製円盤(第28図157)・石器(第32図231・232・234)が出土している。

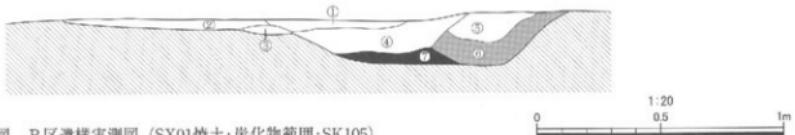
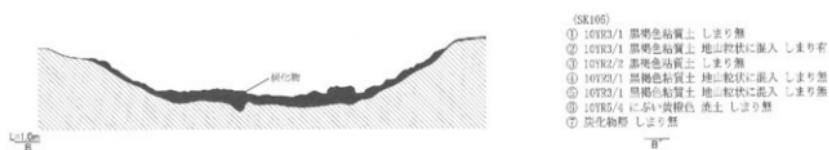
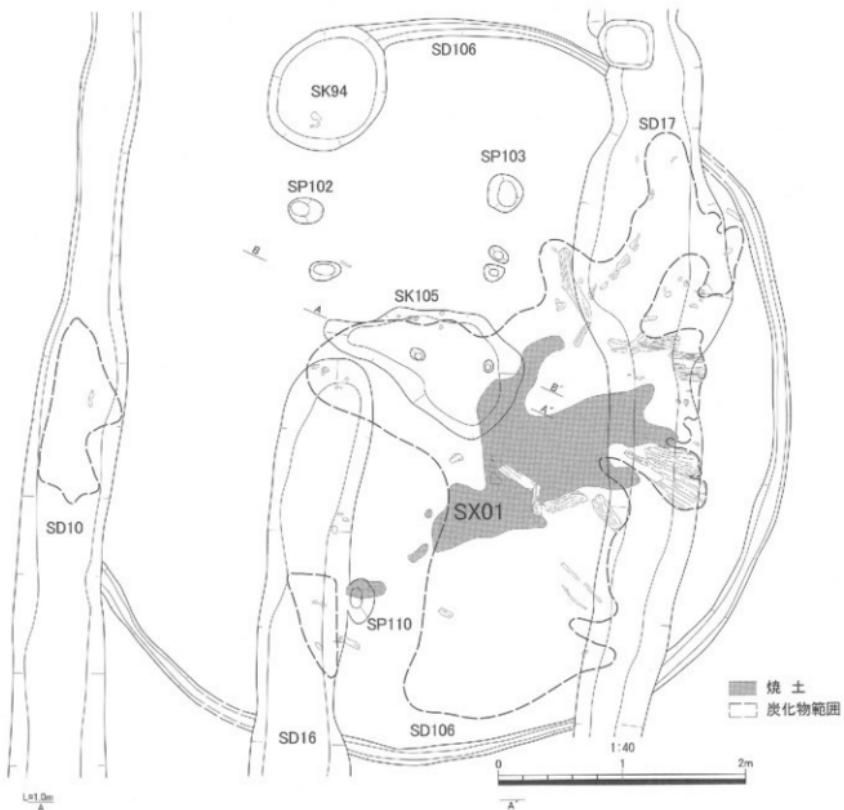
139・141～143・148～151・154・155・158～161・163・171・174・188～190・193～195・200は壺で、139は頸部にタテハケ調整後ナダ調整が行われる。口縁部内面に羽状文が施される。141は口縁部内面に短い垂下線を連続し、その下に波状文を施す。98・213と同一個体である。142はハケ調整を行い、口縁端部を刻む。148は外面をハケ調整後、斜行短線文・



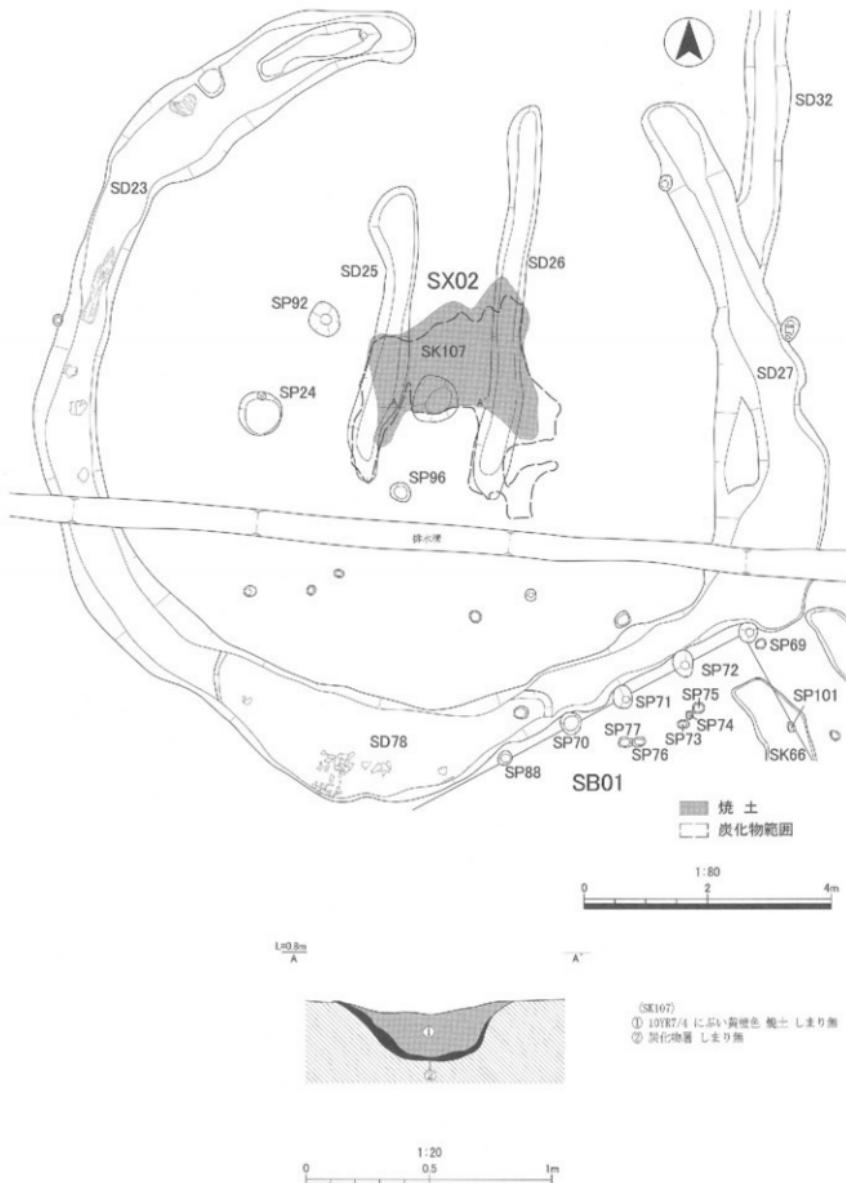
第11図 B区遺構実測図 (SX01・SP97・SP98・SP99・SP100)



第12図 B区遺構実測図 (SX02-SP92)



第13図 B区造構実測図 (SX01焼土・炭化物範囲・SK105)



第14図 B区遺構実測図 (SX02焼土・炭化物範囲・SK107)

直線文を交互に施し、複帯構成とする。151は頸部外面にタテハケ調整を行い、直線文が施される。口縁端部内面を刻み、その下に斜行短線文が施される。160は外面にハケ調整を行い、口縁端部内面を刻む。161は胴部全体を下方から上方にかけてハケ調整を行い、胴部上半に竹管状具によって2列の刺突文が施される。東部瀬戸内系の様相をもつ土器である。163は頸部外面にタテハケ調整を行い、口縁部は指頭押圧によって小波状口縁とする。174は頸部外面をタテハケ、胴部全体にハケ調整を行う。口縁端部を刻み、口唇部に竹管状具によって刺突文がめぐる。189は口縁端部をヘラ状具によって小波状とし、頸部外面に直線文が施される。口縁部内面には垂下文が施される。190は胴部外面全体にハケ調整を行い、内面もハケ調整を行う。口縁部はヘラ状具によって小波状とする。200の底部には焼成後の穿孔がみられる。

140・144～147・152・153・156・162・164～168・172・173・191・192・197～199は壺である。144は頸部外面にタテハケ調整を行い、口唇部を刻む。146は頸部外面にタテハケ調整を行い、直線文が施される。口縁端部に指で摘んだ、突起を作り出し、口縁部内面には垂下線が施される。147は3条の直線文間に波状文・簾状文が施される。149はハケ調整し、底面からの穿孔がみられるが、貫通していない。156は連弧文の間に縄文が充填され、内面はヨコハケ後ナデ調整が行われる。胎土に雲母・石英を含む、栗林式土器の搬入品と考えられる。162は口縁端部に突帶を貼り付け羽状文を施す。口唇部にはX字状のキザミが施される。頸部にミガキを行う。164は内面に斜行短線文が施され、斜行短線文の間に2個一対の円形突起を貼り付ける。168は頸部外面にタテハケ調整を行い、口縁部は沈線を引き棒状具で刻む。191は頸部外面にタテハケ調整を行い、貼付突带上に刻みが施される。198は無頸壺で、連弧文の間に半月形の刺突文・縄文を充填し、弧文の波頂部には円形浮文が施される。また口縁部には焼成後に穿孔された孔が一つみられる。胎土に雲母・石英を含み、栗林式土器の搬入品と考えられる。199は平行沈線の間に半月形の刺突文が施される。胎土に雲母を含み、栗林式土器と考えられる。

169・170は台付鉢で、169は口縁部が屈曲して水平に開き、上面に羽状文が施される。胴部は3条の直線文間に、上方から斜行短線文2段・簾状文が施される。内面はハケ調整が行われる。196と同一個体である。170は全体にミガキが行われ、内面に指頭押圧がみられる。

157は土製円盤である。表面に穿孔の痕跡が認められるが、貫通していない。

231は用途不明の石器で、石材は輝石安山岩である。232は器種不明で、石材は緑色凝灰岩である。他に出土した緑色凝灰岩より灰色が強い。表面と両側片に研磨痕がある。234は有茎石鑿で、石材は黒色安山岩である。

また、先述のとおり周溝南東部(SD78中～東部)では、多量の弥生土器(第29図175～183・第30図184～187)・石器(第32図233)が遺構検出面上部から出土している。遺物の分布範囲や地床炉周辺部と同一の炭化物層との並存から、SX01周溝に伴う遺物と考えられるが、周溝内出土遺物と区別して、SD78上層出土として取り扱った。

175・178・201は壺である。178は頸部外面にタテハケ調整を行い、上方から直線文・簾状文・直線文・波状文・直線文・扇形文の順に施文される。口縁部は小波状とし、内面に羽状文・斜行短線文を施す。胴部外面最下段の直線文上と口縁部内面には、それぞれ円形突起が2個一対で飾られる。201は焼成後に底部を穿孔する。

176・177・179・181～186は壺である。176は口縁部に突帶を貼り付け、三角形刺突文が施される。内面は剥離している。177は外面に連弧文と横位の沈線をめぐらせ、半月形の刺突文及び縄文が充填される。123と同一個体で、胎土に雲母・石英を含む、栗林式土器の搬入品と考えられる。179は頸部にタテハケ、胴部にヨコハケを基調とし外面全体にハケ調整を行う。181は球形の胴部で外面の胴部全体にハケ調整を行う。182は肩部に上方から直線文・簾状文・波状文・直線文・扇形文の順に施文される。胴部はミガキが行われ、内面はケズリとハケ調整が行われる。184は胴部が球状に張り出す大型の壺で、肩部に5条の直線文、その下に簾状文を施文する。胴部外面全体にハケ調整を行う。185は上方から直線文・波状文・直線文・波状文・直線文・斜行短線文の順に施文される。186は上方から斜行短線文2段・直線文・波状文・

直線文・斜行短線文2段・刺突文の順に施文される。

233は太型蛤刃形磨製石斧の刃部で基部を欠損する。石材は中部高地産の緑色岩類で、楓田型磨製石斧と考えられる。栗林式土器に伴って搬入された可能性が高い。他には、ヒスイ原石、緑色凝灰岩の碎片が1点出土している。

#### SD02（SX03）（第10・15図）

SD02は調査区北西端部に位置し、北北東から南南東方向に延びる溝である。調査区外南側に延びるため、全体の規模・形状は不明である。断面形態は逆台形を呈し、規模は最大幅0.82m、検出面からの深さは0.19mを測り、SD108を切る。覆土に焼土が含まれており、掘削時に炭化物・炭化材を部分的に確認した。炭化物・焼土が混入し、底面レベルが南側に向かって深くなることから、SX01・02と同様に住居等に伴う周溝の可能性が高い。遺構の規模・形状は不明であるが、現農道下に平地式建物SX03の存在を推定できる。遺物は弥生土器が数点出土しているが、図示できるものはない。

#### SD108（第10・15図）

SD02の東側に位置し、西から東に延びる溝である。断面形態は直状を呈し、規模は最大幅0.50mで、検出面からの深さは0.08mを測る。SD02に切られる。遺物は弥生土器が数点出土しているが、図示できるものはない。

#### SB01（SD78・SD65・SD58・SP59・SP60・SP62・SP64・SP69・SP70・SP71・SP72・SP74・SP75・SP76・SP88・SP101・SP104）（第10・15図）

SX02南東部に隣接する、掘立柱建物である。桁行4間以上×梁間2間を確認した。南西側は調査地区外に抜がるため、全体の規模は不明である。SP60・62・69・70・71・72・88・101・104は、径0.20～0.30m、深さも約0.30m前後と規模・形状がほぼ等しい。SP64・75・76から木柱根を、SP69・70からは柱根痕と考えられる上層を確認した。また、SP71の底からは瓜科植物の種子塊が出土している。

SB01の南・東・北部には、SD58・65・78がそれぞれ位置する。これらの遺構は、SB01と主軸方向を一致させ、建物の三方を取り囲むような遺構配置となることから、SB01に付随する遺構と考えられる。このうちSD78は、SX02の周溝の一部であるが、SB01北側の柱列(SP69～72・88)とSD78との間に切り合い関係は認められない。また、SX02周溝全体を見ると、SB01に接する部分で主軸方向を合わせるように直線的に伸びている。これらの点から、SX02とSB01は位置関係を互いに規制し、両遺構がSD78を共有する形で同時期に並存、或いはごく短期間の時期差であると考えたい。遺物は、溝・柱穴から弥生土器(第26図115～121)が出土している。

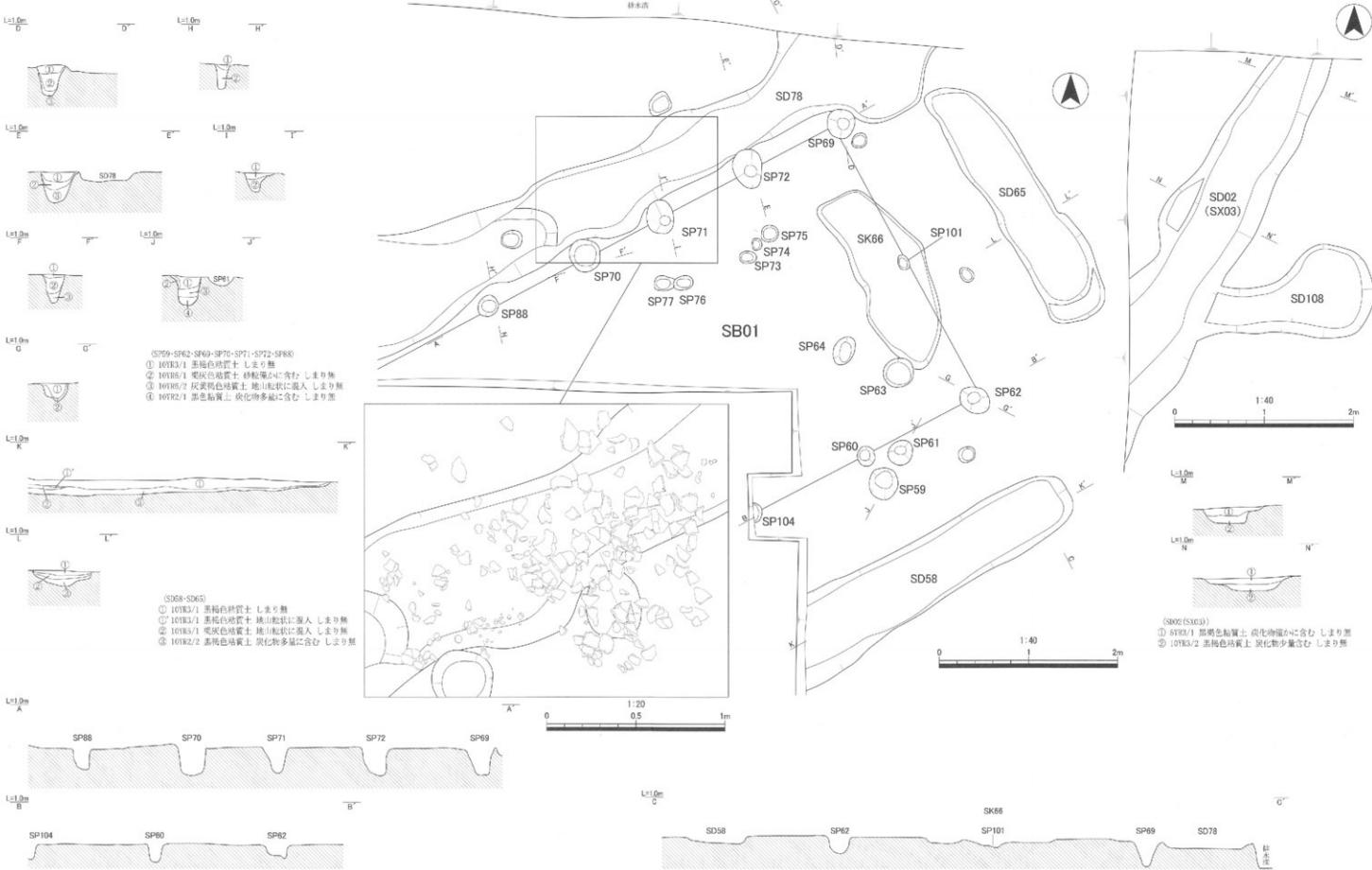
116～118・120は壺である。116は内面の口縁端部を刻み、垂下文を施す。117は口唇端部を刻み、羽状文を施す。内面はハケ調整後、頸部以下をナデ消している。外面は摩耗が激しく調整は不明である。118は外面にハケ調整を行い、内面の口縁端部を刻み、斜行短線文を施す。120は胴部片で、上方から直線文2列・簾状文・直線文の順に施文する。

115・119・121は壺である。115は胴部片で、連弧文間に繩文・半月形の刺突文を充填する。内面はナデ調整が行われる。胎土に雲母・石英を含み、栗林式土器の搬入品と考えられる。119は外面をハケ調整後ナデを行い、内面はハケ調整を行う。内面の口縁部を刻む。121の頸部外面は、ハケ調整後、縦方向のミガキを施す。内面はハケ調整を行う。口縁部の貼付突带上に羽状文を施し、口唇部をX字状に刻む。

#### SK21（第10・16図）

SK21は調査区中央北端部に位置する土坑で、長径3.27m×短径1.64mの不整椭円形を呈し、北東側が1段浅くなる。断面形態は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.21mを測る。

遺物は、遺構底面を中心に弥生土器(第24・25図81～89)が出土している。81～86は壺で、81は外面にハケ調整を行い、口縁部はヘラ状具によって小波状とする。また内面の口縁端部を斜めに刻む。82は外面をハケ調整し、頸部はタテハケが行われる。口縁端部に刻みが施される。83は3条の直線文間に簾状文を交互に施し、複帶構成とする。口縁部内



第15図 B区遭査実測図 (SB01・SD02<SX03>・SD108)

面には斜行短線文が羽状に配され、胴部付近まで垂下文を施文する。垂下文は、2条1組で3か所確認でき1周4単位と考えられる。頸部にタテハケ調整を行う。84は上方から直線文・波状文・直線文・簾状文・波状文の順に施文され、内面のL口縁部には斜行短線文が羽状に配される。口縁部は指頭押圧によって小波状とする。86は4条の直線文間に斜行短線文を施文し、最下段に肩形文を施文する。口唇部を刻み、口縁部内面に2列の羽状文を施文する。87は台付鉢と考えられ、外面にハケ調整を行い内面はナデが行われる。88は胴部下半に最大径をもつ壺で、肩部に3列の斜行短線文・直線文を交互に施文する。胴部最大径部より上半をハケ調整とし、下半はミガキ、底部はハケ調整を行う。東海地方の貝田町式土器に系譜が求められる。

また、SX02周溝出土の台付鉢169の破片が出土している。169の破片がSX01からも出土していることから、SX01・SX02に伴う廐棄土坑としての性格が考えられる。

#### SK28（第10-16図）

SK21東側に位置する土坑で、長径2.56m×短径1.46mの楕円形を呈する。断面形態は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.17mを測る。弥生土器（第25図90～93）が出土している。90は口縁端部外面を刻み、内面に斜行短線文が施文される。91は壺の口縁部で突穴を貼り付け、縄文が施される。

#### SK29（第10-16図）

SK28南側に位置する土坑で、長径2.17m×短径1.04mの楕円形を呈する。断面形態は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.12mを測る。弥生土器（第25図94～99）が出土している。94・96・98・99は壺である。94はL口縁部が僅かに外反し、そのまま大きくくびれずに胴部に至る。胴部上半に横走する羽状のハケ調整が施され、ハケメの結節点に列点文を配する。口唇部には縄文を施文する。内面はヨコハケ調整後ナデが行われる。胎土に雲母・石英を含み、栗林式土器の搬入品と考えられる。98はL口縁部内面に短い垂下線を連続して施し、その下に波状文が施文される。141・213と同一個体である。95・97は壺で、95はL口縁部外面に羽状文が施され、頸部にタテハケ調整を行う。他には、ヒスイ原石が1点出土している。

#### SK33（第10-16図）

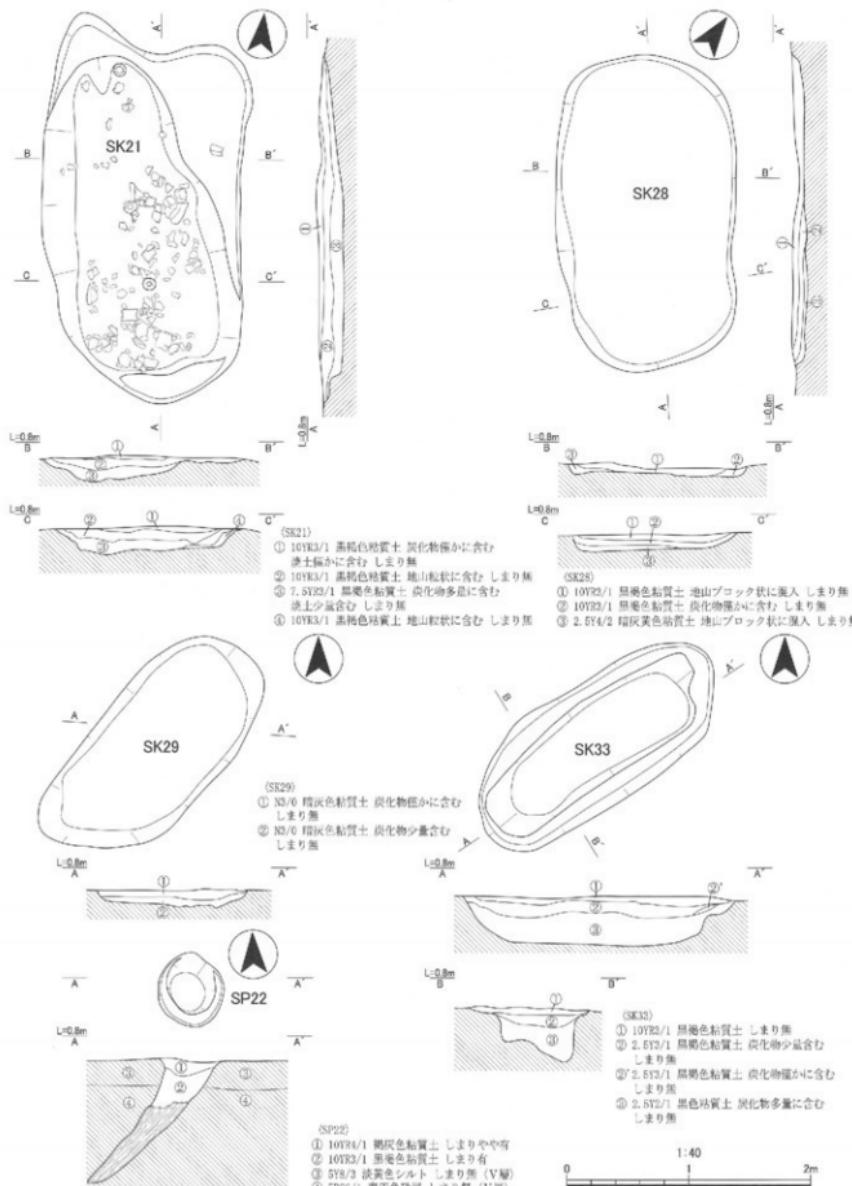
SD32東側に位置する土坑で、長径2.34m×短径0.97mの楕円形を呈する。断面形態は逆台形を呈し、検出面からの深さは0.30mを測る。弥生土器（第25・26図100～109）が出土している。100～104・107～109は壺で、100の口縁部はヘラ状具によって小波状とする。胴部には直線文と斜行短線文が施される。欠損のため不明であるが、本米は2条の直線文と2列の斜行短線文が交互に施文され、複帯構成となっていたと考えられる。口縁部内面には斜行短線文を施す。102は内外面ともハケ調整が行われ、口縁端部内面を刻む。103はL口縁端部内外面をヘラ状具によって小波状とする。104は口唇部を刻み、口縁端部内側に斜行短線文が施される。107は直線文・2列の斜行短線文を交互に施文する複帯構成で、頸部にタテハケ調整が行われる。またL口縁端部内面を刻み、斜行短線文が施される。105・106は壺で、106は波状文・直線文・斜行短線文の順に施文される。

#### SP22（第10-16図）

SK21南側に位置する柱穴である。長径0.60m×短径0.54mの円形を呈する。検出面からの深さは1.30mを測り、柱根（第33図235）が東側に傾いた状態で出土した。遺物は出土しなかった。

#### SP97・98・99・100（第10-11図）

SD05東側に位置する小穴群で、各々円形を呈する。検出面からの深さは0.1m前後で浅く、土器や柱根等は出土しなかった。SX01の周溝（SD09）に伴うものか。



第16図 B区遺構実測図 (SK21・SK28・SK29・SK33・SP22)

#### 包含層・排水溝・試掘調査・表上掘削出土遺物

(第31図202～207・209・220～223・226)は、包含層出土遺物である。202はX5・Y85から出土した壺の口縁部で、頸部にタテハケ調整が行われ、直線文が2条施文される。203はX12・Y72から出土した壺の口縁部で、口唇部を刻み、内面に斜行短線文を施す。204は壺の口縁部で、口唇部を刻み、外面上に直線文・波状文、内面に垂下文が施文される。205はX5・X85から出土した壺の口縁部で、頸部にタテハケ調整を行い、内面には竹管状具によって刺突文が施される。209は沈線がめぐり、その上に半月形の刺突文が施される。胎土に雲母を含み、栗林式土器の搬入品と考えられる。220は器種不明である。口縁部外面に突帯を貼り付け、中央の横位沈線によって突帯を上下に区分した後、刻みが施される。外面突帯下と口縁部内面・口唇部に斜行短線文が施文される。223は壺の口縁部で、内面に羽状文と垂下文が施される。

(第31図210～212・225)は、排水溝出土遺物である。210は壺の胴部で、内外面ともヨコハケ調整後ナデ調整が行われ、外面に横位の沈線がめぐる。胎土に雲母を含み、栗林式土器の搬入品と考えられる。211は壺または壺の胴部で、波状文・直線文・扇形文が施文される。212は器種不明の胴部片で、盤面に2箇一対の円形突起が飾られるが、1つは剥離している。225は器種不明の底部で、内外面ともナデが行われる。胎土に雲母を含み、栗林式土器の搬入品と考えられる。

(第31図208・213～219)は試掘調査出土遺物である。213は壺の口縁部で、内面に逆続した垂下線と波状文が施文される。98・141と同一個体で、SX02周溝またはSK29からの出土と考えられる。214は壺で、口唇部をヘラ状具によって小波状口縁とする。外面に継位、内面に横位のハケ調整が行われる。217は壺の口縁部で、口縁部は水平近くまで外反し、頸部外面をタテハケ調整する。219は壺の頸部から口縁部で、口縁部は水平近くまで外反する。口縁端部内面を刻み、斜行短線文を施す。頸部はタテハケ調整後ナデ調整が行われる。その他、X12・Y72から緑色凝灰岩の碎片が1点出土している。

(第31図224)は表上掘削出土遺物で、壺の口縁部と考えられる。口縁部・頸部に突帯を貼り付け、口縁部突帯には2列の斜行短線文、下端部に三角形刺突文を施す。頸部突帯上には突起が貼り付けられる。口縁下部には2条の直線文が配され、口縁部内面には2列の斜行短線文と垂下文が施される。

(宮脇)

## 第4章 高島A遺跡自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本遺跡は、射水平野の微高地上にあり、これまでに中世および弥生時代の遺構・遺物が検出されている。今回は弥生時代中期の焼土を伴う円形周溝遺構(SX01・02)についての調査を行う。遺構の年代観を得るために、出土炭化物による放射性炭素測定を実施する。燃料材および上屋構造材に関する情報を得るため、灰像分析ならびに樹種同定を実施する。焼土の由来や構造を知るために、土壤薄片作成を実施する。

### 1. 住居の年代観

年代測定には、SX01の屋根材とされる草本質の炭化物と、SX02の炉床面の炭化材?サンプルである。前者は灰像分析、後者は樹種同定試料と同一である。

分析は試料が微量なため、AMS法を用いて行う。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5.568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02を用いる。

分析の結果、SX01は $2130 \pm 30$ BP、SX02は $2190 \pm 30$ BPであり、両者の値は類似する。また、暦年較正の年代は、測定誤差 $2\sigma$ で見た場合、SX01はcalBC351-52、SX02は369-177となり、重なる部分が多いことから、ほぼ同時期に存在していたと思われる。これらの遺構は、発掘所見では弥生時代中期とされることから、今回の年代測定結果は妥当な値といえる。

番号	補正年代(BP)	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$	暦年較正用年代値	暦年較正年代(cal)				相対比
				$\sigma$	cal BC 339 - cal BC 329	cal BP 2,289 - 2,279	0.093	
SX01	$2130 \pm 30$	$-25.94 \pm 0.72$	$2133 \pm 33$	$\sigma$	cal BC 339 - cal BC 329	cal BP 2,289 - 2,279	0.093	
				$2\sigma$	cal BC 203 - cal BC 107	cal BP 2,153 - 2,057	0.937	
				$\sigma$	cal BC 351 - cal BC 298	cal BP 2,301 - 2,248	0.155	
				$2\sigma$	cal BC 228 - cal BC 222	cal BP 2,178 - 2,172	0.008	
SX02	$2190 \pm 30$	$-9.42 \pm 0.83$	$2194 \pm 32$	$\sigma$	cal BC 210 - cal BC 52	cal BP 2,160 - 2,002	0.837	
				$\sigma$	cal BC 356 - cal BC 285	cal BP 2,306 - 2,235	0.660	
				$\sigma$	cal BC 254 - cal BC 249	cal BP 2,204 - 2,199	0.035	
				$2\sigma$	cal BC 234 - cal BC 200	cal BP 2,184 - 2,150	0.305	
				$2\sigma$	cal BC 369 - cal BC 177	cal BP 2,319 - 2,127	1.000	

第2表 年代測定結果

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1桁目を丸めるのが慣習だが、校正曲線やプログラムが改定された場合の再校正がしやすいように、1桁目を丸めていない。

4) 総計的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68%、 $2\sigma$ は95%である

5) 相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

### 2. 燃料材および上屋構造材について

上屋構造材と思われる構造物は、SX01、SX02からそれぞれ1点ずつ採取し、灰像分析を実施した。いずれも炭化した扁平な植物片で、一見すると茅のように見える。これらの試料は、過酸化水素水で漂白・炭化したのち、光学顕微鏡下で観察した。その結果、いずれも珪化組織片が検出されず、炭化物片が認められるのみである。このため、灰像分析から種類を特定することはできないが、形状からして木材ではなく、イネ科などの草本類であると考えられる。なお、SX01では、この屋根材について年代測定を実施しており、そのとき計測された $\delta^{13}\text{C}$ の値が $-25.94 \pm 0.72\text{‰}$ である。炭化物の $\delta^{13}\text{C}$ の値は、母植物を知る上で指標となる。ススキ(茅)は、アワやヒエなどとともにC4植物であるため、 $\delta^{13}\text{C}$ の値が $-15\text{--}-10\text{‰}$ 程度になると思われるが、今回の値はC3植物の数値であり、屋根材はススキなどのC4植物ではない。イネ科のC3植物には、ヨシ属、イネ、ササ類などがあり、これらに該当する可能性がある。灰像分析による同定では、葉が残存していないと種類の特定が不可能であるから、葉が取り去られたり、燃焼の際に茎だけが燃え残りっぱれば、「種類不明の炭化物」となる。これらのことから、検出された上屋構造材は、C3植物に含まれるイネ科などの草本類であることは確かだろうが、より詳しい種類については不明である。

焼土についても、イネ科の葉が燃料材に用いられている可能性があることから、SX01、SX02の焼土を1点ずつ分析した。分析方法は上屋構造材と同様、焼土を薬品処理して観察した。その結果、いずれも珪化組織片が検出されず、炭化物片が認められるのみであったため、種類を特定することはできなかった。

燃料材と思われる炭化材の同定はSX01から出土した炭化材4点、SX02から出土した炭化材2点を実施した。その結果、SX02から出土した炭化材は、微細な炭粉が塊状に固まつたものであり、木材ではなかった。このため種類の同定はできない。この試料は年代測定を行っており、 $\delta^{13}\text{C}$ の値は $-9.42 \pm 0.83\%$ である。この値から、母植物はC4植物であると考えられるため、炭化物はスキ、アワ、ヒエなどのいずれかにあたると思われる。これらは炉から検出されていることから、燃料材の一部として使われていたことが推測される。SX01から検出された4点には、広葉樹2種類(ムクロジ・トネリコ属)が含まれ、これらが燃料材として利用されていたことが推定される。トネリコ属には、本地域では全て落葉広葉樹であり、山地の落葉広葉樹林に生育する他、低湿地に生育する種類も含まれる。また、ムクロジは、暖温帯常緑広葉樹林の林縁部等に生育する落葉広葉樹である。ムクロジは、これまでにも上市町江上A遺跡の弥生時代後期～古墳時代初頭の鍬、柄、石包丁形木器、結錆車、杭や下村加茂遺跡の弥生時代後期～古墳時代初頭頃と考えられる鍬柄、堅杵、柱材に認められた例があり(飯島・長谷川,1984;沙見・岡田,1999)、沿岸部の低標高地域を中心に分布していたことが推定される。また、トネリコ属も小杉町針原東遺跡の弥生時代後期～古墳時代初頭の井戸材、下村加茂遺跡の弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられる柱材、杭、船橋村浦田遺跡の弥生時代後期～古墳時代初頭の樅材等に利用されており(パリノ・サーヴェイ株式会社,1994;沙見・岡田,1999;塚本,2000)、県内に広く分布していたことが推定される。

### 3. 焼土の由来

灰像分析の結果、焼土中からは燃料材に由来する植物珪酸体は検出されなかった。ここでは、岩石学的手法を用いて、焼土の由来や、焼成温度などの情報を得る。焼土を、樹脂で硬化させたあと、切断して薄片用のチップを作成し、これをプレパラートに貼り付け、0.03mmの厚さに調整する。この上にカバーガラスを貼り付け、観察用試料とする。

SX01の焼土は、砂を含むシルト質粘土で、砂粒は、石英、カリ長石、斜長石、黒雲母、角閃石、酸化角閃石(弱酸化)、綠簾石、不透明鉱物が含まれる。また、粘土～シルトは、珪長質鉱物、セリサイト、粘土、炭質物、酸化鉄などによって構成される。その他、植物珪酸体、珪藻、微粒炭を含む。角閃石の一部に弱酸化角閃石化的状態にあるものが認められるが、角閃石が酸化角閃石化的温度は800°C程度であることから、この温度に近い焼成を受けた可能性がある。

SX02の焼土、SX02の焼土中の粘土層についてもSX01と鉱物組成が同様であり、温度は800°C近い焼成を受けた可能性がある。なお、砂粒組成は、砂粒の供給源である後背の地質と比較しても、特異的な鉱物は認められないことから、SX01、SX02の焼土とともに、撒入されたものではなく、周辺の土壤が被熱を受けることによって焼土が形成されたと思われる。

### 引用文献

- 飯島 泰男・長谷川益夫,1984.木製品の樹種。「北陸自動車道遺跡調査報告 上市町木製品(本文)総括編」89-96,図版5-8.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,1994.針原東遺跡から出土した木製品の材同定。「小杉町針原東遺跡発掘調査報告」,富山県小杉町教育委員会,141-154.
- 沙見 真・岡田 文男,1999.下村加茂遺跡出土木製品の樹種調査結果(1)・(2)。「富山県射水郡下村 下村加茂遺跡発掘調査報告」,下村教育委員会・富山県埋蔵文化財センター,51-54.
- 塚本 英子,2000.樹種同定識別結果。「富山県舟橋村 浦田遺跡発掘調査報告(3)」,舟橋村教育委員会,46-48.

## 第5章 総括

### 1. 焼失住居について

今回の調査では、弥生時代中期に属する平地式建物SX01・SX02を検出した。高島A遺跡における確実な建物跡の初の検出例であり、当遺跡における居住域の一角を伺い知るのみならず、県内でも数少ない弥生時代中期平地式建物の貴重な検出例となった。第3章で述べたとおり、SX01・SX02は「焼失住居」となる可能性が高く、平地式建物の構造を知る上でも良好な資料である。現在、県内における弥生時代中期に属する「焼失住居」の調査例は知られておらず、後期に属するものとして下老子篠川遺跡・打出遺跡、江上A遺跡・江上B遺跡などが報告されている。ここでは調査のまとめとして今回検出された「焼失住居」について検討してみたい。

SX01・SX02を概観すると、壁周溝・周堤の有無等の差異は、遺構の遺存状況等によっても左右されるため、両者規模や構造はほぼ類似するものであったと思われる。

出土遺物は、両者とも屋内部に掘り込みを持たない平地式建物であるため、床面に遺物が残りにくい構造であったこともあるが、殆ど出土しないことから、焼却前に土器等の片付けや持ち出し等が行われた可能性がある。また、SX01・SX02は、近接する造構であるにもかかわらず、炭化材の遺存に少なからぬ差異が生じていることから、程度の差はある、両者共に焼土の二次的な移動が行われている。このことから、焼失後の「清掃・片付け」的な行為の存在を推定することができる。

焼失要因については、復元建物の焼失実験や建物内の遺物出土状況、炭化材出土状況等から、失火、放火、飛火等の様々な解釈が与えられている(石野 1985)。また、麻柄一志氏は、季節による住み替えを要因として、屋内部に土器のないものは夏季に、土器が残存するものは冬季に焼却された可能性を論じている(麻柄 1999)。

SX01・SX02の焼失要因を検討すると、①屋内部に遺物が殆んど残されていない。②焼失後の片付けの存在が推定できる。③調査区内では、遺構の切り合いが殆んど認められず、遺構発掘後に再び居住した形跡がない。以上の3点をふまえると、やはり意図的な焼却処分であり、集落の廃絶・移動がその要因として考えられる。

### 2. 弥生時代中期の平地式建物（第17図参照）

今回の調査で検出した、周溝をもつ平地式建物について簡単にまとめると、SX01(2)は、周溝幅約0.70～1.20m、外縁部で約13.0m×12.0mの円形を呈し、北東に2か所の開口部をもつ。周溝内部には径約6.0mの壁周溝をもち、中央には灰穴炉を1基備える。確実な柱穴配置を提えることはできなかったが、規模からみて4～6本主柱と推測できる。

SX02(3)は、周溝幅約0.60～1.80m、外縁部で約13.0m×12.0mの円形を呈し、北東に1か所の開口部をもつ。周溝内側には、周溝掘削上を盛り上げた周堤の存在が考えられる。中央には灰穴炉を1基備えるが、SX01に見られた壁周溝は検出できなかった。柱根を伴う柱穴を2基確認できたが、主柱2本の建物とは考えにくい。SX01同様に規模からみて4～6本主柱と推測できる。

壁周溝・周堤の有無等の差異はあるが、SX01・SX02は共に岡本淳一郎氏の分類(岡本 2003:2006)に照合すれば、広溝式平地式建物の開口型多主柱にあたる。

周溝を持つ建物については、岡本淳一郎氏が全国的な集成・系譜についての検討を行っている(岡本 2006)。これによると、北陸(福井県・石川県・富山県・新潟県)における、弥生時代中期の周溝を伴う平地式建物の検出例としては、福井県下屋敷遺跡(1)、石川県穂部運動公園遺跡(6)、上荒屋遺跡、西念・南新保遺跡、横江古墳遺跡、千田遺跡、戸水B遺跡(10・16)、新潟県下谷地遺跡(17)等が挙げられ、県内では高岡市石塚遺跡(5)の1例のみ報告されている。

中期前葉から中葉に位置付けられ、最古の検出例となる下屋敷遺跡住居址は、土坑が環状に巡る周溝をもつ。中期



2 高島A遺跡SX01

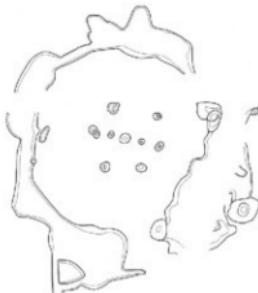
3 高島A遺跡SX02



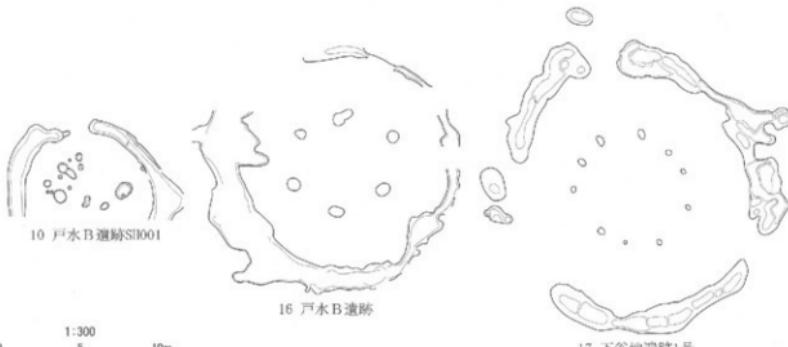
4 高島A遺跡



5 石塚遺跡



6 磯部運動公園遺跡2号建物



0 1:300 5 10m

第17図 北陸における弥生時代中期の平地式建物（一部改変）

中葉から後葉では、これに開口部を備えた周溝をもつものが加わる。柱穴配列は、下屋敷遺跡が多主柱で、中期中葉遺構に4本柱のものが加わる。中期中葉以前については、下屋敷遺跡の1例のみのため様相は明らかではないが、中期中葉から後葉は、周溝・柱穴配列とともに多種多様で、後期以降に土坑を環状に巡らす周溝の消滅、4~6本主柱へと定型化する以前の、過渡的な様相を示すものと考えられる。高島A遺跡のSX01-SX02も、この流れの中で捉えることができるであろう。なお、高島A遺跡では平成9年度調査区でも、平地式建物となる可能性がある円形周溝状遺構(4)が2基確認されている。

周溝を持つ平地式建物は、河川や潟湖の周辺部等の低湿地に多く立地する、北陸の弥生時代中期集落において、環境に適応した住居形態として盛行する。後期以降には、北陸の系譜とされる周溝を持つ建物が、東北・東海・関東地方にも広まるが、出現期である北陸の弥生時代中期の検出例が依然として少なく、変遷や系譜等を検討することが困難である。今回検出したSX01-SX02は、数少ない検出例として住居史を検討する上で良好な資料と評価できよう。

番号	遺跡名	時期	分類1	分類2	備考
1	下屋敷遺跡	弥生中期前	広溝平地	土坑多	
2	高島A遺跡SX01	弥生中期	広溝平地	開口多	焼失住居
3	高島A遺跡SX02	弥生中期	広溝平地	開口多	焼失住居
4	高島A遺跡	弥生中期後	広溝平地	圓錐多	
5	石塚遺跡	弥生中期	広溝平地	開口多	
6	磯部運動公園遺跡2号建物	弥生中期	広溝平地	開口多	
7	上荒屋遺跡SB90	弥生中期	狭溝平地	開口多	
8	西念・南新保遺跡J区3号住、SB01	弥生中期後	広溝平地	開口多	
9	横江古墳遺跡B区SB04	弥生中期後	広溝平地	開口4	
10	戸水B遺跡SH001	弥生中期後	広溝平地	開口多	
11	戸水B遺跡SH002	弥生中期後	広溝平地	開口4	
12	戸水B遺跡SH003	弥生中期後	広溝平地	開口4	
13	戸水B遺跡SH004	弥生中期後	広溝平地		
14	戸水B遺跡SH005	弥生中期	広溝平地	土坑多	
15	戸水B遺跡SH006	弥生中期後	広溝平地		
16	戸水B遺跡	弥生中期	広溝平地	圓錐多	
17	下谷地遺跡1号	弥生中期後	広溝平地	土坑多	
18	下谷地遺跡2号	弥生中期後	広溝平地	土坑多	
19	下谷地遺跡3号	弥生中期	広溝平地	土坑多	
20	下谷地遺跡4号	弥生中期	広溝平地	土坑多	

第3表 北陸における弥生時代中期の平地式建物一覧

### 3. 高島A遺跡出土の土器について

今回の調査では、弥生時代中期に属する平地式建物の周溝や廐棄土坑等の遺構から、弥生土器がまとまりをもって出土した。出土した弥生土器は在地の櫛描文系土器を中心とするが、中部高地を中心に分布する栗林式土器の撒入品も客体的に含まれている。

今回の調査で確認した、両者の共伴関係は、北陸地方の東西土器編年のクロスチェックにも有用な資料となる。ここでは、簡単ではあるが、既存の編年による高島A遺跡出土の土器を照合し、弥生土器についての検討及び編年を再認識するための一考察を提示したい。

富山県では、上野卓氏、岡田一広氏によって、高岡市石塚遺跡資料を用いた当期の編年案が示されている(上野1972 高岡市教育委員会 2001)。しかし、現在に至るまで資料の蓄積が進まず、隣県石川県の成果に準拠することが

多い。ここでは、福海貴子氏によって示された、八日市地方遺跡河川出土の資料を用いた編年(福海 2003)を基に、今回の調査で一定量の搬入品が出土している栗林式土器の年代を検討し、当遺跡出土土器の位置付けを行いたい。栗林式土器については、寺島孝典氏によって示された、栗林式土器を古段階古相・新相、中段階古相・新相、新段階まで、大きく5段階に分けた編年から(寺島 1999)。

搬入品と考えられる栗林式土器は計17点出土しているが、遺存状態の良好な資料が少ないため器形・文様がある程度識別可能な資料を用いて、土器の年代の位置付けを検討したい。なお、以下の資料番号は図版番号に対応する。

198はB区SX02周溝出土の無頸壺、177・199は壺と考えられ、それぞれB区SX02周溝(SD78)上層・B区SX02周溝出土である。胴部最大径が中位にあり球形に近いことや、胴部上半に横走する文様帯が認められることから、栗林式古段階古相に比定できる。94はB区SK29出土の甕で、口縁部が僅かに外反し、そのまま大きくなりずに胴部に至る。内面は横ハケの後ミガキ調整を行い、外面胴部上半に横走する羽状のハケを施し、ハケの結節点に列点文を加えるなど、栗林式古段階古相に比定できる。

一方、在地の櫛描文系土器については、器形がわかるものが多数出土している。上記の栗林式土器が共伴する、遺構出土資料を中心に概観する。

B区SX02周溝(SD78上層)出土の178は外面頸部～肩部に、上方から直線文・簾状文・直線文・波状文・直線文・扇形文の順に施し、口縁内面には斜行短線文が施される。口唇部と外面最下段の直線文上に突起を飾る甕であり、八日市地方遺跡の7期まで遡る可能性がある。

83・84・86はB区SK21の出土である。83は頸部に縦ハケがみられ、胴部は直線文と簾状文の複合構成となる。口縁内面に斜行短線文がみられ、7・8期に属すると考えられる。84は直線文・波状文・直線文・簾状文・直線文・波状文の順に施文され、口縁内面には斜行短線文がみられる。また口縁は、指頭による小波状口縁で飾られ、7・8期に属すると考えられる。86は、頸部に縦ハケがみられ、直線文・斜行短線文からなる複合構成の下に扇形文が施文される。底部鶴面に横位のケズリ調整が見られ、9期の要素をもつが、胴張りが少なく水平近くまで広がる口縁部や施文等から、総じて7・8期の様相が濃く、8期に属するものと考えたい。

98はB区SK29出土の甕口縁部で、端部内面に短い垂下線を連続し、その下に波状文が施文される。7・8期に属すると考えられる。

なお、B区SX01周溝とSX02周溝、SX02周溝とSX02周溝(SD78)上層、SK21とSX01・02周溝、SK29とSX02周溝出土遺物とは、それぞれ接合関係にある。B区において、弥生時代中期の遺構間に切り合いが殆んど認められない点からも、上記の遺構は、ほぼ同時期に並存していたと考えられる。従って、個々の遺構出土遺物であっても、全体的な傾向を一定程度示すものと理解できる。

以上、限られた資料ではあるが、特徴的なものを抽出した。今回出土した栗林式土器は、栗林式古段階古相を示すものが主体となり、在地の櫛描文系土器は、八日市地方編年の7・8期が主体と考えられる。栗林式土器との並行関係を考慮すれば、在地の櫛描文系土器には、栗林式古段階に並行する、7期にまで遡るもののがほぼ確実に存在するものと評価できる。

近年、石川・新潟両県での調査研究が進み、櫛描文系土器と栗林式土器との併行関係を示す資料が充実してきている。富山県は西方の櫛描文系土器と、東方の栗林式土器とを繋ぐ中間地点に当たるため、今後、独自編年の構築が必要となる。その際に、東西両地域との比較・検討が重要なことは言うまでもないが、今回の高島八遺跡出土土器は、両者を繋ぐ良好な資料となるであろう。

#### 4. 調査のまとめ

今回の調査では、弥生時代中期を中心とする多数の遺構・遺物を確認し、2棟の平地式建物の検出によって「居住域」の一角をおさえることができた。

調査区は、中央の農道を挟んで西側にA区、東側にB区が位置するが、両地区にまたがる自然河川を挟んで遺構のありかたも東西に二分されている状況である。A区では、自然河川が調査区北東部に広がっており、ここに流入するSD06や、河川の湾曲部に掘り込まれたSX16をはじめ、溝・土坑を多数検出している。B区では、平地式建物・掘立柱建物・土器廐棄土坑・溝状遺構・柱穴といった遺構を検出した。前項でも述べているが、今回の調査で、高島A遺跡として初めて明確な平地式建物・掘立柱建物を検出したことにより、これまで不明であった弥生時代中期の集落居住地の様相を何を知ることができた。また、平地式建物は廃絶に伴う焼失の可能性が高く、集落の変遷過程を知る上でも大きな成果が得られた。

出土遺物には弥生土器・石器、緑色凝灰岩・ヒスイ片・珠洲焼・近世陶磁器等があり、大部分が弥生時代中期の土器で占められている。出土した弥生土器は、壺・壺・鉢・ミニチュア土器・土製円盤等多器種にわたり、器面を直線文・波状文・簾状文・斜行短線文・羽状文等の各種描画文で飾る在地の土器が主体となっている。また、点数は少ないが、果林式土器や櫻田型磨製石斧といった長野県北部からもたらされた搬入品や、東海・瀬戸内東部地方の影響を受けた十器、ヒスイ原石等も出土しており、他地域との広範な交流・交易の存在を示唆する。遺物の大部分は、弥生時代中期の短期間にうちに形成された遺構からの出土であり、中部高地をはじめとする、周辺地域との並行関係を知る上でも良好な資料となる。

今回の調査区内では、南東～北西へ流れる河川の北側に建物が構築されており、河川南側では明確な建物が見つかっていない。また、試掘調査によってA区南西部に湿地帯の存在が確認されている点を踏まえると、弥生時代中期には河川を挟んで北側あるいはB区以東に居住域が広がっていたと考えられる。

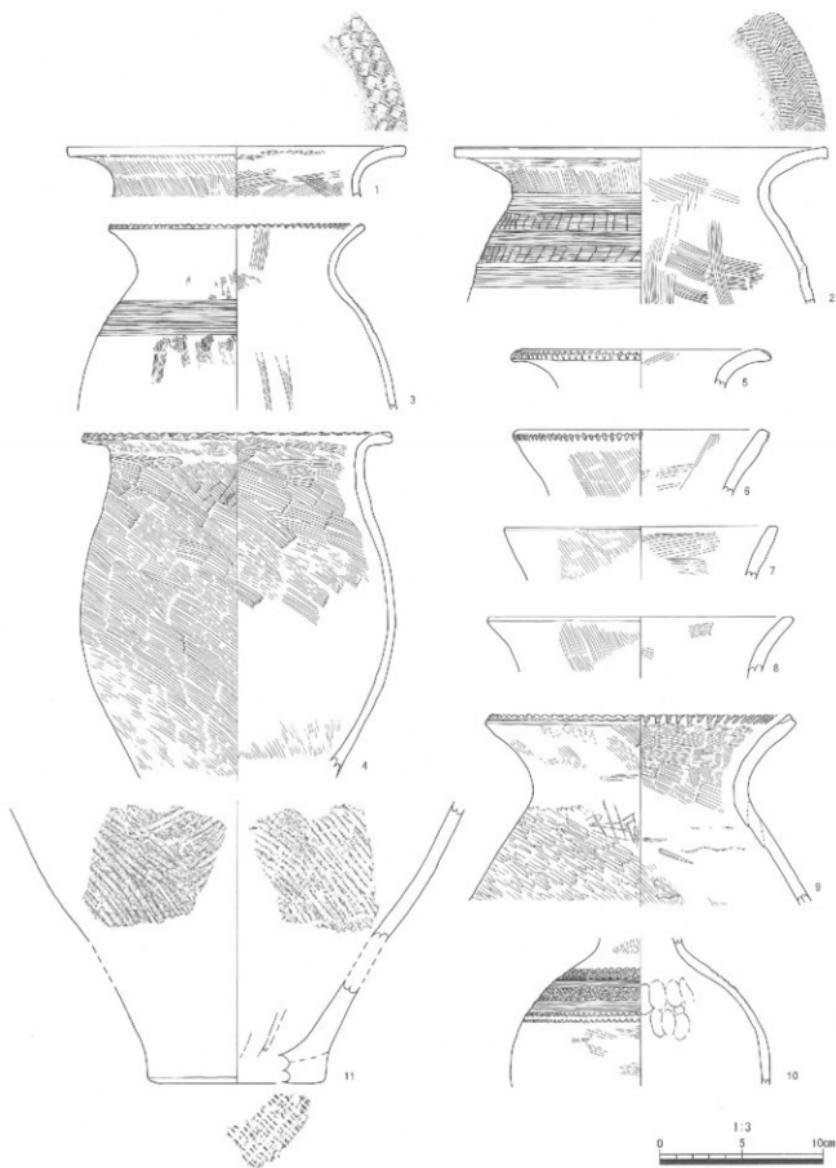
高島A遺跡では、これまでに発掘調査が継続して実施されており、東に隣接する作道遺跡とあわせて、弥生時代中期から古墳時代前期の遺構・遺物が広範囲に広がっていることが確認されている。このうち、今回の調査区及び作道遺跡では、確認できる遺構・遺物がほぼ弥生時代中期に限定され、弥生時代中期に突如集落が形成され、ごく短期間のうちに集落を廃棄し、居住域を移動させていった様子が伺える。また、今回の調査区北東約150mに位置する平成9年度調査区では、弥生時代中期後半の周溝状遺構と方形周溝墓が、北方約200mに位置する平成17年度調査区では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓・方墳の周溝とみられる、方形にめぐる溝が確認されている。今回の調査では弥生時代中期の居住域の一角を確認したが、居住域と墓域との関連や、時期的な変遷の検討については今後の課題である。

近年、市内や周辺地域での弥生時代中期の遺跡の調査例が増加しており、高島A遺跡をはじめ、作道遺跡・津幡江遺跡・小林遺跡・三ヶ・本開発遺跡・中曾根西遺跡など放生津潟周辺部の様子が少しずつ明らかになってきている。放生津潟周辺部は水稻耕作の適地であり、河川や潟湖・日本海を利用した水陸交通の要衝に位置するなど、恵まれた環境下にある。潟湖・河川が媒体となって遠隔地と個々の集落が結び付き、相互の密接な関係の下で集落を営んでいたものと考えられる。今後の調査により、射水平野における弥生時代中期の様相が少しずつでも明らかになっていくことを期待したい。

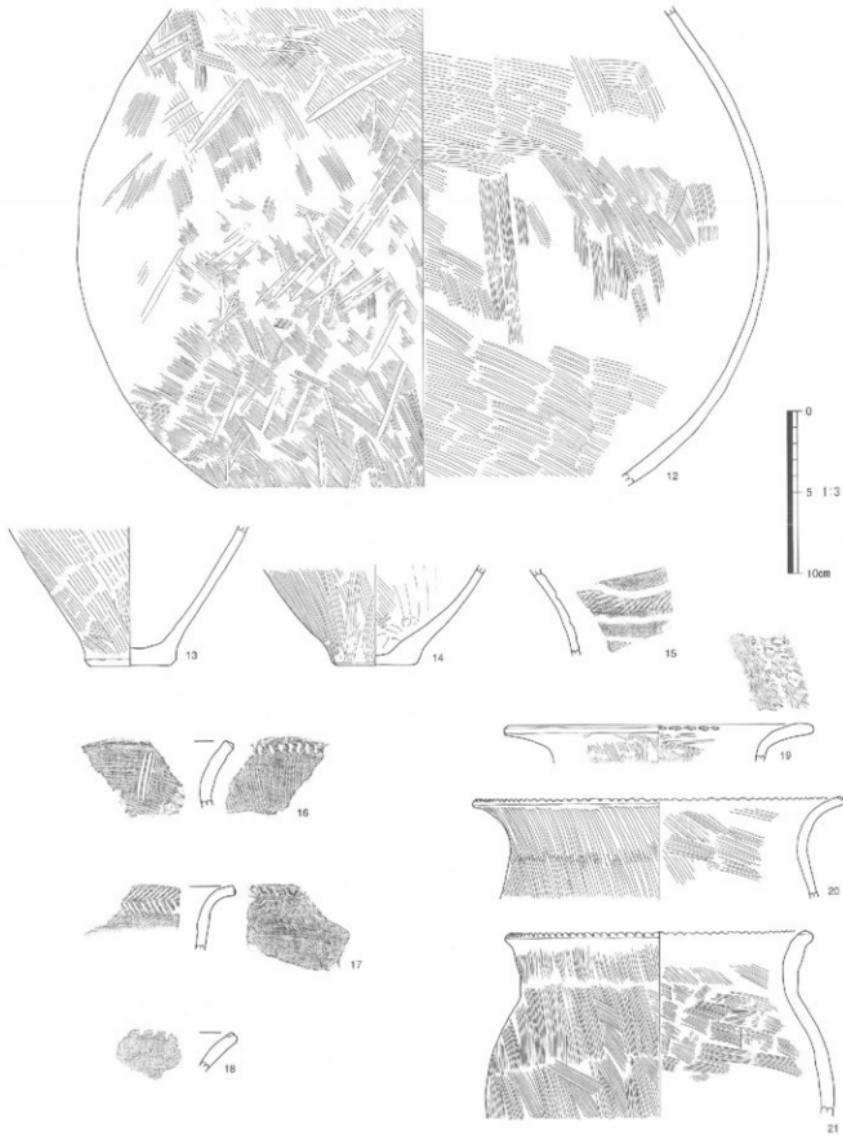
(宮脇)

〈引用・参考文献〉

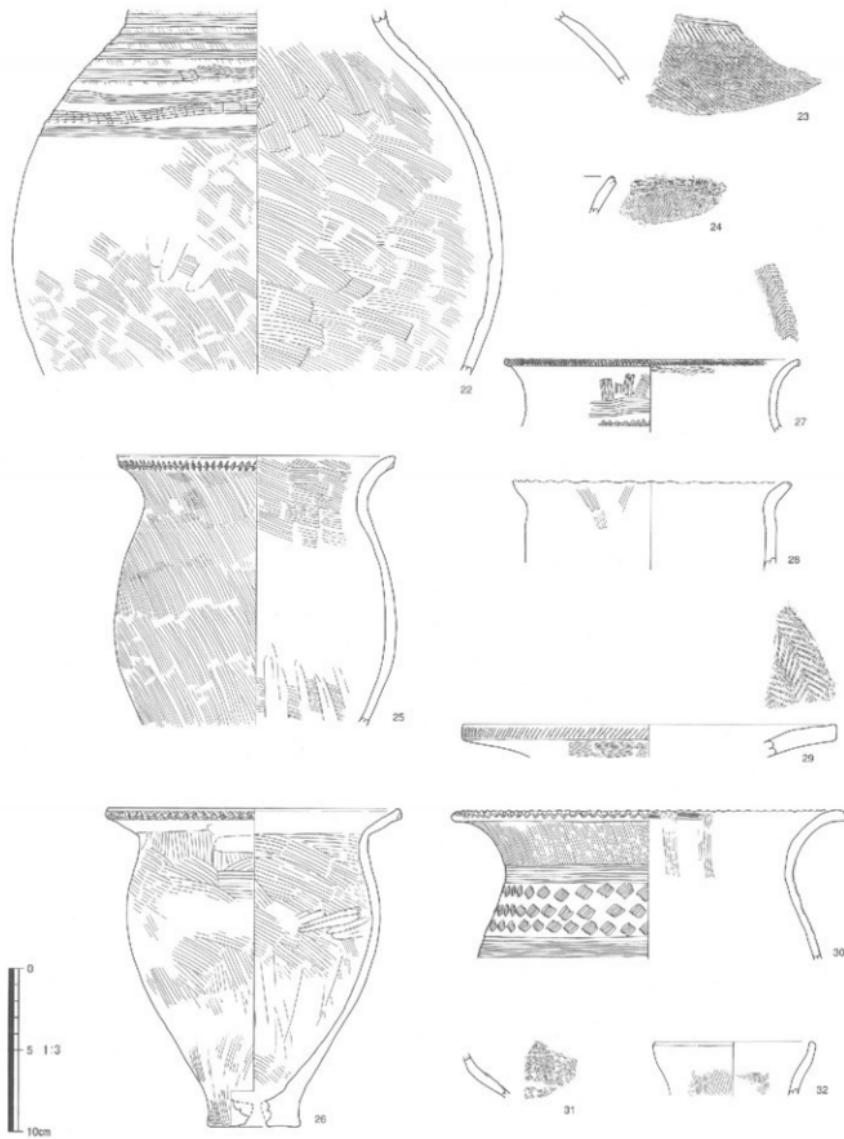
- 石川日出志 2002 「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌99・100』長野県考古学会
- 石野博信 1985 「古代火災住居の課題」『末永先生米寿記念献呈論文集』
- 射水市教育委員会 2006 「作道遺跡発掘調査報告」—市道松木作道線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—
- 上野 章 1972 「弥生時代附、古式土師器」『富山県史 考古編』富山県
- 岡本淳一郎 1998 「弥生時代周溝造構に関する一考察」『紀要創刊号富山考古学研究』財団法人富山県文化振興財団
- 岡本淳一郎 2003 「周溝をもつ建物」の基礎的研究』『富山大学考古学研究室論集 暱氣樓
- 秋山進午先生古稿記念— 六一書房
- 金沢市教育委員会 1988 「金沢市礪部運動公園遺跡」『金沢市文化財紀要70』
- 財团法人石川県埋蔵文化財センター 2004 「金沢市戸戸B遺跡（10・12・13次）」『県民せせらぎの社整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 財团法人富山県文化振興財団 2006 「下老子笹川遺跡発掘調査報告」—能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財 報告V—『埋蔵文化財発掘調査報告第31集』
- 市道遺跡発掘調査団 1976 「市道長野県佐久市市道遺跡の発掘調査」
- 上越市 2003 「吹上遺跡」『上越市史 資料編2 考古』上越史編さん委員会
- 上越市教育委員会 2002 「新潟県上越市吹上遺跡発掘調査概要報告書」
- 新潟市教育委員会 1998 「新潟市埋蔵文化財分布調査報告II」
- 新潟市教育委員会 2000 「富山県新潟市高島A遺跡発掘調査概要」民間ドライブイン造成に伴う高島A遺跡発掘調査1999年度
- 高岡市教育委員会 1997 「市内遺跡調査概報V」—東木津遺跡・石塚遺跡・下佐野遺跡の調査—『高岡市埋蔵文化財調査概報第35冊』
- 高岡市教育委員会 2001 「石塚遺跡・東木津遺跡調査報告」—都市計画道路下伏間江福田線築造に伴う平成9・10年度の調査—『高岡市埋蔵文化財調査報告第7冊』
- 高岡市教育委員会 2003 「石塚遺跡調査概要VI」—介護老人保険施設「きぼう」建設に伴う調査—『高岡市埋蔵文化財調査概報第54冊』
- 寺島孝典 1999 「長野盆地南部の様相」『99シンポジウム 長野県の弥生土器編年発表要旨』長野県考古学会平成10年度冬季大会』長野県考古学会弥生部会
- 中野市歴史民俗資料館 2005 「平成十七年度中野市歴史民俗資料館企画展図録 栗林遺跡と千曲川水系の弥生土器」
- 馬場伸一郎 2004 「弥生時代長野盆地における板出型磨製石斧の生産と流通」『駿台史学第120号』駿台史学会
- 久田正弘 1999 「弥生時代中期における北陸と長野の関係」『長野県考古学会誌92号』長野県考古学研究会
- 福海貴子 2003 「八日市地方遺跡I」一小松駅東地区西整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—石川県小松市教育委員会
- 麻柄一志 1999 「焼かれた村—北陸地方の火災住居について—」同志社大学考古学シリーズⅦ『考古学に学ぶ—遺構と遺物—』
- 増山 仁 1989 「小松式土器の再検討—小松市八日市地方遺跡出土土器の再整理を通して—」『北陸の考古学Ⅱ石川考古学研究会誌第32号』石川考古学研究会



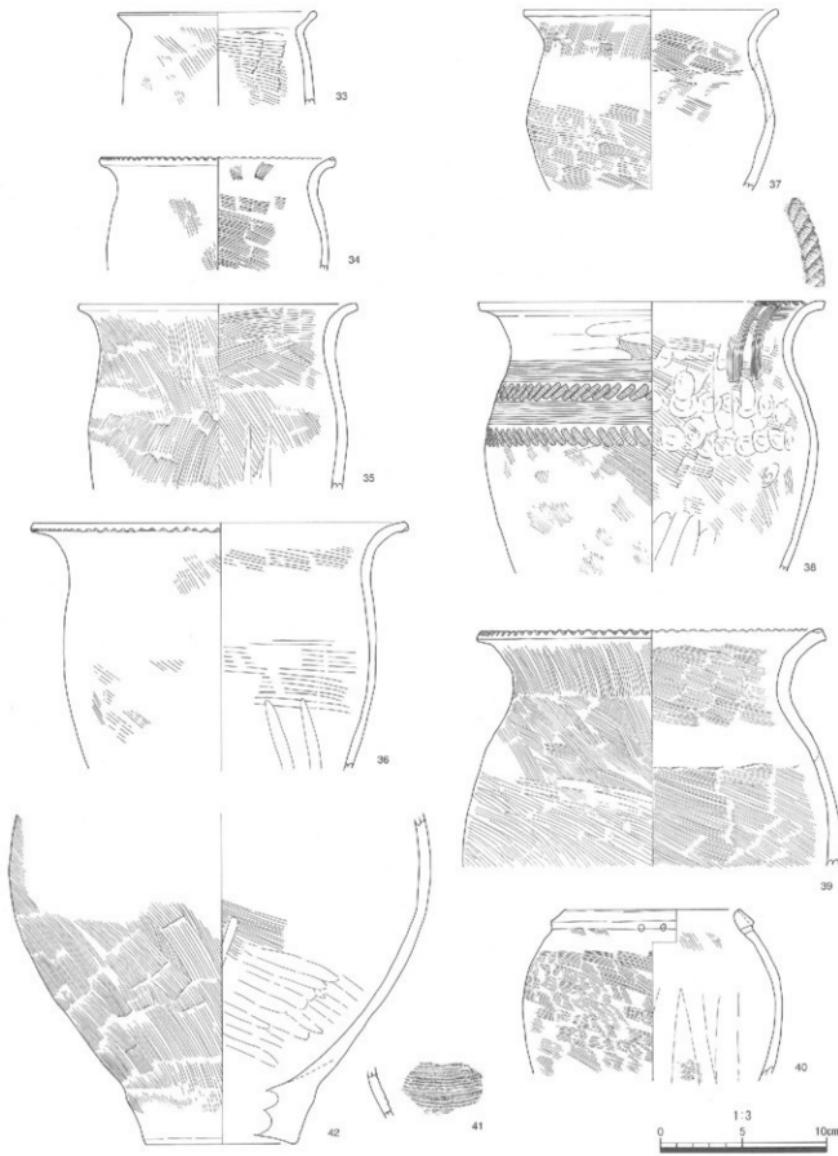
第18図 遺物実測図1 [A区] SR01(1~11)



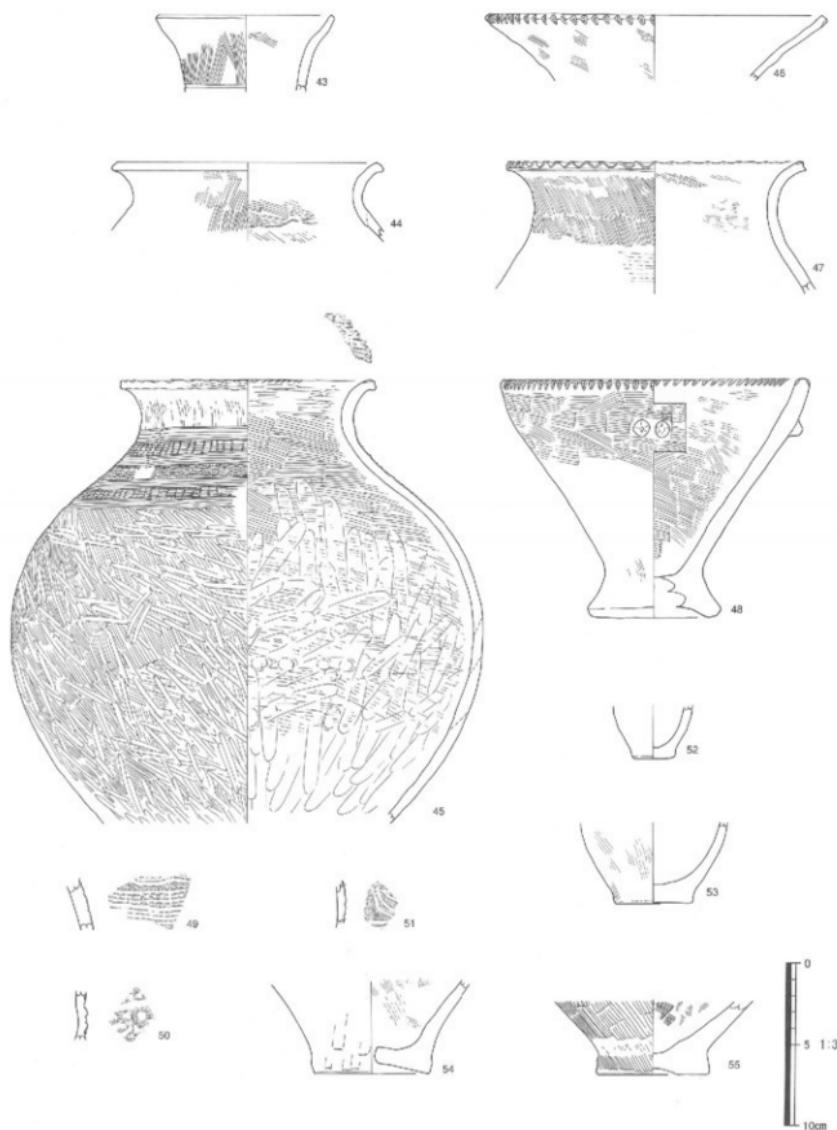
第19図 遺物実測図 2 [A区] SR01(12~15) SD06(16~21)



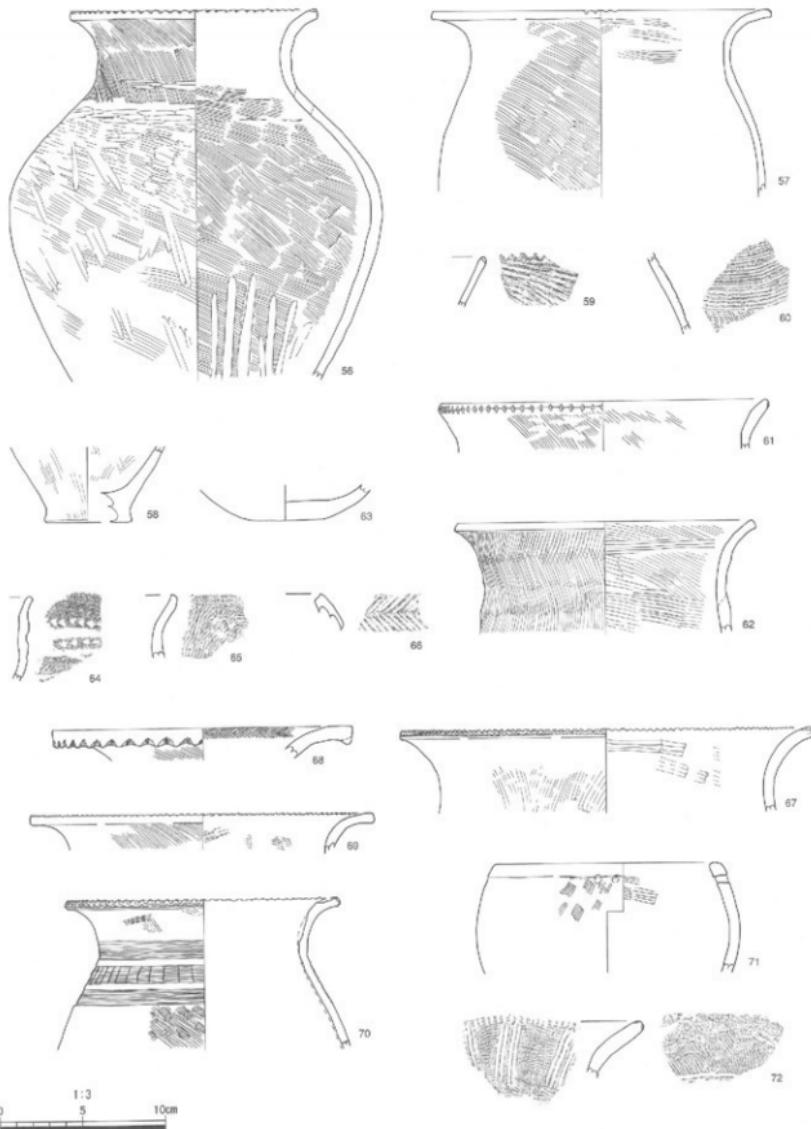
第20図 遺物実測図3 〔A区〕 SD06(22) SD08(23~30) SD11(31) SD14(32)



第21図 遺物実測図4 [A区] SX16(33~42)



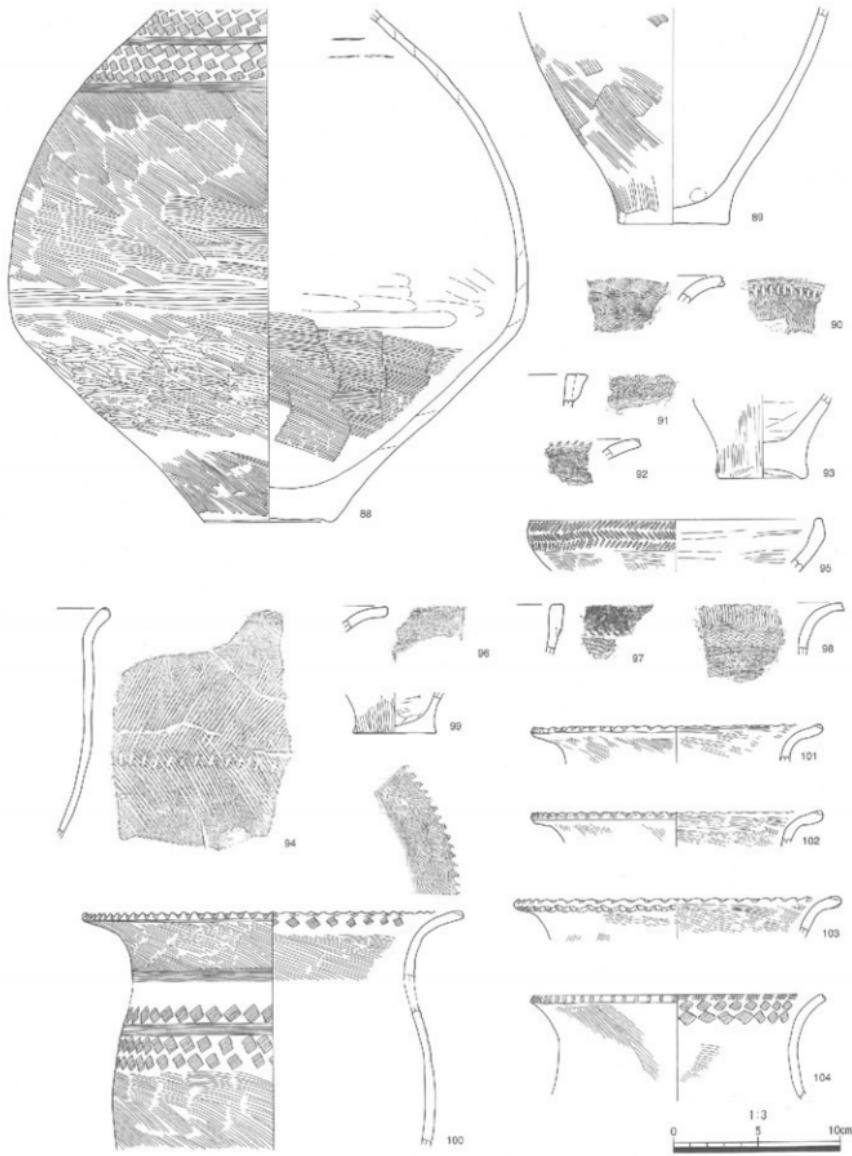
第22図 遺物実測図 5 [A区] SX16(43~48) SD17(49) SD18(50) SD22(51) SD26(52・53) SK28(54) SK31(55)



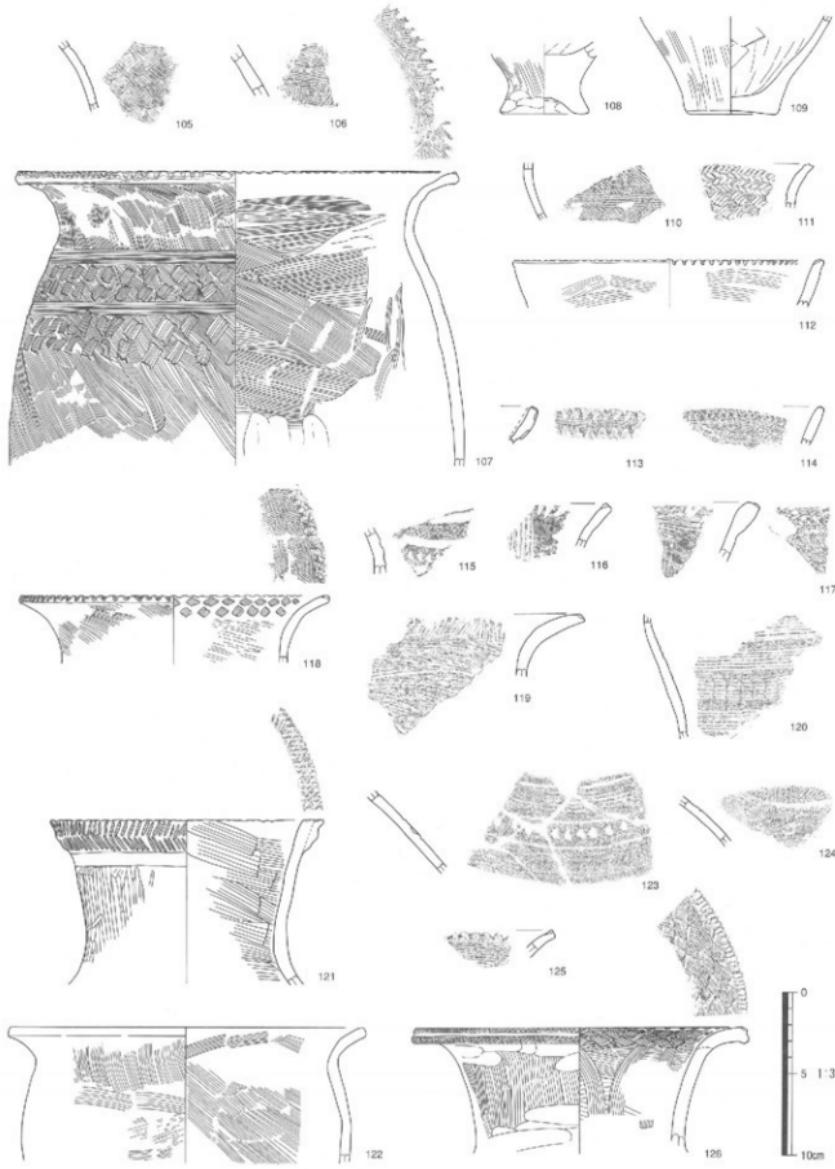
第23図 遺物実測図6 [A区] SK27(56) SK32(57・58) SK33(59~61) SK34(62) SK36(63) SK38(64・65)  
SK39(66・67) 包含層(68~72)



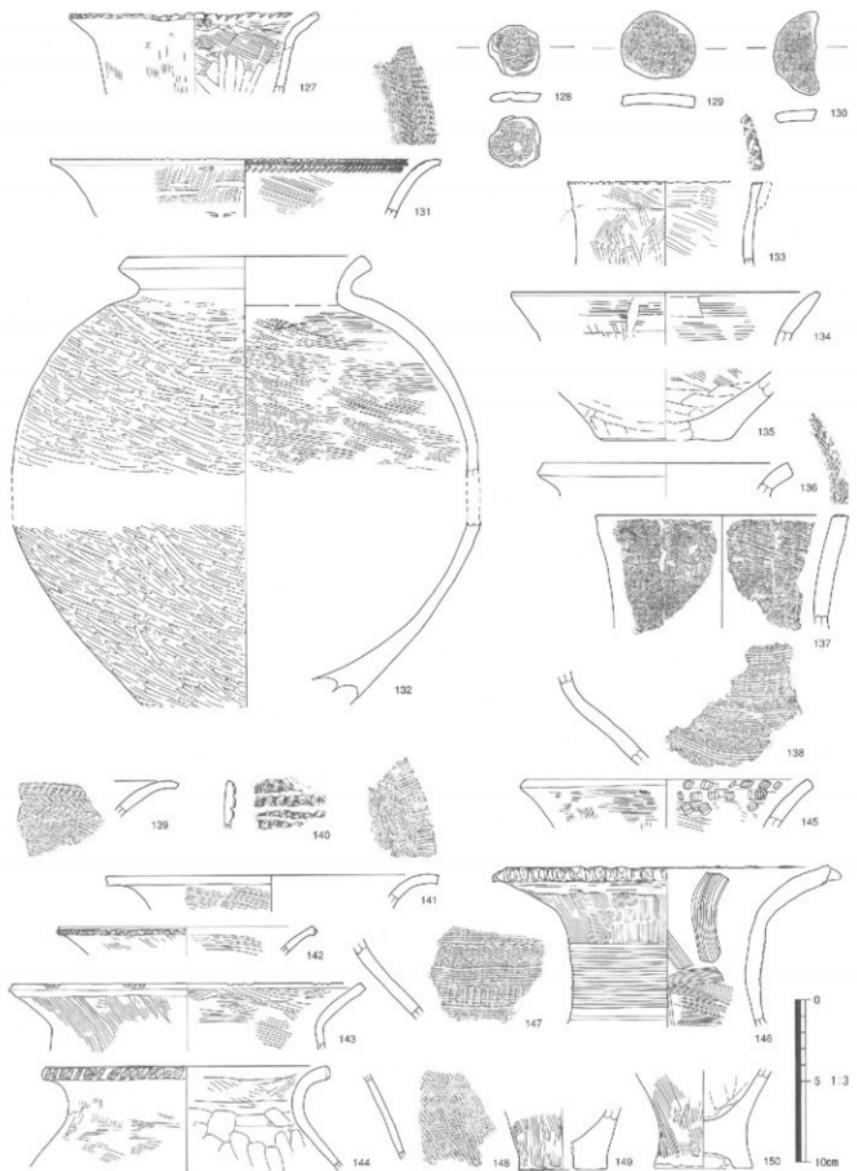
第24図 遺物実測図7 [B区] SR01(73~75) SD10(76~79) SD17(80) SK21(81~87)



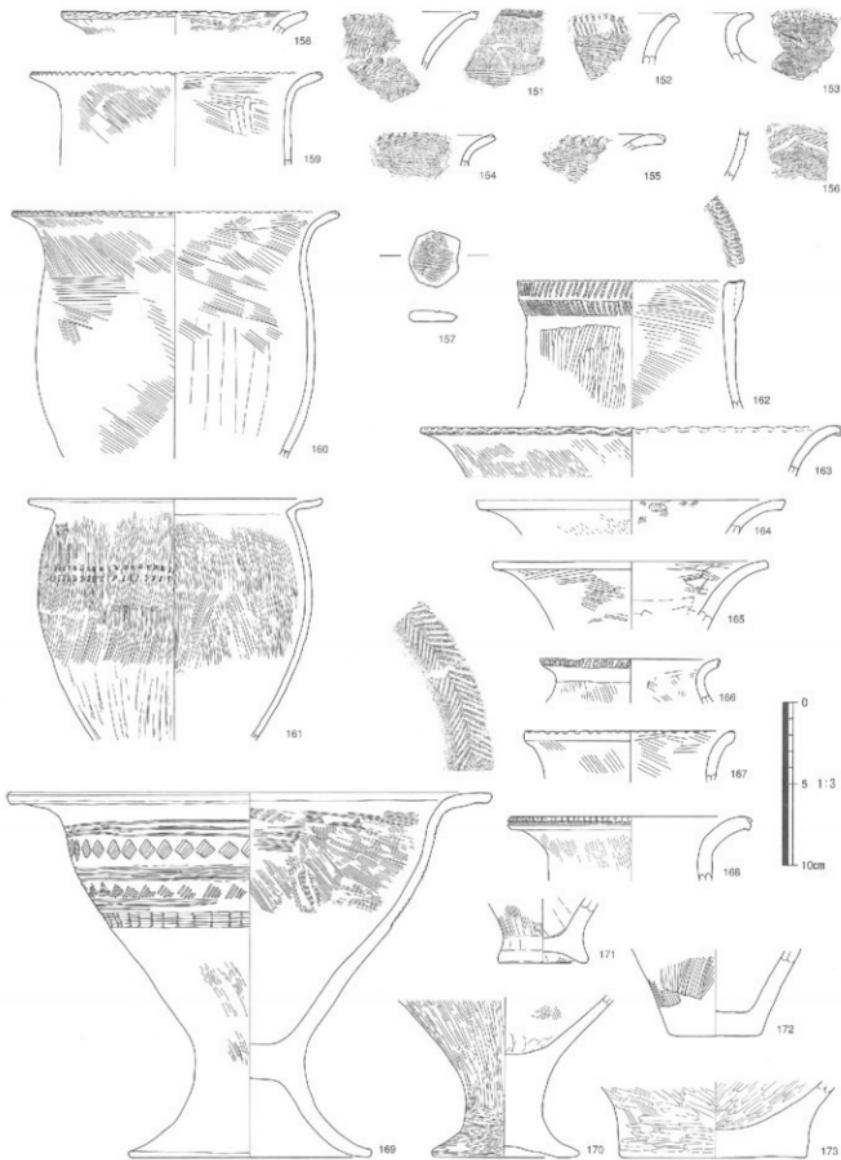
第25図 遺物実測図 8 [B区] SK21(88・89) SK28(90~93) SK29(94~99) SK33(100~104)



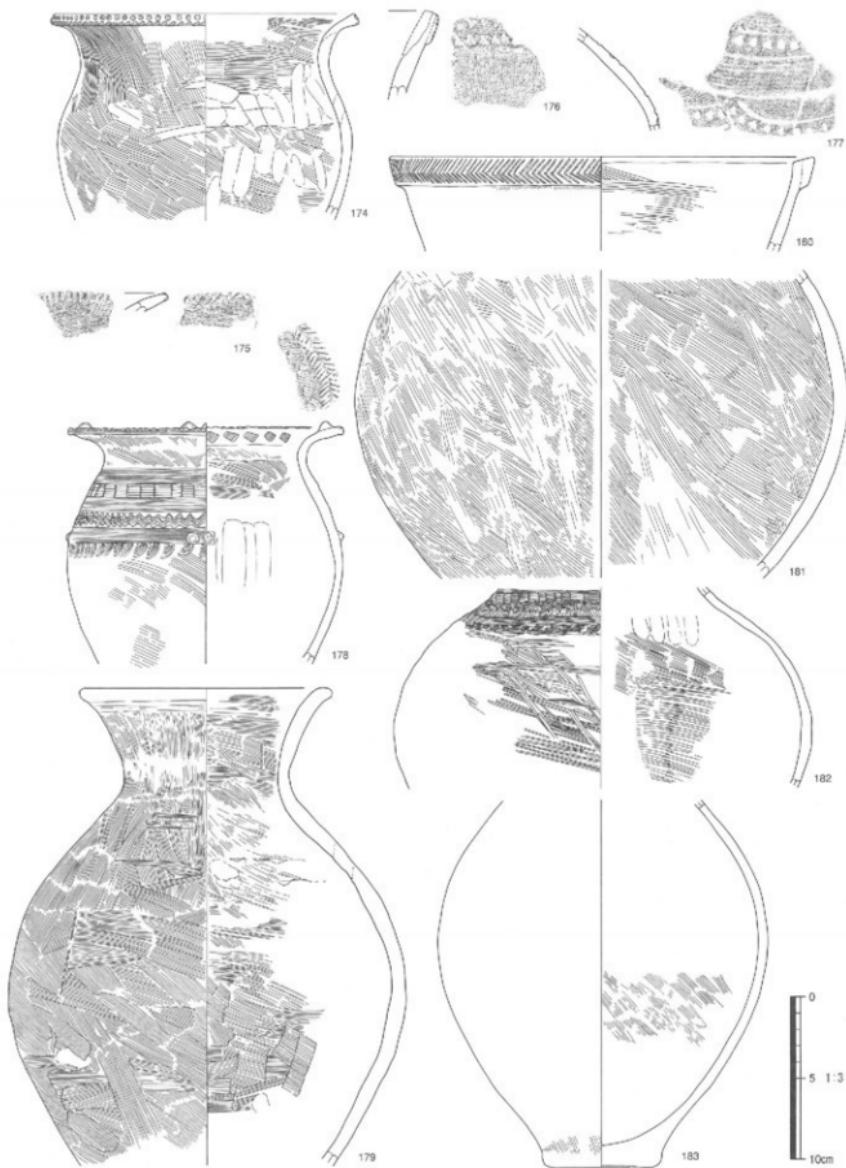
第26図 遺物実測図9 【B区】 SK33(105~109) SD42(110) SK53(111·112) SD57(113·114) SD58(115~117)  
SP59(118) SP70(119) SP74(120) SP88(121) SD93(122~124) SK94(125·126)



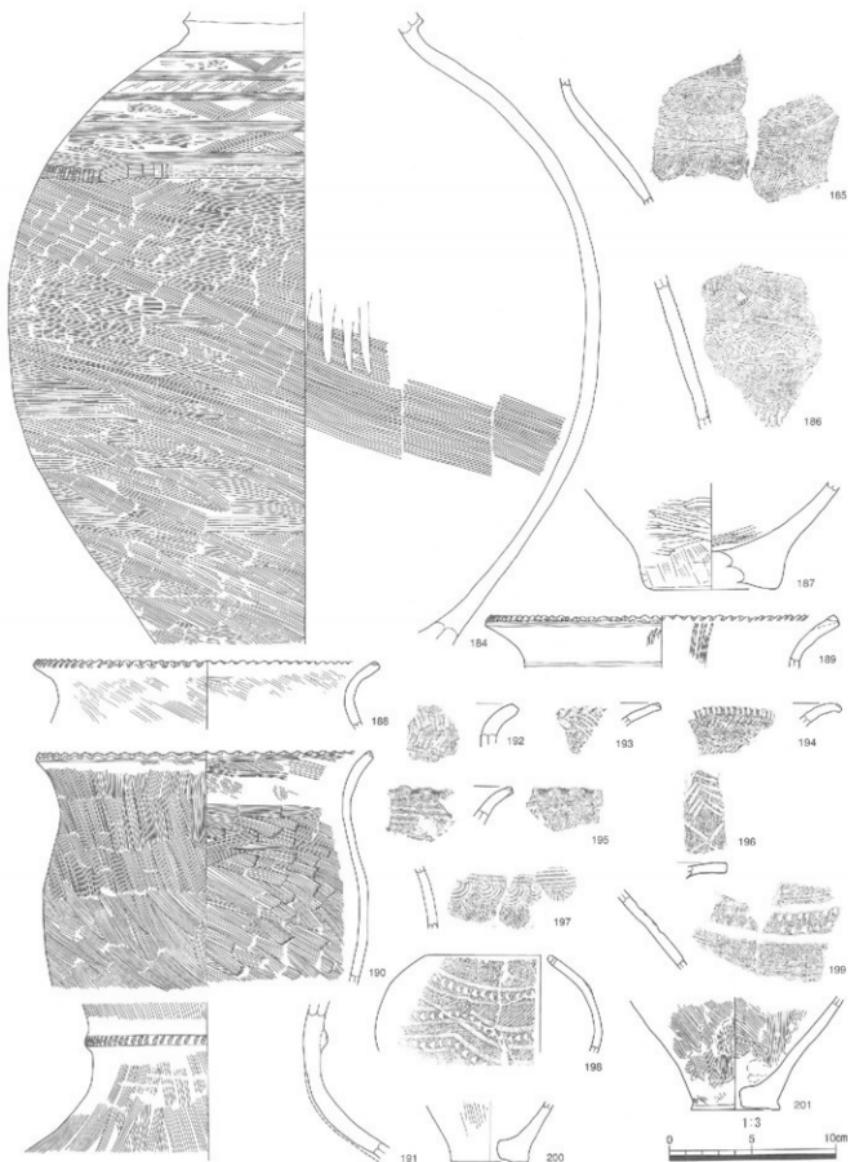
第27図 遺物実測図10 (B区) SX01(127~135) SD09(136~138) SD23(139~149) SX02(150)



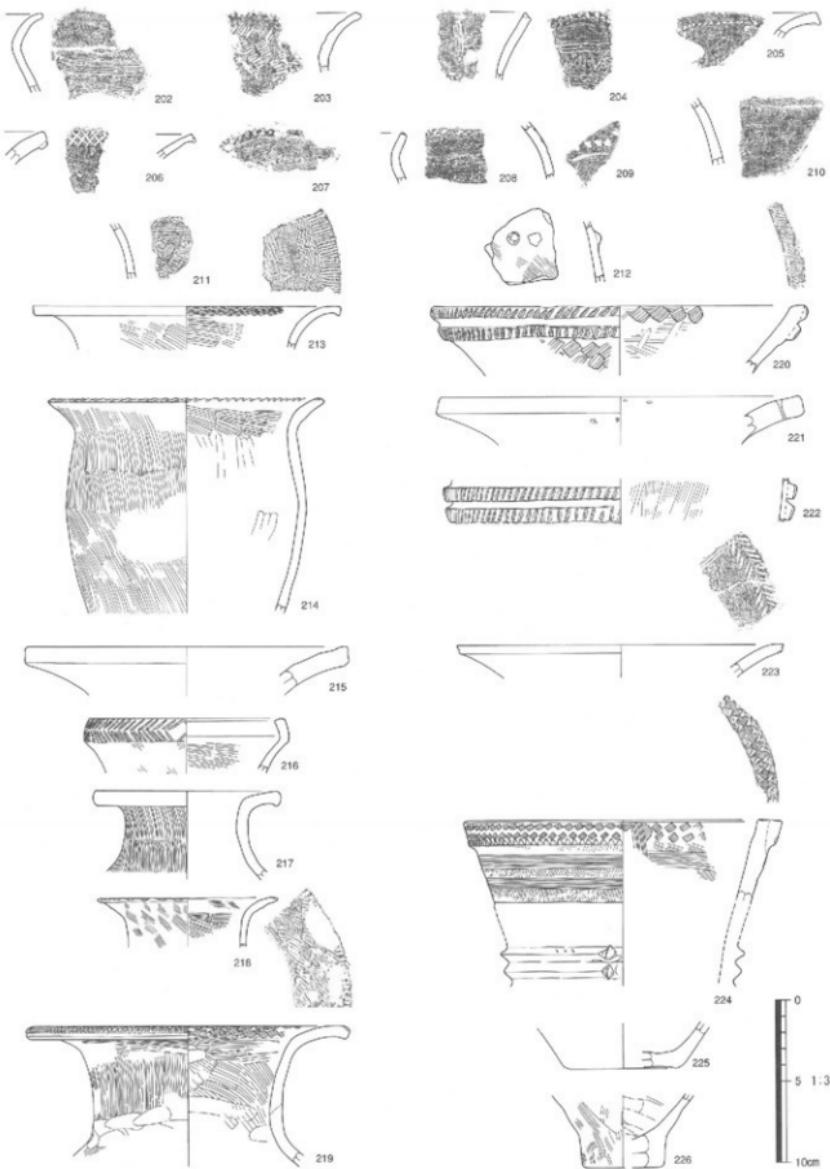
第28図 遺物実測図11 [B区] SD27(151~173)



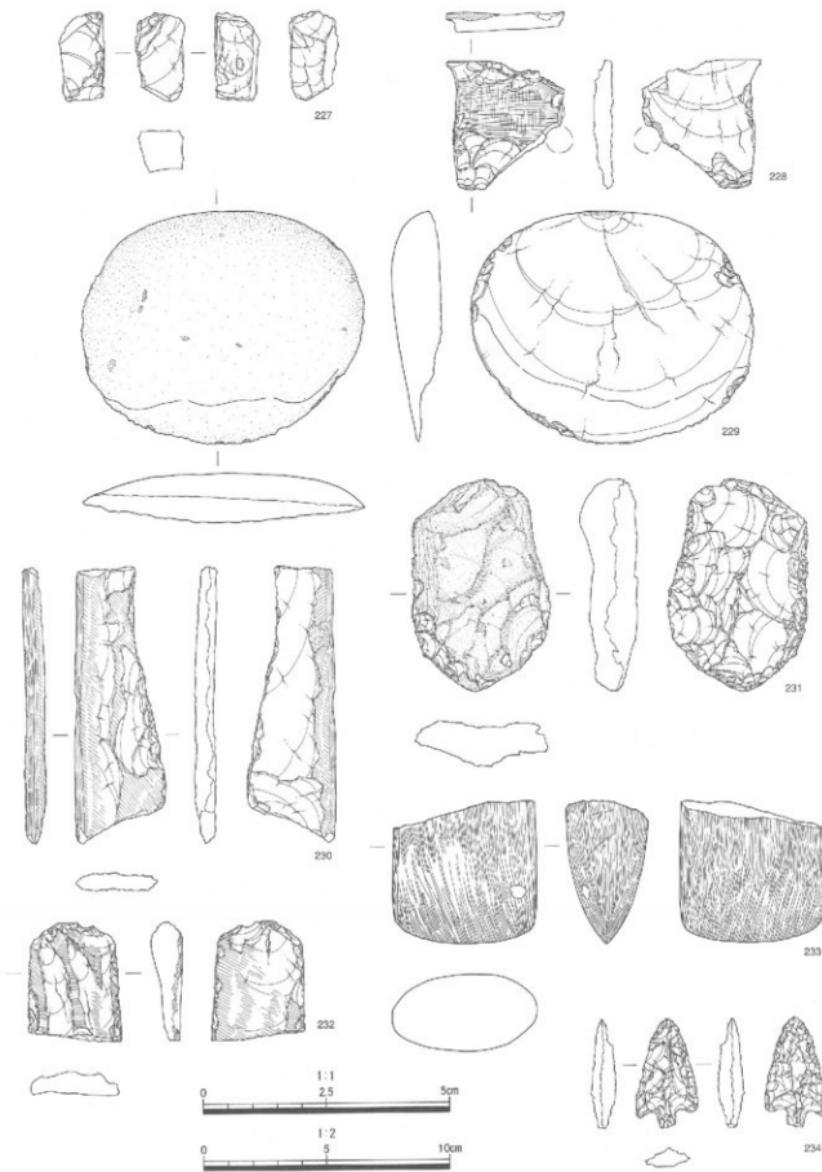
第29図 遺物実測図12 [B区] SP92(174) SD78上層(175~183)



第30図 遺物実測図13 [B区] SD78上層(184~187) SD78(188~201)

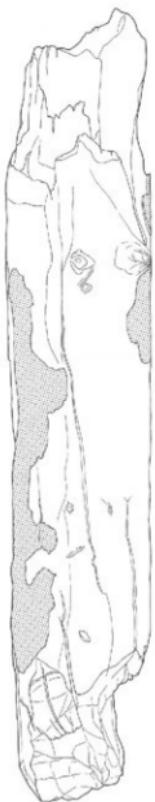
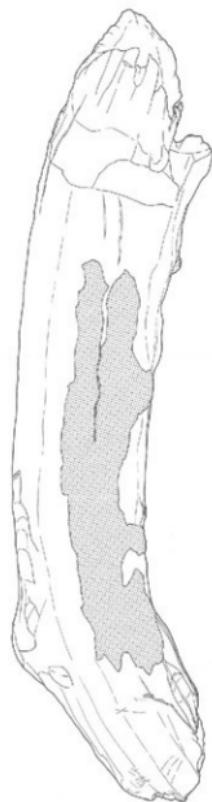


第31図 遺物実測図14〔B区〕包含層 排水溝 試掘調査 表上掘削(202~226)

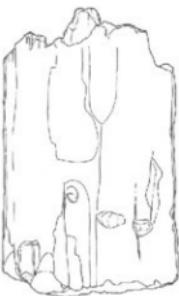


第32図 遺物実測図15 (227・234 1:1 228~233 1:2)

(A区) SK27(227) (B区) SD19(228) SD106(229・230) SD27(231) SD23(232) SD78上層(233) SD78(234)

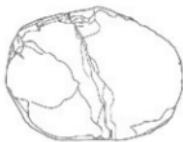


236



237

235



第33図 遺物実測図16〔B区〕SP22(235) SP92(236) SP96(237)

第4表 道標一覧表

地区	道標番号	道標規格(m)		最高度	出土遺物	時期	備考
		長軸	短軸				
A	SD01	43.34+	0.23+	1.64	弦生土器・石棒?	木製品	出土中間: SD01-SK36(切), SD02-SK36(切), SD30-SK36(切)される
A	SD02	12.66+	幅2.54	0.26	弦生土器・漆器		近世
A	SD03	31.24+	幅1.14	0.29	なし		中世以降
A	SD04	3.50+	幅0.45	0.06	弦生土器		中世以降
A	SD05	13.60+	幅0.90	0.28	なし		不明
A	SD06	15.60+	幅1.92	0.38	弦生土器		未生中間
A	SD07	13.32+	幅1.20	0.27	なし		不明
A	SD08	3.44+	幅0.36	0.19	弦生土器		未生中間
A	SD09	8.34+	幅0.72	0.15	なし		中世以降
A	SD10	13.01+	幅0.76	0.06	なし		SD01を(切), SD03(切)される
A	SD11	5.98+	幅0.54	0.07	弦生土器		未生中間
A	SD12	2.54+	幅0.20	0.04	なし		SPV7に(切)される, SD12との切り合いで關係は不明瞭
A	SD13	2.79	幅0.62	0.13	なし		不明
A	SD14	11.06+	幅0.60	0.10	弦生土器		SD12(切)と(切)される
A	SD15	3.44+	幅0.45	0.06	なし		中世以降
A	SK16	12.00+	幅5.52	0.78	弦生土器		未生中間
A	SD17	5.54+	幅0.58	0.08	弦生土器		SD16(切), SD18(切)される
A	SD18	9.74+	幅0.76	0.16	弦生土器		中世以降
A	SD19	5.00+	幅0.82	0.16	なし		SD18(切)と(切)される
A	SD20	2.30+	幅0.54	0.13	なし		不明
A	SD21	6.56+	幅0.86	0.22	弦生土器		SD01-SD20-SK37(切)される
A	SD22	4.16+	幅1.14	0.19	弦生土器		中世以降
A	SD23	2.14+	幅1.04	0.07	なし		SD01-SK38(切)される
A	SD24	2.78+	幅1.90	0.05	弦生土器		中世以降
A	SD25	2.12	幅0.24	0.08	弦生土器		SD01-SD22(切)される
A	SD26	8.39+	幅0.50	0.09	弦生土器		中世以降
A	SK27	1.57	1.08+	0.15	弦生土器・綠色施釉習片		未生中間
A	SK28	1.38+	0.98+	0.12	弦生土器・砾石		未生中間
A	SK29	0.88	0.84	0.16	なし		不明
A	SK30	0.60+	0.40+	0.08	なし		SD01を(切)
A	SK31	0.88	0.60	0.05	弦生土器		SP09に(切)される
A	SK32	2.05	1.40	0.15	弦生土器		未生中間
A	SK33	1.90	1.18	0.17	弦生土器		SD14(切)される
A	SK34	1.28	1.08	0.16	弦生土器		未生中間
A	SK35	1.16	0.88	0.03	弦生土器		SD03に(切)される
A	SK36	0.88	1.08	0.15	弦生土器		未生中間
							SD17-SK38(切)される

地区	道 墓番号	長 軸	横 梯 高 度(m)	通 横 梯 高 度		石 土 �渣 物	時 期	備 考
				規 模	最 深 度			
A	SK37	1.35	1.24	0.09	0.17	發生土器	生中期	SD21に切られる
A	SK38	0.70	0.62	0.17	0.17	發生土器	生中期	SD01-S1722に切られる
A	SK39	1.18	0.94	0.46	0.46	發生土器	生中期	
A	SK40	1.22	1.07	0.11	0.17	發生土器	生中期	SK28に切られる
A	SK41	0.47+	0.65	0.07	0.07	發生土器	生中期	SD15に切られる
A	SP42	0.43	0.34+	0.07	0.07	なし	不明	SD03に切られる
A	SP43	0.26	0.23	0.05	0.05	なし	不明	
A	SP44	0.28	0.24	0.03	0.03	なし	不明	
A	SP45	0.21	0.18	0.23	0.23	なし	不明	
A	SP46	0.34	0.28	0.16	0.16	なし	不明	
A	SP47	0.42	0.30	0.09	0.09	なし	不明	SD11を切る
A	SP48	0.24	0.21	0.33	0.33	なし	不明	
A	SP49	0.26	0.21	0.15	0.15	なし	不明	
A	SP50	0.20	0.19	0.11	0.11	なし	不明	
A	SP51	0.20	0.19	0.13	0.13	なし	不明	
A	SP52	0.42	0.33	0.06	0.06	なし	不明	
A	SP53	0.17	0.12	0.07	0.07	なし	不明	
A	SP54	0.19	0.16	0.05	0.05	なし	不明	
A	SP55	0.22	0.17	0.11	0.11	なし	不明	
A	SP56	0.23	0.20	0.11	0.11	なし	不明	
A	SP57	0.32	0.32	0.11	0.11	なし	不明	
A	SP58	0.21	0.18	0.11	0.11	なし	不明	
A	SP59	0.43	0.38	0.18	0.18	なし	不明	
A	SP60	0.29	0.28	0.06	0.06	なし	不明	
A	SP61	0.36	0.30	0.07	0.07	發生土器	生中期?	
A	SP62	0.28	0.25	0.10	0.10	發生土器	生中期?	
A	SP63	0.34	0.27	0.04	0.04	なし	不明	
A	SD64	1.410+	輪1.35	0.38	0.38	發生土器	生中期	SD24を切る、SD3-97-18-26に切られる
A	SD65	2.33+	輪1.92+	0.13	0.13	なし	不明	SD06-10-95に切る
B	SD01	1.800+	輪1.00+	1.10+	1.10+	發生土器	生中期?	
B	SD02	2.30+	輪1.82	0.19	0.19	發生土器	生中期	SD108を切る、SX03
B	SD03	4.18+	輪1.70	0.10	0.10	發生土器	生中期?	
B	SD05	7.48+	輪1.50	0.12	0.12	發生土器	中世以降	SD01を切る
B	SD06	2.66	輪1.59	0.08	0.08	なし	中世以降	
B	SD09	9.70+	輪1.15	0.11	0.11	發生土器	生中期	SD108-109-108に切る
B	SD10	11.50+	輪0.36	0.19	0.19	發生土器	中世以降	SD01-S109-108に切る

地区	遺構番号	遺構規模(m)		長軸	短軸	最深度	出土遺物	時期	備考
		長	幅						
B	SK11	1.17	0.80	0.07	なし	なし	不明	不明	不明
B	SK12	1.06	0.88	0.10	なし	なし	不明	不明	不明
B	SP13	0.36	0.30	0.15	なし	なし	不明	不明	不明
B	SP14	0.22	0.19	0.20	なし	なし	不明	SD106を切る	中世以降
B	SD16	5.96+	0.65	0.15	発生土器	なし	不明	SD106と切り離す	中世以降
B	SD17	10.13+	0.50	0.11	発生土器	なし	不明	SD106・107を切る	中世以降
B	SD18	5.70+	0.48	0.12	発生土器	なし	不明	SD106を切る	中世以降
B	SD19	8.26+	1.18+	0.13	発生土器・石匁	なし	不明	SD17・18・47に切られる。南側に向かって傾くことある。SX01	中世以降
B	SD20	7.66	0.30	0.07	なし	なし	不明	SD106を切る	中世以降
B	SK21	3.27	1.64	0.21	発生土器	なし	不明	土器多出土	中世以降
B	SP22	0.60	0.54	1.20	なし	不明	生中間	生中間	生中間
B	SD23	10.62	1.50	0.25	発生土器・緑色磁灰瓦片	なし	不明	生中間	生中間
B	SP24	0.71	0.70	0.04	なし	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SD25	4.86	0.46	0.12	なし	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SD26	6.51	0.48	0.09	なし	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SD27	7.57	0.96+	0.28	発生土器・土製円錐・緑色磁灰瓦片	なし	不明	SD106と切り離す。SD14との切り合、端部は不明顯。SX02	生中間
B	SK28	2.56	1.46	0.17	発生土器・黒色安山岩片	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SK29	2.17	1.04	0.12	発生土器・ヒスマルク石	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SK31	0.83	0.50	0.13	なし	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SD22	5.67+	0.64	0.09	なし	なし	不明	SD27を切る	中世以降
B	SK33	2.34	0.97	0.30	発生土器	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SD44	2.60+	0.45	0.15	なし	なし	不明	SD27との切り合、柱穴は不明顯	生中間
B	SD26	13.32+	0.86	0.12	発生土器	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SK39	1.15	0.50	0.09	なし	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SD40	9.40+	0.40	0.10	なし	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SD42	5.50+	0.62	0.02	発生土器	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SD46	3.90+	1.40	0.10	発生土器	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SD47	15.48+	1.00	0.16	発生土器	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SD48	8.26	0.87	0.15	なし	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SP52	0.53	0.42	0.24	なし	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SK53	1.24	0.30+	0.06	発生土器	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SK54	1.02	0.74	0.08	発生土器	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SK55	0.61	0.41	0.10	なし	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SD67	0.76+	0.40	0.05	発生土器	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SD68	3.35+	0.93	0.16	発生土器	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SP59	0.36	0.32	0.18	発生土器	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SP60	0.22	0.20	0.20	なし	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SP61	0.29	0.27	0.10	なし	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SP62	0.36	0.28	0.13	なし	なし	不明	柱穴か	生中間
B	SP63	0.35	0.32	0.06	なし	なし	不明	柱穴か	生中間

地区	遺構番号	遺構地盤(m)			出 土 遺 物	時 期	備 考
		長 軸	短 軸	最深度			
B	SP64	0.34	0.20	柱樑	生中期?		
B	SD65	3.69	0.75	0.19	生中期?		
B	SK66	2.14	0.84	0.05	生中期?	SP63?; Dp1; Pt2	
B	SP69	0.32	0.31	0.23	生中期?		
B	SP70	0.37	0.35	0.20	生中期?		
B	SP71	0.38	0.32	0.27	生中期?		
B	SP72	0.45	0.34	0.27	生中期?		
B	SP73	0.20	0.13	0.13	生中期?		
B	SP74	0.14	0.12	0.12	生中期?		
B	SP75	0.20	0.18	0.19	柱樑	生中期?	
B	SP76	0.21	0.16	0.12	柱樑	SP77&78	
B	SP77	0.21	0.17	0.08	柱樑	SP76?; Pt2	
B	SD78	1.90	0.26	0.26	生中期?; 剥製石斧; 石器; 錫色邊緣岩石片		
B	SP88	0.24	0.23	0.24	生中期?		
B	SP92	0.38	0.49	0.17	生中期?; 柱樑	生中期?	
B	SD93	1.91+	0.28	0.16	生中期?	SD97?; Pt2; SX01	
B	SK94	1.10	0.88	0.14	生中期?		
B	SK95	1.56	0.92	0.13	生中期?	SX02	
B	SP96	0.34	0.20	0.84	柱樑		
B	SP97	0.37	0.25	0.07	柱樑	生中期?	
B	SP98	0.34	0.32	0.13	柱樑	生中期?	
B	SP99	0.30	0.25	0.08	柱樑	生中期?	
B	SP100	0.33	0.39	0.10	柱樑	生中期?	
B	SP101	0.17	0.12	0.04	柱樑	生中期?	
B	SP102	0.28	0.22	0.20	柱樑	生中期?	
B	SP103	0.32	0.20	0.09	柱樑	生中期?	
B	SP104	0.20	0.10+	0.16	柱樑	生中期?	
B	SK105	1.60	0.92	0.23	土製陶盤	生中期?	
B	SD106	1.36+	0.60+20	0.04	生中期?	SD106?; 16-17 SK94?; Pt2	
B	SK107	0.76	0.74	0.15	生中期?	生中期?; SX02	
B	SD108	1.90+	0.60+50	0.08	生中期?	SD108?; Pt2	
B	SD109	1.82+	0.60+4	0.08	生中期?	生中期?	
B	SP110	0.17	0.11	0.05	柱樑	生中期?	

第5表 遺物観察表(土器・土製品)

国名	通名	学名	日本語名	種別	器種	口径	底径	高さ	外寸	内寸	外形	裏文	参考文献	調査地	断土	焼成	色	調査年	備考
口縁幅	口縁高さ	部	内面																
22	48	A	SK16	承式土器	白陶	18.6	7.8	ハケ後ナメ	ハケ	ナメ	円形文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/5.3	10/18/5.6	円形文足上脚付	
22	49	A	SD17	承式土器	蓋?	不明	7.0	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/27/6.3	10/18/4.2	ナメ土器	
22	50	A	SD18	承式土器	不明	2.6	2.6	ハケ後ナメ	ナメ	ナメ	円形浮文	口縁高さ	ナメ	やや粗	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
22	51	A	SD22	承式土器	不明	4.6	4.6	ハケ後ナメ	ナメ	ナメ	円形浮文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/27/4.2	10/18/4.2	ナメ土器	
22	52	A	SD26	承式土器	蓋?	不明	7.0	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/27/6.3	10/18/5.2	ナメ土器	
22	53	A	SK28	承式土器	蓋?	不明	7.0	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/27/6.3	10/18/5.2	ナメ土器	
22	55	A	SK27	承式土器	蓋?	不明	7.0	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/27/6.3	10/18/5.2	ナメ土器	
23	56	A	SK29	承式土器	蓋?	15.0	7.0	ハケ後ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/7.2	10/18/7.2	ナメ土器	
23	57	A	SK30	承式土器	蓋?	20.6	7.0	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
23	58	A	SK31	承式土器	蓋?	5.0	5.0	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
23	59	A	SK32	承式土器	蓋?	15.0	7.0	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
23	60	A	SK33	承式土器	蓋?	20.0	7.0	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
23	61	A	SK34	承式土器	蓋?	18.0	7.0	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
23	62	A	SK35	承式土器	蓋?	4.6	4.6	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
23	64	A	SK38	承式土器	蓋?	20.6	7.0	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
23	65	A	SK39	承式土器	蓋?	25.0	7.0	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
23	66	A	SK39	承式土器	蓋?	25.0	7.0	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
23	67	A	SK39	承式土器	蓋?	25.0	7.0	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
23	68	A	急合模	承式土器	蓋?	18.4	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
23	69	A	急合模	承式土器	蓋?	21.0	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
23	70	A	急合模	承式土器	蓋?	16.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
23	71	A	急合模	承式土器	蓋?	15.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
23	72	A	急合模	承式土器	蓋?	15.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
24	73	B	SD1	承式土器	小豆鉢	11.8	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
24	74	B	SD01	承式土器	小豆鉢	11.4	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
24	75	B	SD01	承式土器	小豆鉢	11.4	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
24	76	B	SD10	承式土器	小豆鉢	11.4	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
24	77	B	SD10	承式土器	小豆鉢	11.4	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
24	78	B	SD10	承式土器	小豆鉢	11.4	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
24	79	B	SD10	承式土器	小豆鉢	14.0	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
24	80	B	SD11	承式土器	小豆鉢	21.0	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
24	81	B	SD21	承式土器	蓋?	20.5	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
24	82	B	SD21	承式土器	蓋?	8.0	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
24	84	B	SD21	承式土器	蓋?	22.6	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
24	85	B	SD21	承式土器	蓋?	30.0	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
24	86	B	SD21	承式土器	蓋?	23.4	5.7	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
24	87	B	SD21	承式土器	蓋?	20.5	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
25	89	B	SD21	承式土器	蓋?	6.7	ナメ	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
25	90	B	SD21	承式土器	蓋?	23.6	5.7	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
25	91	B	SD28	承式土器	蓋?	25.0	7.0	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	
25	92	B	SD28	承式土器	蓋?	25.0	7.0	ナメ	ナメ	ナメ	直線文	口縁高さ	ナメ	新	良好	10/18/6.4	10/18/6.4	ナメ土器	



國名	省名	地區	地點	種別	器種	口徑	底徑	高	外 面	內 面	外 面	內 面	外 面	內 面	外 面	內 面	外 面	內 面
27	134	B	SX01	弦生土器	壺	19.0			ハケ後ナフ				胎土	燒成				
27	135	B	SX01	弦生土器	壺	15.0	80		ハケ後ナフ			密	良好	25Y7/2	25Y7/1	25Y7/2	25Y7/1	外面留有 痕跡
27	136	B	SX06	弦生土器	壺	15.0			ナフ			密	良好	25Y7/2	10YR6/3	25Y7/2	10YR6/3	黏土上一部分 多量に含む
27	137	B	SX06	弦生土器	壺	15.6			ハケ後ナフ			やや粗	良好	25Y7/3	10YR6/3	25Y7/3	10YR4/2	口沿部画取り
27	138	B	SX06	弦生土器	壺	17.8			ハケ後ナフ			粗	良好	10YR7/3	10YR6/4	25Y7/3	10YR6/4	口沿部画取り
27	139	B	SZ03	弦生土器	壺	23.5			ハケ後ナフ			密	良好	25Y7/2	25Y7/2	5Y4/1	内面付着	
27	140	B	SZ03	弦生土器	壺	23.5			ハケ後ナフ			密	良好	10YR7/3	10YR6/3	10YR7/2	10YR7/2	上面痕跡0.38% 互に同 體
27	141	B	SZ03	弦生土器	壺	15.6			ハケ後ナフ			やや粗	良好	25Y7/1	10YR7/4	25Y7/2	10YR7/2	口沿部画取り
27	142	B	SZ03	弦生土器	壺	22.0			ハケ後ナフ			密	良好	25Y7/1	10YR7/2	25Y7/2	10YR7/2	口沿部画取り
27	143	B	SZ03	弦生土器	壺	17.8			ハケ後ナフ			密	良好	25Y7/3	10YR6/4	25Y7/2	10YR6/4	口沿部画取り
27	144	B	SZ03	弦生土器	壺	17.2			ハケ			密	良好	10YR7/3	10YR6/5	21YR6/2	10YR6/2	口沿部画取り
27	145	B	SZ03	弦生土器	壺	19.8			ハケ後ナフ			密	良好	10YR7/2	10YR6/2	21YR6/2	10YR6/2	口沿部画取り
27	146	B	SZ03	弦生土器	壺	19.8			ハケ後ナフ			密	良好	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	口沿部画取り
27	147	B	SZ03	弦生土器	壺	15.6			ハケ後ナフ			密	良好	25Y7/4	25Y7/4	25Y7/2	25Y7/2	口沿部画取り
27	148	B	SZ03	弦生土器	壺	14.0			ハケ後ナフ			密	良好	25Y7/4	25Y7/4	25Y7/2	25Y7/2	口沿部画取り
27	149	B	SZ03	弦生土器	壺	5.5			ハケ			密	良好	25Y5/4	25Y5/2	25Y5/2	25Y5/2	口沿部画取り
27	150	B	SX01	弦生土器	壺	6.0			ハケ			密	良好	25Y6/2	25Y6/2	25Y6/2	25Y6/2	口沿部画取り
28	151	B	SZ07	弦生土器	壺				ハケ			やや粗	良好	25Y7/3	5Y4/1	10YR7/2	5Y4/1	斜面
28	152	B	SZ07	弦生土器	壺				ナフ			胎面	良好	10YR7/1	10YR7/1	10YR7/1	10YR7/1	斜面
28	153	B	SZ07	弦生土器	壺				ナフ			胎面	良好	10YR6/2	25Y6/3	25Y6/3	25Y6/3	斜面
28	154	B	SZ07	弦生土器	壺				ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/2	25Y6/2	25Y6/2	斜面
28	155	B	SZ07	弦生土器	壺				ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	斜面
28	156	B	SZ07	弦生土器	壺				ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	斜面
28	157	B	SZ07	弦生土器	壺				ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	斜面
28	158	B	SZ07	弦生土器	壺	16.0			ハケ後ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	斜面
28	159	B	SZ07	弦生土器	壺	18.0			ハケ後ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	斜面
28	160	B	SZ07	弦生土器	壺	20.0			ハケ後ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/3	10YR6/3	10YR6/3	斜面
28	161	B	SZ07	弦生土器	壺	18.0			ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	斜面
28	162	B	SZ07	弦生土器	壺	14.0			ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/3	10YR6/2	10YR6/2	斜面
28	163	B	SZ07	弦生土器	壺	26.0			ハケ後ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	斜面
28	164	B	SZ07	弦生土器	壺	19.0			ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	斜面
28	165	B	SZ07	弦生土器	壺	17.0			ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/2	25Y5/2	25Y5/2	斜面
28	166	B	SZ07	弦生土器	壺	11.0			ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/3	10YR6/3	10YR6/2	斜面
28	167	B	SZ07	弦生土器	壺	13.0			ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/3	10YR6/3	10YR6/2	斜面
28	168	B	SZ07	弦生土器	壺	14.2			ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/3	10YR6/4	25Y6/3	斜面
29	169	B	SZ07	弦生土器	壺	29.0	15.0		ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/3	10YR6/3	10YR6/3	斜面
29	170	B	SZ07	弦生土器	壺	5.0			ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/3	10YR6/3	10YR6/3	斜面
29	171	B	SZ07	弦生土器	壺	5.5			ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/2	5Y4/1	胎面剥落	
29	172	B	SZ07	弦生土器	壺	5.5			ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	胎面剥落
29	173	B	SZ07	弦生土器	壺	11.5			ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/3	10YR6/3	10YR6/2	胎面剥落
29	174	B	SZ07	弦生土器	壺	18.2			ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/3	10YR6/3	10YR6/2	胎面剥落
29	175	B	SZ08	弦生土器	壺	29.8			ナフ			胎面	良好	10YR6/2	10YR6/3	10YR6/3	10YR6/2	胎面剥落
29	176	B	SZ08	弦生土器	壺	11.0			ナフ			胎面	良好	25Y6/2	25Y6/2	25Y6/2	25Y6/2	胎面剥落
29	177	B	SZ08	弦生土器	壺	11.0			ナフ			胎面	良好	10YR7/4	10YR6/3	10YR6/3	10YR6/3	胎面剥落



文書番号	題名	著者	種別	器種	口径	底径	器高	調査	整備	外観	内観	文	絵	断面	土	灰	輪	備考
31 219 B	試掘調査水玉器	著	器	壺	190			ハケ後ナメ	ハケ後ナメ	ハケ	ハケ	上部墨色、斜行鉛筆文、斜行鉛筆文	墨色、斜行鉛筆文	墨色、斜行鉛筆文	やや粗	良好	10YR7/3 10YR7/4	頭部タハゲ
31 220 B	急合柄 純生土器	不明	器	壺	230		不明	ハケ無ガタ	ハケ無ガタ	ハケ	ハケ	斜行鉛筆文、斜行鉛筆文	斜行鉛筆文	斜行鉛筆文	やや粗	良好	25Y6/2 25Y6/2	
31 221 B	急合柄 外生土器	著	器	壺	220			ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	斜行鉛筆文	斜行鉛筆文	斜行鉛筆文	やや粗	良好	25Y7/2 25Y7/2	かわ所内面丸い穿孔
31 222 B	急合柄 外生土器	著	器	壺	200			ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	斜行鉛筆文	斜行鉛筆文	斜行鉛筆文	やや粗	良好	10YR7/2 10YR7/2	
31 223 B	急合柄 純生土器	著	器	壺	196			ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	斜行鉛筆文	斜行鉛筆文	斜行鉛筆文	やや粗	良好	10YR7/3 10YR7/2	
31 224 B	美土	外生土器	器	壺	225			ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	斜行鉛筆文	斜行鉛筆文	斜行鉛筆文	やや粗	良好	10YR8/3 10YR8/3	
31 225 B	排水溝 純生土器	不明	器	壺	74			ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	斜行鉛筆文	斜行鉛筆文	斜行鉛筆文	やや粗	良好	10YR6/3 10YR6/3	1ヶ月を含むG、茎本灰土層の間に出入り
31 226 B	急合柄 純生土器	著	器	壺	50			ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	斜行鉛筆文	斜行鉛筆文	斜行鉛筆文	やや粗	良好	25Y7/4 25Y7/4	底面平

(47) • 木製品

測定番号	測定位置	器具	幅	長さ	厚さ	杆
32-227 A	SK27 石板	1.5	1.0	0.9	綠色風化岩	管子の本體部分
32-228 B	SU19 破片	5.3	4.8	0.8	黃岩	翼面に斜面があり、穿孔部は斜方約1.0cm
32-229 B	SU06 破片	2.0	1.5	0.8	黃岩	側面の側に約0.9cm、刃部前面の先端はコーンクロスか
32-230 B	SU06 石頭	11.4	3.2	1.0	黃岩	前面は斜V字状
32-231 B	SU22 不明	8.7	5.7	1.2	厲化石岩	
32-232 B	SU22 不明	4.8	3.8	1.3	綠色風化岩	
32-233 B	SU78 上断面	5.8	5.8	3.4	綠色岩	上型始祖恐竜翼行骨
32-234 B	SU78 下断面	2.3	2.3	1.0	黑色風化岩	円錐形を有す
33-235 B	SP22 柄柱	17.9	24.7	2.3	2.3	側面有脊
33-236 B	SP92 柄柱	30.9	20.1	2.1	2.1	下部二重丸底
33-237 B	SP66 柄柱	47.0	38.4	2.1	2.1	下部二重丸底

700

時事小説

5Y 7/2:版印 6/13K 5/1:K 4/1:K 2/1:K

75Y エジソンランプ 5/13W 5/2W(オーバー) 4/2W(オーバー)  
N 3.0V 電球 2本組

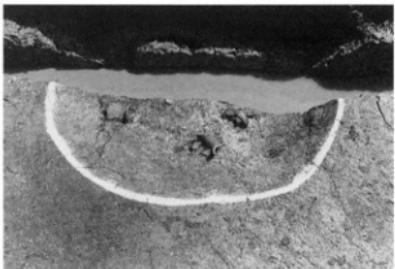




遺構検出状況全景（東から）



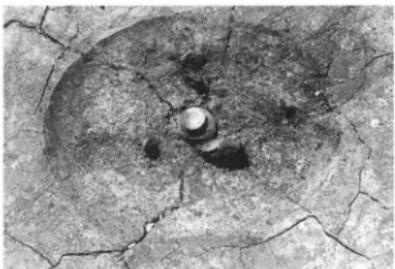
SR01A ライン断面（南東から）



SK27遺物出土状況（北から）



SK28遺物出土状況（北から）



SK31遺物出土状況（東から）

写真図版2 A区



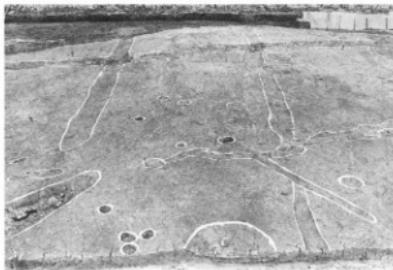
SD03完掘状況（西から）



SD05・06完掘状況（南から）



SD07・13・24完掘状況（南から）



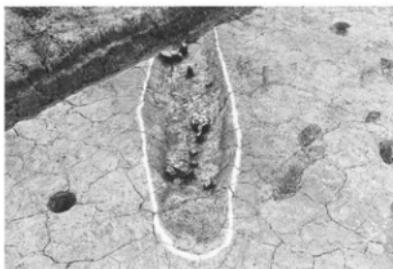
SD09・10完掘状況（南から）



SD17・18・19完掘状況（南から）



SD16遺物出土状況（東から）



SD07遺物出土状況（北東から）



作業風景

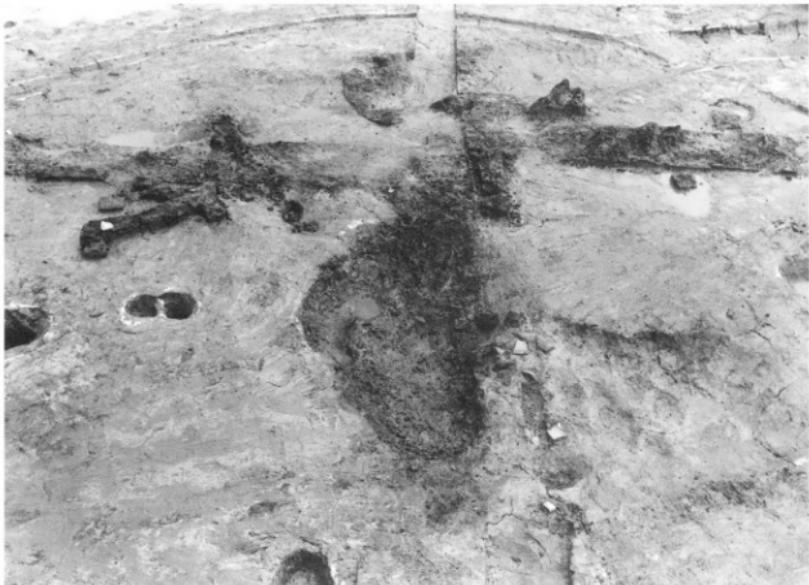


SX01全景（北から）

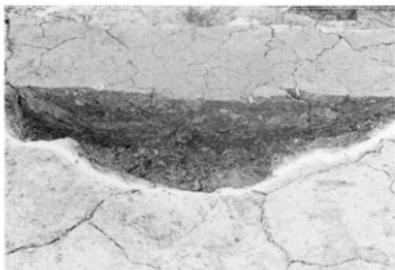


SX01全景（北西から）

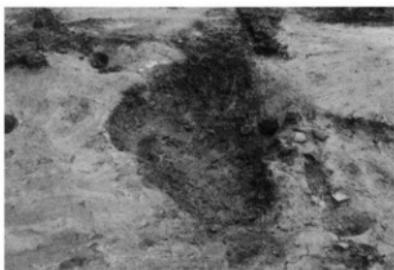
写真図版4 B区



SX01炭化材検出状況（東から）



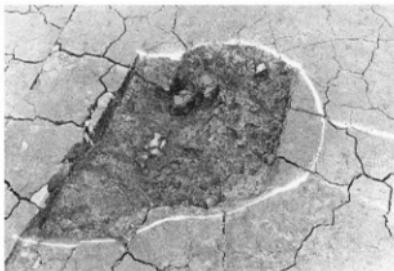
SK105(SX01)断面（南から）



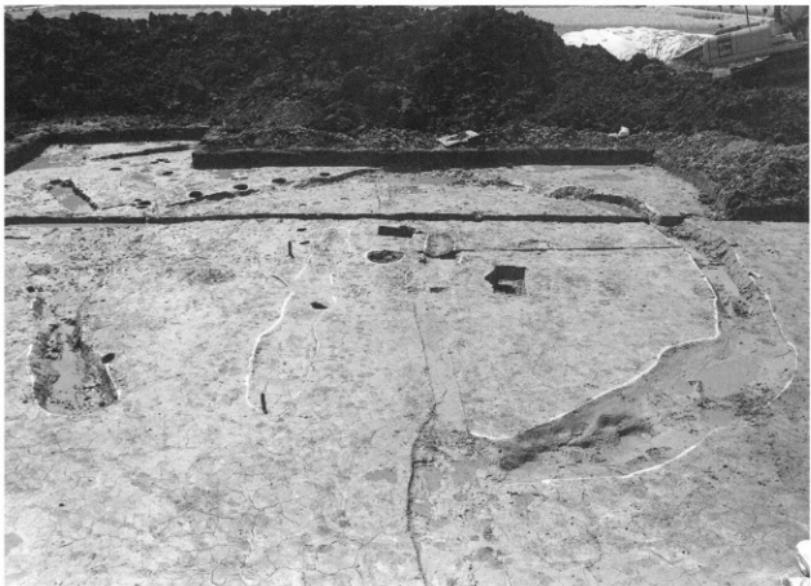
SK105(SX01)炭化物出土状況（東から）



SD09(SX01)断面（南西から）



SD93(SX01)遺物出土状況（西から）

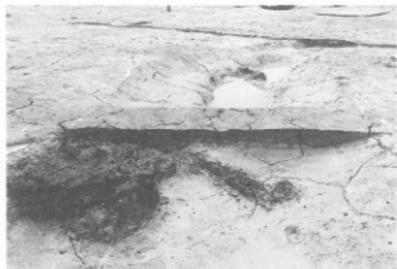


SX02全景（北から）



SX02全景（北西から）

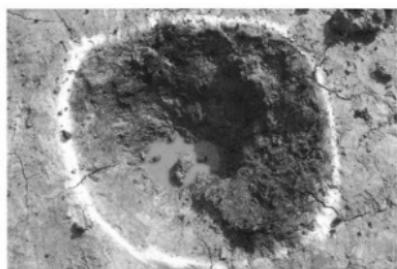
写真図版 6 B区



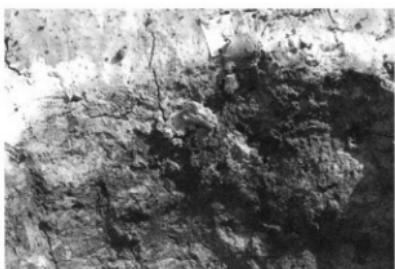
SD23 (SX02) 炭化物出土状況（南西から）



SP96 (SX02) 木柱根出土状況（西から）



SK107 (SX02) 炭化物出土状況（南から）



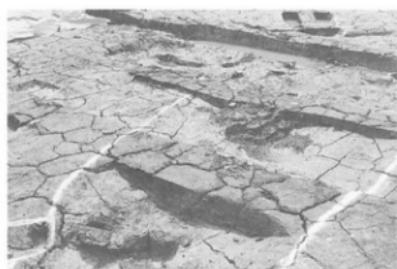
SK107 (SX02) 炭化物出土状況（南から）



SD23 (SX02) 断面（南から）



SD23 (SX02) 断面（西から）



SD27 (SX02) 遺物出土状況（北から）



SD23 (SX02) 遺物出土状況（西から）



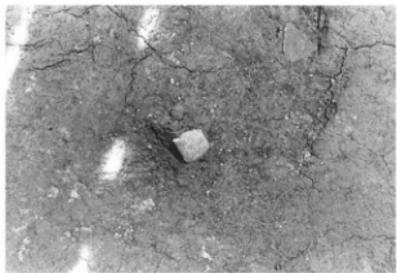
SB01完掘状況（南西から）



SD78上層遺物出土状況（西から）



SP62断面（南から）



SD78上層遺物出土状況（南から）



SD78上層遺物出土状況（西から）

写真図版 8 B区



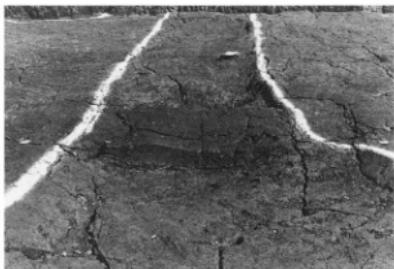
SK21遺物出土状況（北から）



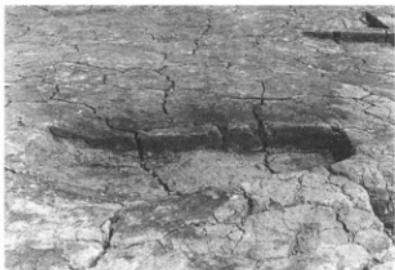
SK21発掘状況（南から）



SP22木柱根検出状況（北から）



SD05断面（南から）



SK54断面（南から）



表土掘削（北西から）



作業風景



作業風景

写真図版9 出土遺物(弥生土器)



4



10



22



25



39



40

写真図版10 出土遺物(弥生土器)



48



56



83



88



107



161

写真図版11 出土遺物(弥生土器)



170



190



178



179



183



184

写真図版12 出土遺物(弥生土器)



26



86

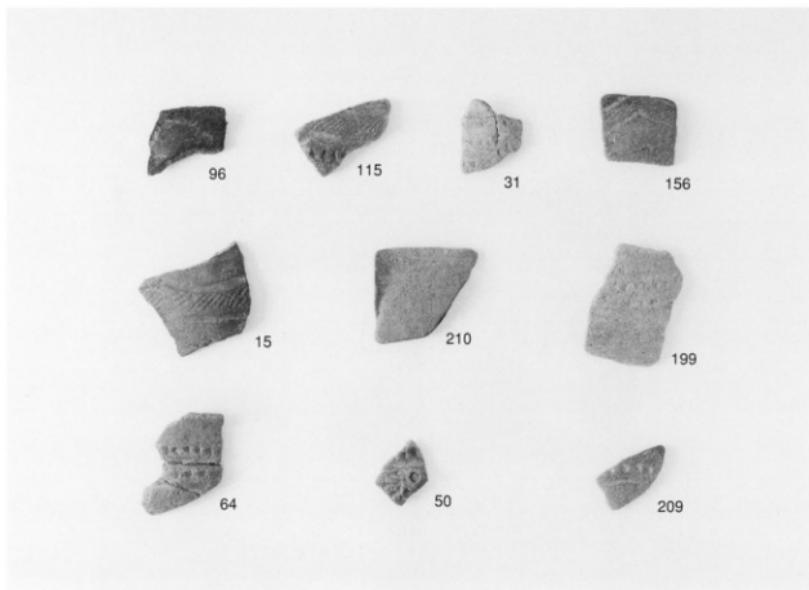
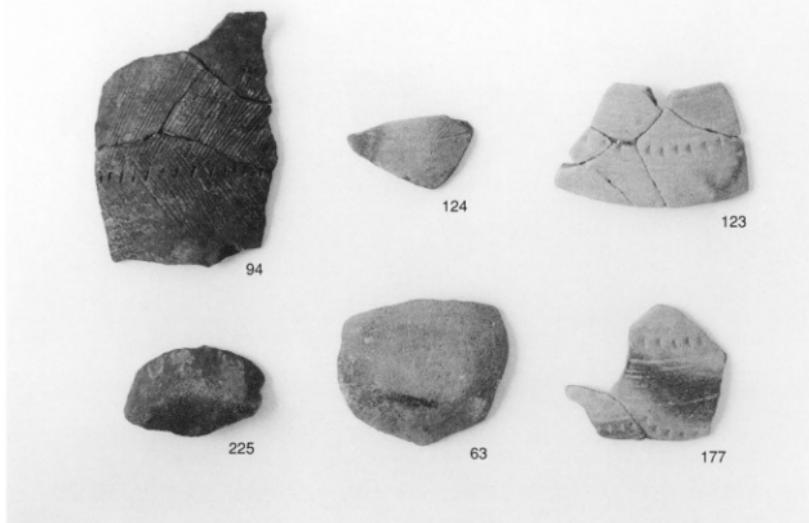


169

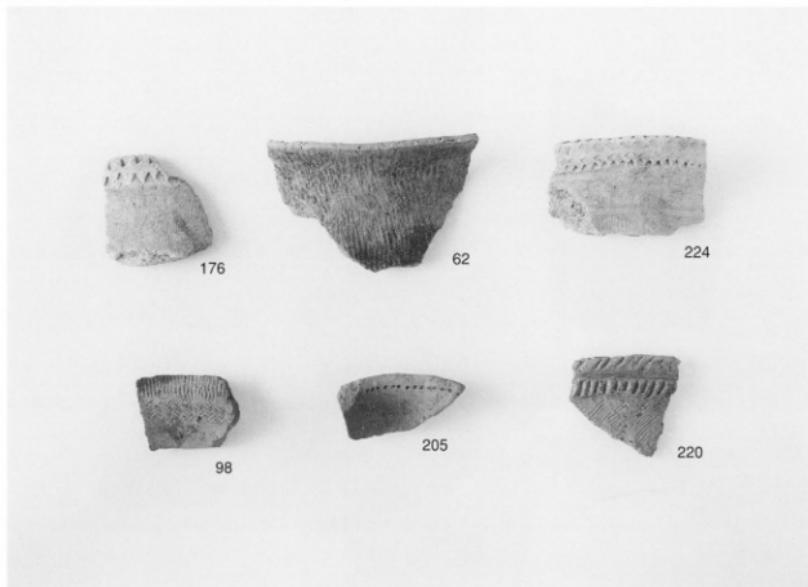


198

写真図版13 出土遺物(弥生土器)



写真図版14 出土遺物(弥生土器・土製品)



写真図版15 出土遺物(石)



230



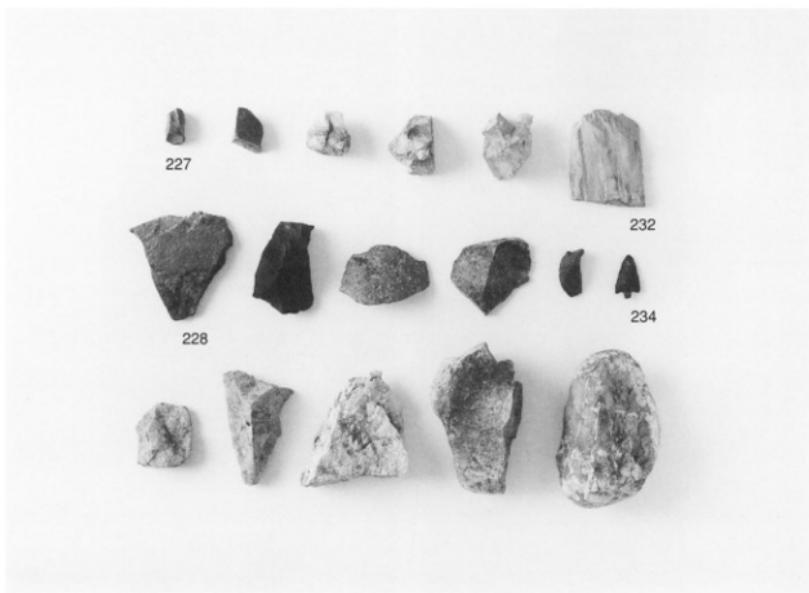
229



233



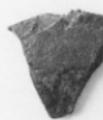
231



227

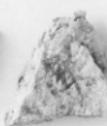


232



228

234



写真図版16 出土遺物(木製品)



235



236



237

## 報告書抄録

ふりがな 書名	たかしまAいせきはぐつちょうさほうこく 高島A遺跡発掘調査報告							
副書名	-射水市立新湊南部中学校用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査-							
編著者名	金三津英則（射水市教育委員会） 矢島博文・宮脇満・澤田雅志（株式会社エイ・テック）							
編集機関	射水市教育委員会、株式会社エイ・テック							
発行機関	射水市教育委員会							
所在地	〒933-0292 富山県射水市加茂中部893番地 TEL 0766-59-8092							
発行年月日	2007年3月16日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	°			
たかしま Aいせき 高島A遺跡	富山県 射水市 鏡宮	211 (203)	027 (028)	36度 45分 17秒	137度 05分 03秒	20060707 ～ 20060915	1,736.6	中学校 用地建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
高島A遺跡	集落	弥生時代 (中期)	平地式建物・掘立柱建物・溝・土坑 柱穴・自然河川	弥生土器・土製円盤 崩裂石斧・石包丁・石鎌・玉未成品・木柱根		弥生時代中期の建 物跡を検出。栗林 式土器などの搬入 品を含む。		

\*コード欄の( )の数字は、合併前の富山県埋蔵文化財保護地区の遺跡番号を示す。

平成19年3月16日発行

## 高島A遺跡発掘調査報告

-射水市立新浜南部中学校用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査-

編集 射水市教育委員会

株式会社エイ・テック

発行 射水市教育委員会

〒933-0292 富山県射水市加茂中部893

TEL 0766-59-8092

印刷 中村印刷工業株式会社

